

大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群に見るイサム・ノグチと大谷幸夫による設計過程—上 原案完成まで

中村 尚明

はじめに

横浜市青葉区と東京都町田市にまたがる約97ヘクタールの豊かな丘陵地に、中央児童厚生施設「こどもの国」がある¹。園内北西部、A地区と呼ばれた一画に、かつて彫刻家イサム・ノグチ(1904-1988)と建築家大谷幸夫(1924-2013)が共同してデザインした「A地区児童遊園」と「児童館」があった。これらの施設は1965年に設計が始まり、翌66年に施工された²。1933年作の《プレイマウンテン》(模型)以来、数々の児童遊園(プレイグラウンド)をデザインし、提案してきたイサム・ノグチにとって、「こどもの国」での仕事は初めて実施に至ったプレイグラウンド作品となった。早くも着工前から注目を集め、1966年から1967年にかけて建築専門誌でも大きく取り上げられた³。しかし、当初の計画のすべてが実施されたわけではなかった。まず屋外スケート場(スケートリンク)が1965年末頃、次に児童館とその周辺施設が翌年8月に竣工し、前者は1966年1月15日、後者は1966年秋頃に来園者の利用に供された⁴。建設が期待された残りの部分のごく一部を例外として実施に移されることはなかった。完成した施設も老朽化を理由に1985年にほとんどが取り壊され⁵、代わりに別の設計者による「児童センター」、大小の温室をはじめとする新しい施設が建てられ、それに伴い敷地の様相も変化した。往

1 「こどもの国」は皇太子殿下(現上皇陛下)御結婚を記念して1965年5月5日に国(厚生省所轄：当時)の中央児童厚生施設として開園した。建設資金はご成婚に際して国民から寄せられた祝い金が端緒となり、国費及び民間からの寄付で賄われた。当初は経営主体となる国の特殊法人の設立が遅れたため、財団法人こどもの国建設協力が運営し、開園後も施設建設は継続していた。開園から1年半後の1966年11月に特殊法人こどもの国協会が発足した。現在は社会福祉法人こどもの国協会が運営している。用地は旧日本陸軍の弾薬製造所兼保管庫で、第二次大戦後に米軍が使用した後返還された。「こどもの国」の成立過程については以下を参照。

『こどもの国20年の歩み』社会福祉法人こどもの国協会、1985年／池田邦二編『こどもの国三十年史』社会福祉法人こどもの国協会、1996年／三国治編『こどもの国50年史』社会福祉法人こどもの国協会、2016年／金子淳「象徴天皇制の磁場に生まれた“夢の空間”—中央児童厚生施設『こどもの国』の設立過程から—」『静岡大学生涯学習教育研究』No.11(2009年)pp.19-37

2 『こどもの国50年史』では、1965年設計、翌年8月完成とあるが、大谷研究室旧蔵資料群の図面は1966年に作図されたものも多い。また同書では、同じイサム・ノグチ設計のスケートリンクを児童館・児童遊園とは別の施設として紹介している。これは事業(予算)区分によるものと思われるが、小論ではこれらを一体の施設として論ずる。『こどもの国50年史』pp.261-262

3 ノグチと大谷による「こどもの国」児童館・児童遊園は設計段階から竣工後にかけて次の雑誌で紹介された。イサム・ノグチ、大谷幸夫「こどもの国・児童館と遊園地」『SD』No.13(1966年1月)pp.61-63／「こどもの国 遊園・児童館／イサム・ノグチ、大谷幸夫」『建築』No.66(1966年2月)pp.84-88／大谷幸夫、イサム・ノグチ「こどもの国児童館と遊園地」『建築』No.72(1966年8月)pp.93-95／「こどもの国・児童館 屋根のある遊び場 横浜市港北区奈良町こどもの国 設計 大谷幸夫」『新建築』42(9)(1967年9月)113-119／“The Children’s Land Juvenile Hall (Playground with Roofs)” *The Japan Architect. International Edition of Shinken-chiku*, No.136(November 1967), pp.21-27

4 「スケートリンク開く 1月15日から—こどもの国—」『こどもの国ニュース』No.3(1966年1月)財団法人「こどもの国建設協力会」事務局／「完成近づく児童遊園」『こどもの国ニュース』No.11(1966年10月)／『こどもの国50年史』p.262

5 『こどもの国50年史』p.264、資料編p.22

時の面影を今に伝えるものとしては、児童館へのアプローチの一部であった石積み擁壁に縁取られた通路と門、それらに付随する旧公衆便所と階段、そして児童館敷地の中心に位置した固定遊具《丸山》と児童館西側の《小橋》などである。児童館敷地の北にはイサム・ノグチがデザインした遊具《オクテトラ》がいくつか置かれているが、当初に計画されたものではなく、A地区児童遊園オープンの3年後、1969年に彫刻家が寄贈したものである⁶。

これまで「こどもの国」児童館・A地区児童遊園のオリジナル・デザイン(原案)を示す資料と考えられてきたのは、前述の雑誌に写真掲載された石膏模型(fig.1)と、『建築』誌1966年2月号に掲載された配置図(1:1200)である。その他の資料としては、彫刻家と建築家それぞれのごく簡潔な文章と、竣工前後の現場写真、配置図やイサム・ノグチの遊具、建築部分の設計図とスケッチ(いずれも青焼)がいくつか知られている⁷。小論は美術史的観点から、「こどもの国児童館・A地区児童遊園」を彫刻家と建築家の共同による作品として位置付けることを目的とする。たとえ部分的実施に留まったとしても、あるいは既に施設が取り壊されたとしても、また仮に全く施工されなかったとしても、オリジナルの石膏模型と纏まった建築図面によってその全容が客観的に把握可能であるならば、それは既にプロジェクトではなく彼らの作品として成立しており、作曲家の楽曲のごとく、作品は存在するのである。そうであれば、原案はいかなるコンセプトでどのように作られたのか、またそれは設計から施工に至る過程でどのように変化し、何がどの程度まで実施されたのかを問うことで、作品を確認しなければならない。また、イサム・ノグチと大谷幸夫の共同はどのように行われたのか。こうした基本的な問題については、これまで史資料的に跡付けられておらず、実相を詳らかにしない⁸。

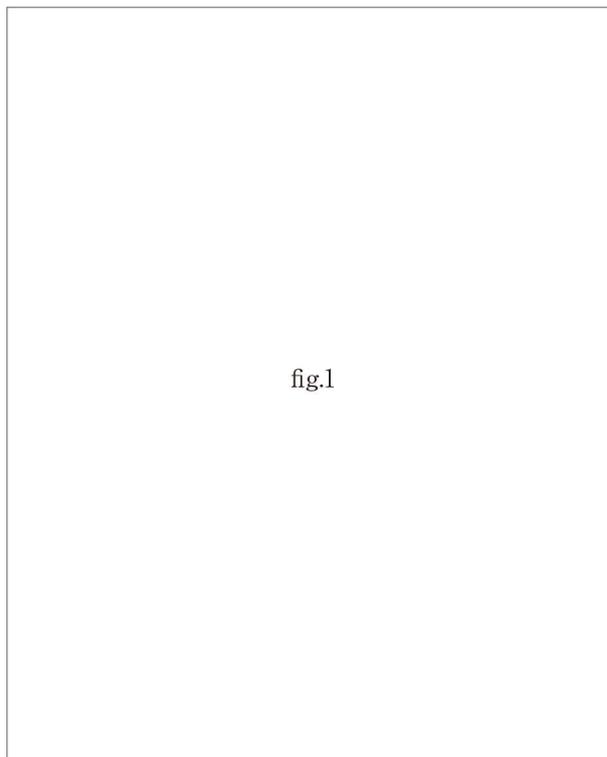


fig.1

fig.1 村井修《こどもの国児童館・A地区児童遊園石膏模型写真》1965-1966年、ノグチ・アーカイヴ(ニューヨーク)蔵
(Plaster Model of the Playground and Children's House in Zone A of the Kodomo No Kuni) 1965, Photo ©Osamu Murai, The Isamu Noguchi Archive (New York) ©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York/ARS-JASPAR, 写真©村井修

6 「『こどもの国』に変わった彫刻」『こどもの国ニュース』No.46(1969年12月)

7 註3の雑誌のほか、下記の資料がある。

Isamu Noguchi, *Isamu Noguchi A Sculptor's World*, Steidl, 2004(Original 1968), p.179, Pl.251-253/大谷幸夫「イサム・ノグチさんのこと」『PLAY MOUNTAIN イサム・ノグチ+ルイス・カーン』マルモ出版、1996年、pp.136-138/Ana Maria Torres, *Isamu Noguchi A Study of Space*, The Monacelli Press, 2000, pp.28-35/『「こどもの国」のデザイナー—自然・未来・メタポリズム建築』文化庁国立近現代建築資料館、2020年、pp.10-14

8 イサム・ノグチのプレイグラウンドの系譜を記述したシェイナ・ラリヴェーは次のように指摘している。「こどもの国のプレイグラウンドはしばしば完成したと記述される。しかし実際には何が元々建設されたのかを確かめることは困難である。建設場所は結局破壊されたからである。」(論者訳) Shaina D. Larrivee, (2011) "Playscapes: Isamu Noguchi's Design for Play," *Public Art Dialogue*, 1:01, 53-80, DOI: [10.1080/21502552.2011.536711](https://doi.org/10.1080/21502552.2011.536711), Note 59.

2023年、大谷幸夫の建築設計事務所である大谷研究室(1967年「設計連合」から分離)の代表山本敬則氏より、同研究室が所蔵する「こどもの国児童館・A地区児童遊園」の石膏模型(1:300)と、関連する図面、スケッチ等150余点一式を横浜美術館に寄贈したい旨の意向が示され、2023年度受贈に向けて手続きが進行している(本稿執筆時:2023年12月現在)。これら一群の資料全体を小論では「大谷研究室旧蔵『こどもの国児童館・A地区児童遊園』資料群」と呼び、文中では適宜「大谷研究室資料群」と略記する。資料の主体は手描きのオリジナル図面(鉛筆、トレーシングペーパー)で、設計図、設計補助図、試案段階に位置づけられる図面、構想スケッチ、コンタ(等高線)図等、上記の問題解明につながる資料が多数含まれており、新たな史実が浮かび上がりつつある。論者はこれらの資料を調査する機会に恵まれ目下継続中であるが、小論(上)はその最初の報告として、大谷研究室資料群の概要を示した後、代表的資料を取り上げて他の史資料と照応させながら1)大谷幸夫によるイサム・ノグチ参加以前の児童館プラン、2)イサム・ノグチによる児童館・児童遊園構想と大谷幸夫との共同設計の展開、3)石膏模型と原案配置図の内容(ランドスケープ・デザイン、個別遊具施設、児童館)を記述し、ノグチ参加前から児童遊園原案完成までの経緯を可能な限り跡付けることを目標とする。原案からの設計変更と施工の経緯については、大谷研究室資料群の目録とあわせて次稿(下)で記述する。小論上下をもって作品としての「こどもの国児童館・A地区児童遊園」の実相を明らかにすると共に、イサム・ノグチのプレイグラウンド作品群における本作の意義を考察しようとするものである。なお、大谷研究室資料群の図面等の図版は本来スキャニングによるべきであるが、現段階では用意できないため、論者が限られた条件下で撮影したものを著作権者の了解の下に使用する。

小論中の図面内容の特定については次の原則に従った。図及び各施設の名称、図番は図のタイトル欄の表記に、タイトル欄がない場合は図中の書き込みに基づく。タイトル欄、書き込み共にない場合の名称は、関連する他の図面の表記を参考に論者が作成し、識別のため冒頭に*を付した。

1. 大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群の概要

大谷研究室資料群は1)石膏模型1点(後述)と2)図面・スケッチ群157点からなる。2)は制作時期により、イサム・ノグチの実質的な設計参加(1965年9月)の前(A群)と以降(B群)の資料に分けることができる。また児童館関連図面は内容的に3案(内2案がA群)に大別されることが本調査で判明したため、それぞれ第1案、第2案、第3案とする。A、B両群を通して一部の図面には日付が記されている。図面・スケッチ群の作成は「こどもの国マスタープラン」を除き設計連合(当時)の大谷幸夫チーム、後の大谷研究室(一部は大谷幸夫本人)による。これらの資料群は大谷研究室に引き継がれ、2023年まで保管されていた。

A群は内容別に、以下の3グループに分類される。

a)環境開発センター(代表:浅田孝)作成の「こどもの国」計画の全体像を表すコンタ入りの配置図「マスタープラン」。青焼2件3点(2件とも南半分と北半分の2図から成るが、1件は南半分のみ現存) 計3点。

b)大谷幸夫が1964年にデザインした児童館第1案に関するもの 計27点。

内訳:(以下同)

- 図番と標題欄付き立面図断面図(青焼1点、こどもの国建設推進委員会への提出図面。昭和39年の年記と図番02をもつ)
 - 配置図エスキース(構想段階の素描。手描き7点：内2点は同一紙面に3案を、他は1点1案を示す)
 - 配置図(コンタ入り)・平面図(手描き6点、青焼1件3点：青焼は同一図を一件とする。以下同)
 - 鳥瞰スケッチ(手描き2点、青焼2件3点)
 - 敷地コンタ図・断面リスト(手描き1点、青焼1件2点)
 - 敷地断面図(手描き1点、青焼1点)
- c) 大谷幸夫が1965年にデザインした児童館第2案に関するもの 計7点。
- 配置図(手描き2点：共に1965年8月10日の日付入り)
 - 東西立面図・屋根伏図(手描き1点：1965年8月10日の日付入り)
 - 断面図・立面図(手描き1点)
 - 詳細図(手描き1点)
 - コンタ図(手描き1点、青焼1点)

B群は図面の用途及び内容に応じて次のように分類できる。

- d) A地区児童遊園(児童館含む)敷地の実測図及びコンタ図。手描き計4点。
- e) イサム・ノグチのランドスケープ・デザインを図面化した最初期の配置図2点及び敷地断面図1点、並びにノグチのデザインにより1965年に施工されたスケートリンク平面図1点。全て手描き、計4点。
- f) 図番を付され、図面リスト(図番000、300)と共にまとめられた、施工のための設計図(完成図面)：A地区児童遊園の標題をもつグループ(図番001-002、301-310)12点(001以外はイサム・ノグチの署名あり)と児童館(第3案)の標題をもつグループ(意匠設計図：図番001-007。但し001「特記仕様書」と002「配置図」は児童遊園と共用／構造設計図：図番101-107／設備設計図：図番201-207)19点。全て手描き、計33点(仕様書・図面リスト含む)。

ここでの「A地区児童遊園」、「児童館」の標題は、工事予算の別(事業区分)に基づくものと思われ、必ずしもデザイナーの担当区分とは一致しない。

いずれの図面も年記、日付をもたないが、1965年のノグチ滞在期間中から1966年5月頃にかけて作図されたと推測される。この他、図番002(配置図)に若干の変更を加えた配置図ジアゾタイプ(裏焼。図番なし、標題欄あり)が1点あり、これには1966年6月2日の日付があることから、本グループ図面の作成時期の下限と考えられる。

- g) 上記f)を補う設計補助図。R-の図番(R-1～13、R-15～21。但しR-14は欠番。R-21には番号重複1点、R-記号のみで番号のないもの1点、さらにR-11'、R-13'がある)が付されている。全て手描き、計24点。
- h) 図番はないが、標題欄と大谷幸夫の印をもつ設計補助図。内7点は部分竣工時の1966年8月15日の日付を持つ。施工期間中の図面と思われる。全て手描き、計9点。
- i) 図番、標題欄がなく、上記3グループ(f、g、h)の図面に含まれないイサム・ノグチのランドスケープ・デザインの要素、または児童館敷地内の遊具施設を表す図面類。上記f)の図面を補完する設計補助図4点、試案段階の図面4点とスケッチ1点。全て手描き、計9点。

- j) 図番、標題欄がなく、大谷幸夫の児童館第3案の建築にかかる図面17点とスケッチ7点、及び構造計算書(9頁)1点。全て手描き、計25点。
- k) 図番はないが、標題欄をもち(内1点にはイサム・ノグチの署名と大谷幸夫の印)、1966年8月の部分竣工以降に作図終了したと考えられる、施工予定対象の図面。全て手描き、計4点。
- l) 図番、標題欄がなく、目下表現対象が特定できていない施設並びに備品等の図面及びスケッチ。全て手描き、計7点。

A群とB群の総計157点。

2. イサム・ノグチの設計参加までの経緯

本題に入る前に、イサム・ノグチと大谷幸夫の共同が始まるまでの経緯を簡単に確認しておきたい。「こどもの国」の計画段階では、こどもの国建設推進委員会(以下「建設推進委員会」)の委員で建築家の浅田孝(環境開発センター所長)がマスタープラン(全体計画図)を作成したとされる⁹。『こどもの国50年史』によれば、浅田のマスタープラン設計者への起用は1961年10月19日に内定した。浅田は約1ヶ月後の建設推進委員会準備小委員会に叩き台を示し、一部修正の後、原案を同年11月24日の建設推進委員会で発表した。決定された日付は不明とある¹⁰。実施段階では個々の建築物や公園施設を専門家に依頼することになり、浅田が中心となって人選し、1963年11月6日の建設推進委員会総会と財団法人こどもの国建設協力会評議委員会で建築、造園、彫刻、動物などの各部門の専門家14人からなる「設計集団」が認められた¹¹。建築部門では浅田孝、大高正人、菊竹清訓、黒川紀章、鈴木章、大谷幸夫が依嘱された。この段階でイサム・ノグチは「設計集団」に参加しておらず、『こどもの国50年史』では後に「特別参加した」と記されている¹²。ノグチの特別参加がどのように決まったのかを記す資料は見つけれられていないが、大谷幸夫は「浅田(孝)さんがイサムさんを推薦された」と論者に語っている¹³。

ニューヨークのイサム・ノグチ・ミュージアム(以下「ノグチ・ミュージアム」)のアーカイヴ(The Isamu Noguchi Archive. 以下「ノグチ・アーカイヴ」)には、イサム・ノグチとこどもの国建設協力会¹⁴(以下「建設協力会」)会長足立正との間で交わされた契約書(Contract)が残されている。全文1頁、6項目からなる簡潔な内容で、日付がなく、イサム・ノグチと、足立に代わり衣奈多喜男(建設協力会常務理事、朝日新聞社企画部長)が署名している。中でもノグチへの委嘱内容と大谷との関係についての項目が注目される。契約の第1項には、

9 1961年から1963年頃まで環境開発センターに勤務していた建築家西原清之は、「こどもの国」マスタープランを設計したのは浅田ではなく西原であったと述べている。豊川斎赫「丹下健三とKENZO TANGE」オーム社 2013年 pp.230-231

10 『こどもの国50年史』pp.55-56

11 ibid.pp.253-254

12 ibid.p.261

13 論者による大谷幸夫との面談記録。2006年7月5日、大谷研究室にて。

14 財団法人こどもの国建設協力会は、それまで建設計画を進めてきた建設推進委員会が任意団体で寄付金の受け入れに制限があったため、これを円滑に進めることを主な目的として1962年に設立された。『こどもの国50年史』pp.217-219

建設協力会(A)はイサム・ノグチ(B)に「こどもの国A地区における児童遊園(Children's Playground)と児童館(Children's House)のための基本デザイン(basic design)を委嘱する」とあり、第6項にはイサム・ノグチの「基本デザインの内、細部については大谷幸夫によってデザインされる」と記されている(論者訳)。同じ署名入り契約書の対の一部がこどもの国協会に所蔵されていたが、これにも日付はない¹⁵。

イサム・ノグチとこどもの国側との通信中、確認できる最も早いものは衣奈多喜男発1964年12月23日付書簡で、「Children's Gardenのためにあなたが必要とされる資料を送ります。あなたが日本の子供たちのために作るようになったデザインを楽しみにしています」(論者訳)とある¹⁶。この書簡は契約書には触れていないが、衣奈らは1964年に恐らく日本でノグチと面会し、設計参加の同意を得ていたことが窺える。建設協力会では1964年末までにはイサム・ノグチへのA地区児童遊園のデザイン依頼が内定していたと言える。ノグチと建設協力会の契約締結時期については、建設協力会の昭和40年度児童遊園整備事業の報告書に、1965年11月1日であったことが記されている¹⁷。

一方、大谷幸夫チーム(設計連合)との契約は、建設協力会長足立正(甲)と株式会社設計連合代表取締役谷寛之(乙)との間で、建設推進委員会委員浅田孝(丙)を立会人として1966年2月10日付で結ばれている。ノグチと大谷チームによる設計作業は1965年に始まっており、この契約締結もノグチとのそれと同じく後追いであった。第一条「甲は『こどもの国』児童遊園造成工事を実施しようとし、イサム・ノグチ氏の基本設計に基づく実施設計及び監理を乙に依頼し乙はこれを受託する。」第二条「乙は委託業務の遂行にあたりイサム・ノグチ氏の指導及び承認を受ける。」とある¹⁸。「児童館」という言葉は出てこないが、ノグチとの契約の整合から「児童遊園造成工事」に含まれていたか、あるいは「児童館」設計に関する大谷幸夫との委託契約が別途存在した可能性が考えられる¹⁹。

これら二つの契約書を見る限り、イサム・ノグチが児童館を含むA地区児童遊園全体をデザインし、大谷幸夫とそのチーム(設計連合)はそれらの実施設計と監理を行うという役割を読み取ることができる。

以下に、A群、B群の中から具体的な図面を適宜取り上げながら、ノグチ参加以前と以後の展開を跡付ける。

15 ノグチ・アーカイヴ蔵、資料番号MS_PROJ_041_001及び財団法人こどもの国協会蔵(論者による2006年調査時に同協会の好意により複写入手)。引用した項目の原文は下記の通り。“1. A entrust to B the basic design for the Children's Playground and the Children's House in 'a' zone for Children's Land, and B undertakes to provide the design.” “6. The details within B's basic design will be designed by Yukio(sic!) Otani, and A agrees to pay Yukio Otani for his work.”

16 ノグチ・アーカイヴ蔵、資料番号 MS_PROJ_041_002

17 財団法人こどもの国建設協力会「昭和40年度児童遊園整備事業の(仮)完了報告書」、『児童遊園 第二遊園』綴、文化庁国立近現代建築資料館蔵、資料番号17-4-7。同報告書には設計連合との契約締結日(1966年2月10日)も記されている。

18 財団法人こどもの国協会蔵(2006年調査時)。

19 大谷幸夫は1964年4月の東京大学助教授就任を機に設計連合を退職していた。児童館設計に関する契約書は見つかっていないが、大谷幸夫はノグチの児童遊園設計の手伝いと共に、「建物の設計も委託された」と回想している。大谷幸夫「イサム・ノグチさんのこと」p.138

3. 「こどもの国」マスタープラン(1961-1964)とイサム・ノグチ参加以前の 大谷幸夫による「児童館」の第1案と第2案(1964-1965)

A群a)環境開発センターによる《こどもの国計画マスタープラン》の青焼2件

「こどもの国」マスタープランには複数のバリエーションが存在するが、大谷研究室資料群には環境開発センター作成の1962年2月14日付《こどもの国計画マスタープラン(中央児童厚生施設・子供の国計画)》(コンタ入り配置図、縮尺1:1000、1962年2月14日、青焼、紙、北面:82.4×147.5cm、南面:82.4×147.5cm、南北2面の図面からなる)と1964年5月25日付《こどもの国計画マスタープラン》(コンタ入り配置図、縮尺1:1000、

1964年5月25日、青焼、紙、南半面:81.0×146.9cm、南北2面の内南面のみ残存)の2件が含まれている。このうち62年版の北面の北西部には、「児童遊園A」と表記された部分がある(fig.2)。どこまでの範囲を指しているのか判然としませんが、弾薬庫時代に作られた南北二本のトンネルで結ばれた、丘に囲まれた緩やかな傾斜地3箇所を包括するものと考えられる。地形を観察すると、後にノグチと大谷が担当する敷地は北側トンネル東口から北に広がる傾斜地で、本図における「渡渉池」と記されている周辺である。



fig.2 環境開発センター《こどもの国計画マスタープラン》1962年2月14日(部分)大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群。図の上辺中央右寄に「渡渉池」。
Research Center for Environmental Development and Design
(Master Plan of the Kodomo No Kuni) (Detail), Feb. 14, 1962.
Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

一方、ノグチ・アーカイヴにも二種類のマスタープラン図面が所蔵されており、先の衣奈書簡中で言及された資料の一部と思われる。ひとつは1961年11月17日、同12月2日、1962年3月15日の三つの日付を持つ《こどもの国マスタープラン(中央児童厚生施設・こどもの国計画)K-1005M》(縮尺1:3000。こどもの国建設推進委員会、環境開発センターの銘。青焼)である。その最初の日付から、このK-1005Mは建設準備委員会に示され、決定を見た最初期の原案図とみてよいであろう。同図には敷地にAからDまでの地区符号が付せられ(但し境界ははっきりしない)、図の右下に各地区の施設が列挙されている。A地区施設の中に「児童遊園A 200人×1カ所」の記載があり、上記2月14日付けマスタープラン北面上の「児童遊園A」と同位置に、施設名と共に「トンネル、固定遊具を中心とした施設 付休憩所」、その東側敷地には「渡渉池 水遊び」と記されている。大谷研究室資料群の1962年2月14日付のマスタープランは概ねこのK-1005Mの拡大版と言える。

いまひとつは大谷研究室資料群のものと同じ1964年5月25日付《こどもの国計画マスタープラン》(但し南北両面揃い)である。このノグチ・アーカイヴの図面では赤の手書きで図中の施設を丸で囲み、設計担当者名が記されている(fig.3)。南図面の東側、D地区とC地区には、「D.KIKUTAKE」、「D.OTAKA」の担当施設(菊竹清訓の「林間学校」と大高正人の「修学旅行会館」)があり、両者に挟まれるように「D.OTANI」と記された施設

がある(DはDesignの意味であろう)。これは大谷幸夫が当初担当予定だった児童館(第1案)と思われる。一方A地区東側における後のノグチ、大谷の担当地区には担当者名の書き込みはないが、渡渉池を含む後のA地区児童遊園の敷地が赤線で囲まれ(先述のトンネル西口の地域は含まず)、件のトンネルの東西口には赤で双方向の矢印が記されている(fig.4)。これはノグチの担当地区を示したものであろう。

A群b)大谷幸夫による児童館第1案関連図面群

大谷幸夫の児童館第1案の存在は、文化庁国立近現代建築資料館所蔵の青焼図面3点(図番K-30014、01鳥瞰図、02立面図・断面図、03配置図・平面図。所蔵館では「児童館初期案」と表記)によって知られている²⁰。その内、02立面図・断面図の青焼(但しK-30014の図番はない)が大谷研究室資料群に含まれる。図番と標題「02児童館立面図・断面図」の他、「昭和39年」の年記をもつ。加えて01鳥瞰図、03配置図・平面図に関連付けられる図面、スケッチ、エスキースが上記「概要」に示した通り26点確認できる。01鳥瞰図とよく似た図で、陰影のみ異なる手描きの鳥瞰図は2点あり、大谷の作と推測される(fig.5)。03配置図・平面図の前段階を示すコンタ入り配置図・平面図(手描き6点及び青焼1件)、敷地のコンタ図・断面リスト(手描き1点、青焼1件)と敷地断面図(手描き1点、青焼1点)は、1964年5月25日付マスタープランのD.OTANIと記された箇所の地形と一致しており、配置図の最終段階のものは同マスタープラン当該箇所の建物配置とほぼ等しい。大谷が配置図を構想する段階で作成したエスキースは7点11図ある。これら児童館第1案資料群は02立面図・断面図の年記及び関連マスタープランの日付から、1964年前半の作成と考えられる。この段階での児童館は、菊竹清訓の「林間学校」と隣接し、教室4、大教室(またはホール)1、図書室1、会議室2、野外集会場1を擁し、遊びよりも指導の場としての性格の強い施設であった。

A群c)大谷幸夫による児童館第2案関連図面群

本図面群は昭和40年(1965年)8月10日の日付と大谷幸夫のイニシアル(OS)の付された配置図2点(手描き、a及びbとし、aをfig.6に示す)と、東側及び北側立面図に屋根伏図を加えた1点(手描き、イニシアル“OS”と昭和40年8月10日の日付、fig.7)、無記名・無年記の断面図・立面図1点(手描き、fig.8)、建築部分の詳細図1点(手描き、fig.9)、敷地コンタ図(縮尺1:200、手描き1点、同1:300、青焼1点、fig.10)からなる。これまでこの図面群の存在は知られていない。

配置図aおよびbは細部の異なるバリエーションである。顕著な違いは南側のトンネル出入口の有無である。両図とも建物周囲の簡略なコンタ表現の一致から同じ敷地を描いているが、これとよく合致するコンタ図(fig.10)が残されている。このコンタ図は上記1962/64年のマスタープランの渡渉池を含む三角形の敷地のコンタを拡大したものと思われる。従って第2案は第1案とは異なり、後にノグチと大谷が担当することになるA地区児童遊園の敷地を想定していたと考えられる。第2案の建物も、「教室」は1室になり、「図書室」に加えて大きな「休憩所(遊戯場)」が加わり、砂場と水のある「屋外遊戯場」も設けられ、教場的な第1案とは性質を異にしている。大谷研究室にはこの児童館第2案の模型写真も残されていた(fig.11)。粘土で下地を作り、丘

20 文化庁国立近現代建築資料館編『「こどもの国」のデザイナー—自然・未来・メタポリズム』文化庁国立近現代建築資料館、2022年、p.14

には植物を配し、中央に児童館の建物が表現されている。児童館の南にはトンネル出入口が渦巻き状に表現され、建物北側には図面に表現されていない部分も作られている。後にノグチ案の《ジャングルジムA》の敷地となる場所とそこから児童館の東側に通じる小道が見えるが、第2案にノグチの児童遊園デザインと直接結びつく要素はない。

イサム・ノグチが児童館・A地区児童遊園設計のために来日する1965年8月13日以前に、ノグチと大谷との間で何らかの意見交換がなされたことを示す資料は見つかっていない。大谷は後の回想で、児童館のデザインについて「私は視界を閉ざさぬよう、谷あいには軽い大屋根を架け渡す案を検討したが、構造が大がかりになったり、構造システムの表現が強すぎたりして、納得いくものにならなかった」と記している²¹。開放的な簷状の屋根をもつ児童館第2案の図面5点と模型写真は、大谷のこの記述とよく合致している。第2案図面の日付、8月10日はノグチ来日を前に大谷が温めていた構想に一区切りつけたことを物語るように思われる。



fig.11 大谷幸夫《*児童館第2案模型》制作：大谷研究室(旧設計連合)(写真：大谷研究室)、1965年頃、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
Sachio Otani (Model of Children's House (Second Design)) model: Otani Associates (former Sekkei Rengo), photo: Otani Associates, ca.1965, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

4. イサム・ノグチ、大谷幸夫とそのチームによる設計活動の第1期：1965年8月-11月

先に見た1964年12月の書簡以降、衣奈多喜雄は建設協力会を代表してイサム・ノグチとの連絡を1965年8月まで担当していた。ノグチ・アーカイブには1965年4月から1968年3月までにこどもの国建設関係者とイサム・ノグチとの間で交わされた書簡14通が所蔵されている。内1965年4月から8月までの3通は衣奈から来日前のノグチに宛てられたもので、続く1966年3月に衣奈から1通、同4月以降の書簡は浅田孝とノグチとの通信である。以下、適宜これらの書簡と他の史資料を参照してノグチ及びこどもの国側の動きを追いながら、大谷研究室資料群の図面及び石膏模型の制作過程を跡付けていきたい。

1) イサム・ノグチの1965年8月来日まで

イサム・ノグチにとって1965年前半はイスラエル・ミュージアムの《ピリー・ローズ彫刻庭園》のオープンをはじめ、建築家リス・カーンとの共同で進めていたニューヨークの《リヴァーサイド・パーク・プレイグラウンド》のプロジェクトの第5案を制作中で、多忙を極めていた。衣奈から「こどもの国」の資料を受け取っ

21 大谷「イサム・ノグチさんのこと」p.138

ていたものの、ノグチのデザイン案はすぐには示されなかった。

衣奈発ノグチ宛1965年4月22日付書簡で、衣奈は1965年5月5日にこどもの国が皇太子夫妻を迎えて開園式を行う予定であることを伝え、「しかし建設工事は終わっていませんので、あなたの訪日を心待ちにし、助けてくださることを望んでいます」(論者訳)とある²²。

続く1965年8月7日付書簡で衣奈は、政府からの予算が確定したので、これにそって支出を確定せねばならないので、デザインをできうる限り速やかに完成させてほしいと危機感をにじませている。衣奈は返信を待つことなく、同年8月12日付書簡で、8月30日にこどもの国建設責任者たちによる理事会(建設協力会第13回理事会：論者)が開かれることになり、その場でデザインの進捗報告を求められる、と重ねて催促している²³。

2) イサム・ノグチの日本滞在期間：1965年8月13日-1965年11月27日

衣奈の心配をよそに、イサム・ノグチは1965年8月13日には東京に現れ、同年11月27日まで日本に滞在した²⁴。この間、ノグチは主に東京と京都を毎月行き来しながら滞在している。こどもの国設計作業に当たったとみられる東京滞在は記録上確かめられる限りで次の通り²⁵。

1965年8月13日—8月28日、9月12日—9月18日、10月3日—10月10日、10月24日—10月31日、11月10日—11月14日。11月27日夜、羽田発出国。

上記の内、東京での最初の滞在中に、ノグチは衣奈ら建設協力会と面談した。それを示す記述が、8月31日付でノグチがフラー&サダオInc.のショージ・サダオに宛てて京都から送った書簡に見られる。

「以前に話したと思いますが、朝日新聞は今も私に『こどもの国』のために何か仕事をしてほしいと主張しています。(中略)彼らが私に託そうとしている地区は、周囲を丘に囲まれた、とても大きく美しい場所で、少なくとも300×100mはあります。障害となっているのは予算で、すべてのための総額2000万円、加えてシェルター(児童館と思われる：論者)のためにほぼ同額の55000ドル(当時の邦貨換算で約1980万円：論者)です。この程度の予算では、少し土を動かすか、輪郭をつけて地形のレイアウトを作るくらいで、それ以上のことはできないでしょう。』²⁶(論者訳)

東京で衣奈らと面談したノグチは予算を知らされ、建設用地も訪れたと見られる。『こどもの国30年史』には、ノグチが「毎日のようにこどもの国の現地をおとずれ、構想を練った。園内をハダシで歩きまわっていたその姿を当時の職員が記憶している」と記されている²⁷。また、この書簡からノグチは児童館と児童遊園が共に自分のデザイン対象であると認識していることがわかる。イサム・ノグチは『SD』誌1966年1月号で、

22 ノグチ・アーカイヴ蔵、資料番号 MS_PROJ_041_003

23 ノグチ・アーカイヴ蔵、資料番号 MS_PROJ_041_004(8月7日付、同12日付書簡)

24 離日の日は次の新聞記事による。「児童館など設計できる こどもの国」朝日新聞東京版1965年11月27日12版(16)

25 ノグチ・アーカイヴ蔵の紀尾井町福田屋(旅館)領収書。資料番号 LBD_60S_093_006。この滞日中の他の期間は京都ホテルの滞在が主で、他に岡山、高松での短期滞在記録がある。

26 ノグチ・アーカイヴ蔵 資料番号 MS_PROJ_226_051

27 『こどもの国三十年史』p.377

「わたくしがこの8月、日本に着いて半月もたたないうちに〈こどもの国〉の一部としての遊園地のために私(ママ)が考えたデザインが直ちに受け入れられ、実現の運びとなった」²⁸

と記していることから、現地調査を経て8月中にスケッチ等何らかの形で案を示した可能性もあるが、相当する作品資料は確認されていない²⁹。

3) イサム・ノグチによるバックミンスター・フラーのジオデシック・ドームと オクテット・トラス・ジャングルジムの導入案

上記のサダオ宛書簡の主旨は、リチャード・バックミンスター・フラー(1895-1983)³⁰が発明したジオデシック・ドームを児童館のシェルターに、同じくオクテット・トラスの構造体とエレメントを二つのジャングルジムとして使いたいのので材料の見積もりを欲しいというものである。

「あなたとバックキーにお願いしたいことは、シェルターのためのジオデシック・ドーム(複数：論者)にかかる費用を教えてください。30フィートのドームで、アルミニウム構造体のラスに半透明の色付きプラスチックのセミ・カバーのあるもの。これらをいくつか並べると好ましいシェルターになると思います。異なるサイズのドームを並べてもよいでしょう。プラスチックのカバーは後から追加してもよいです。必要なのは、アルミニウム・セクションの最も安い見積もりです。または、それらを日本で作る場合の方法を記した指示書です。

もうひとつお願いしたいのは、直径10~12フィートのアルミニウム・ロッドによる球体で、それをジャングルジムのようにつきたいのです。さらに、もっと平らな、より大きな直径のドームのセクションで、中心の地上高8フィート以内、周囲40~50フィートのものを、別の種類のジャングルジムとしたいのです。あなたが近代美術館で展示したトラスがあればうってつけです。あれはどうなっていますか？(中略)

バックキーに伝えていただきたいことは、少ない予算ではありますが、これは私たちが永年夢見てきた、ジオデシック構造物と共にトータルなランドスケープを創り出すひとつのチャンスです。スケールは子供向けなので、大きい必要はありませんが、十分に複合的にしてサイズの効果をもたらすようにしたいのです。バックキーにくれぐれもよろしく。』(論者訳)

ノグチはこの手紙に先立つ8月28日付で、同じく京都から同様の依頼をフラー本人に宛てても書き送っている。

「私に分け与えられたエリアでやりたいことは、私なりのやり方で直径約30フィート(約9.1m：論者)の

28 『SD』No.13、p.61

29 建設協力会第13回理事会議事記録(1965年8月30日開催)には、ノグチの来日と現地調査について報告されているが、デザイン案についての言及は記されていない。財団法人こどもの国建設協力会「児童館」綴、文化庁国立近現代建築資料館蔵、資料番号17-2-5

30 ノグチとフラーは1929年に知り合い、生涯にわたる親交を結んだ。フラーのダイマクション・カーの車体デザイン・モデルをノグチが制作したことはよく知られている。ジョージ・サダオは学生時代フラーの講義を受け、やがてフラーのパートナーとしてフラー・アンド・サダオInc.を設立した。サダオは後にイサム・ノグチ財団の理事長となった。

(ジオデシック・ドーム：原文欠損と思われ論者補)5基ほどによって景観を作ることです。(中略)例えばニューヨーク近代美術館にあった大きなアルミニウム・トラス=オクテットは素晴らしい遊具を作り出すでしょう。(中略)直径12フィート(約3.65m：論者)くらいアルミニウムの球体を美しいジャングルジムにすることを考えています。もしジョイントと必要な情報があれば日本で作ることができると思います。相応に密なロッドの複合体にしたいのです。ジオデシック・ドームを並べることで最良のシェルターとすることができます。(中略)大地のフォルムとジオデシックスの統合です。(以下略)』³¹(論者訳)

ノグチはサダオとフラーに、9月12日に東京に戻るのだからそれまでにこのアイデアに可能性があるか至急返信してほしいと記している。現地を観察してスケール感を把握していたノグチは、大きさを具体的に指定している。サダオは9月7日付、フラーは9月8日付で返信し、共に積極的な意向を伝え、サダオは30フィートドーム、ジャングルジム用球体とトラスについて価格を含む必要な回答を、フラーはニューヨークで展示したトラスの現状と、それを踏まえた対応策として新たな選択肢を提案している。フラーはノグチの提案を大いに喜び、「あなたの児童遊園について、そしてジオデシック球体とトラスを大地と結婚させて子供の遊具にするという案について、私はこの上なく興奮しています」(論者訳)と書いている。しかしサダオとフラーの返書は残念なことに指定の期日には間に合わなかった³²。

ノグチのフラーとサダオ宛書簡文中の「近代美術館で展示したトラス」とは、ニューヨーク近代美術館の屋外展示場で1959年秋から1960年初頭まで開催された「バックミンスター・フラーによる3つの構造体」展の出品作《オクテット・トラス》(fig.12)である。これはフラーが提唱したシナジェティクス理論に基づく、オクタヘドロン テトラヘドロン 正八面体と正四面体(いずれも合同の正三角形で構成される)からなるユニットを連結してできるトラス状の空間フレー

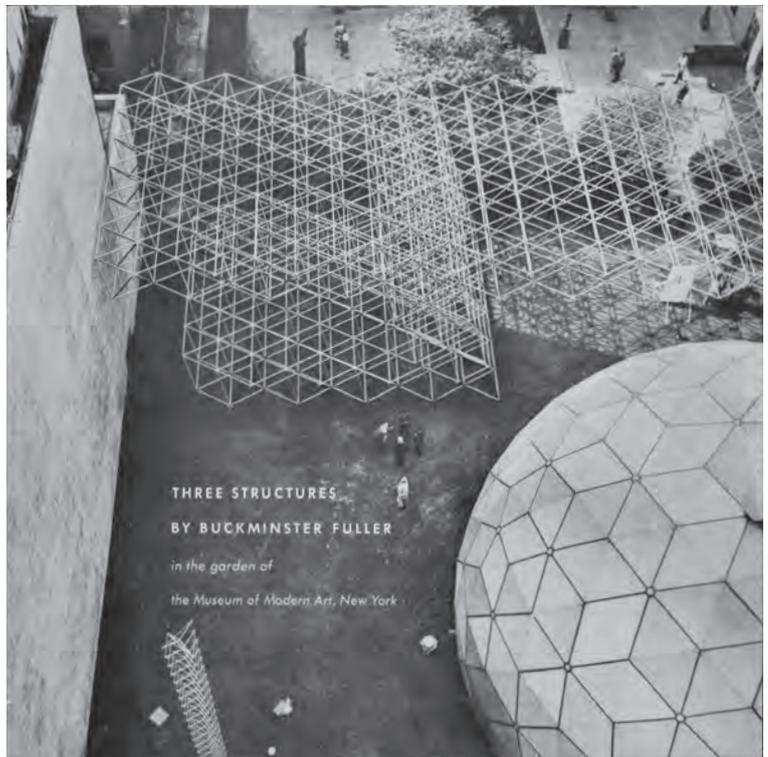


fig.12 ニューヨーク近代美術館《「バックミンスター・フラーの3つの構造」展チェックリスト》表紙 1959-60年。画面奥のフレーム状の構造体がオクテット・トラス。
Cover of the exhibition catalogue “Three Structures by Buckminster Fuller” by Arthur Drexler, 1960. The Museum of Modern Art, New York, ©2024 Digital image, The Museum of Modern Art, New York/Scala, Florence

31 このフラー宛書簡は都ホテルの便箋に手書きされたもののファクシミリ(コピー)で、頁のマージンを中心に文章が少し欠落しているようである。ノグチ・アーカイヴ蔵、資料番号 MS_PROJ_226_052

32 ノグチがサダオとフラーに知らせた東京の宛先表記が間違っていたため、2通は発信者に返送され、さらにノグチの秘書ジョアン・サリヴァンに転送された。サリヴァンはこれらを65年11月17日に東京のノグチに転送した。サリヴァン発フラー、サダオ宛書簡1965年11月17日付。ノグチ・アーカイヴ蔵 資料番号 MS_PROJ_041_007/サダオ発ノグチ宛書簡1965年9月7日付。MS_PROJ_041_005/フラー発ノグチ宛書簡1965年9月8日付。MS_PROJ_91_006

ム(構造体)で、正三角形の辺となる同じ長さのロッドが両端のジョイントで相互に接合されることで荷重を構造全体で支える。あらゆる形の空間を充填でき、最小限の部材で最大限の強度を発揮する最軽量の構造体として、旧来の矩形を基本とする建築を刷新するものと期待された。ジオデシック・ドームもフラーの発明品で、球状ドームの面にそって正三角形を単位とする構造体を作ることで、空間内部の支柱を必要とせずに、最小限の部材で最大限の空間を覆い、最軽量でありながら竜巻にも耐える強度を実現する。ニューヨーク近代美術館の野外展覧会ではプラスチック部材による《ジオデシック・リジッド・レイドーム》も展示された³³。ノグチが構想したのはアルミニウム・ロッドとジョイントによってジオデシック・ドームを、そしてアルミニウム・ロッドとオクテット・トラスによってジャングルジムを作ることであった。

ノグチが児童館を一貫して「シェルター(隠れ場所、雨露を凌ぐ場所)」と呼んでいることは、大谷の児童館第3案に引き継がれることになる。また、アルミニウム・ロッドのジャングルジムについてノグチは将来の実現を期待してその設置場所を1966年に施工させている。

4) 設計の実際

イサム・ノグチの実質的な設計作業は、サダオ、フラー宛書簡を出した後、京都から東京に戻った1965年9月13日頃から始まったと考えられる。大谷研究室資料群には、イサム・ノグチのサインの入った設計図が複数あるが、いずれも大谷幸夫のチームで制作されたもので、ノグチ本人の手描き図面は含まれていない。ノグチとの共同設計がどのように行われたかについて、大谷幸夫は次のように記している。

「国立こどもの国の中の遊園地の一つを、イサムさんが設計することになり、実施のための図面や仕様書の作成など、私が手伝うこととなった。1965～1966年あたりのことである。私は遊園地内に企画されていた休憩所や読書室などの建物の設計も委託されたが、あくまでも遊園地が主体であり、私はイサムさんの遊園地のイメージが固まるのを待った。」³⁴

即ちノグチの児童遊園のデザインがまず先行して進められた。作業はかつて大谷が設立した設計連合のアトリエで行われた。本プロジェクトの設計者名には、大谷の他、田中正雄、藤田皓一が雑誌に記載されているが³⁵、山本敬則氏及び藤田皓一氏によれば、主に図面を引いたのは藤田皓一氏であった。藤田氏によれば、東京芸術大学を卒業したばかりの同氏に、大谷から「あなたは美術系の人だから」とイサム・ノグチの担当が命じられたという。仕事が佳境に入ると、松永文夫をはじめ職場の「先輩」が引いた図面もあるとのことであった。イサム・ノグチは朝10時から夕方5時まで、昼休み以外は一切座ることなくひたすら油土で模型を制作し

33 フラーのジオデシック・ドームとトラスの構造については、ニューヨーク近代美術館の「3つの構造体」展プレス・リリースの他、下記の資料を参照した。《レイドーム》は極地に設置されるレーダー用ドームであった。

ジョイ・ボールドウィン(梶川泰司訳)『バックミンスター・フラーの世界』美術出版社、2002年(第二刷)／*Three Structures by Buckminster Fuller in the Garden of the Museum of Modern Art, New York*. MoMAExh_0649_MasterChecklist.及びPress release(二種類)。https://www.moma.org/calendar/exhibitions/3360(参照 2023年12月6日)

34 大谷「イサム・ノグチさんのこと」p.138

35 『新建築』42(9)、p.114

ていたという。藤田氏への製図の指示も、粘土模型を示しながら行われた³⁶。

以上の証言から、イサム・ノグチの粘土模型がまず制作され、これを元に製図されていったと考えられる。

5) 模型と図面に見るイサム・ノグチのデザイン原案

最初に大谷研究室資料群の石膏模型の概要を確認する。

《こどもの国児童館・A地区児童遊園石膏模型》(全体模型 fig.13)1点。

縮尺：1:300

原型：イサム・ノグチ、大谷幸夫

石膏模型制作：植野石膏模型製作所

寸法(石膏部分)：12.0×143.0×75.0cm

材質：石膏、プラスチック及び塗装された真鍮(児童館屋根部分)

木製台枠とアクリルカバー付き

制作年：1965年

記載事項：

銘板1、台座正面左：こどもの国/A地区児童遊園 イサム・ノグチ/児童館 大谷幸夫

銘板2、上記の右：S 1:300

児童館・A地区児童遊園の全体とスケートリンクを表す縮尺300分の1の石膏模型である。南側は矩形の「中央広場」の北端部から始まり、スケートリンクを経て、なだらかな丘陵に三方を囲まれた、有機的な曲線を描く児童遊園の敷地が一望できる。敷地の中央には児童館が位置する。ランドスケープと建築、遊具が総合的に表現されている。大谷研究室で保管されていたこの石膏模型は、『SD』誌1966年1月号に平山忠治撮影の写真で図版掲載されたことを初出とする。よって1965年末には完成していたと考えられ、児童館・A地区児童遊園施工前に作られたオリジナル模型であり、デザイン原案を表すものと考えられる。大谷幸夫は生前、「イサム・ノグチが粘土をこねて(原型を)作り、植野石膏模型製作所が手伝った」と証言している³⁷。植野石膏模型製作所(以下「植野石膏模型」)の現社長植野彰規氏によれば、当時の記録はないが、制作過程は恐らくコンタ図(等高線図)に基づく合板下地を植野石膏模型で制作し、その上に作家が粘土で造形したものを原型として型取りし、石膏模型としたのではないかとのことである。また、自立する遊具の部分はグラウンド(ランドスケープ)部分とは別に制作され、接着されたと思われる。植野氏によれば、この石膏模型は長らく東京大学の大谷幸夫の研究室に保管されていたが、その間にカバーが損傷し、石膏面に埃が積もっていた。模型を大谷研究室に引き上げる際、補修作業が植野石膏模型で行われた³⁸。2005年に大谷監修の下、本石膏模型のレプリカが2体、植野石膏模型で製作され、1体はニューヨークのノグチ・ミュージアム、1体は広島市立大学芸術資

36 藤田皓一氏と論者の面談による聞き取り。2023年11月21日、藤田氏のアトリエ(東京)にて。

37 論者による大谷幸夫との面談記録。2006年7月5日、大谷研究室にて。

38 論者による植野彰規氏との面談記録。2023年11月6日、植野石膏模型製作所にて。

料館に収蔵された³⁹。

イサム・ノグチが「こどもの国」のために制作した模型は、この児童館・A地区児童遊園の全体模型の他、独立した個別遊具の模型が少なくとも4点あった。《スベリ台》(図面番号301、fig.14)、《ジャングルジムB》(同305、fig.15)、《ピラミッド》(同306、fig.16)、《原子部落》(同304、fig.17)の石膏模型が写真によって知られる⁴⁰。全体模型上には児童館建築の他、これら4つの遊具(但し原始部落は台座のみ)に加え、ふたつの砂場、ブランコなどの遊具の他、スケートリンク、前庭と門を含むアプローチ部分、野外劇場、切り通しや岩山などのランドスケープと一体化した施設も表現されている。

小論ではこの全体模型を、図面に先行して制作された原型に基づくものとし、その写真が現場施工に先駆けて1966年1月にいち早く発表されたことを根拠として、原案と位置付ける。

ところで原案と一致する内容の手描きの全体配置図は、大谷研究室資料群中には残念ながら見出されなかった。代わりにその青焼が「設備設計図」(上記B群f、図番201、202)の下地として用いられている。他に《003標準断面図・標準詳細図》(手描き fig.18)と《004断面リスト》(配置図に断面位置を表記したもの。fig.19)は原案と一致するが、004の児童館部分は柱位置のプロットにとどまる。B群fの意匠設計図中の《002配置図》(fig.20)は、遊具施設が既に原案から変更された段階を表している。

原案と一致する《002 配置図》(以下《旧002配置図》。fig.21)はノグチ・ミュージアムに青焼(図番002と標題欄付き)が所蔵されており、B群fの《002配置図》より前の段階、即ち変更前の配置図と考えられる。そこでまず全体模型と《旧002配置図》を見ながら原案の表現内容を記述し、その特徴を指摘したい。

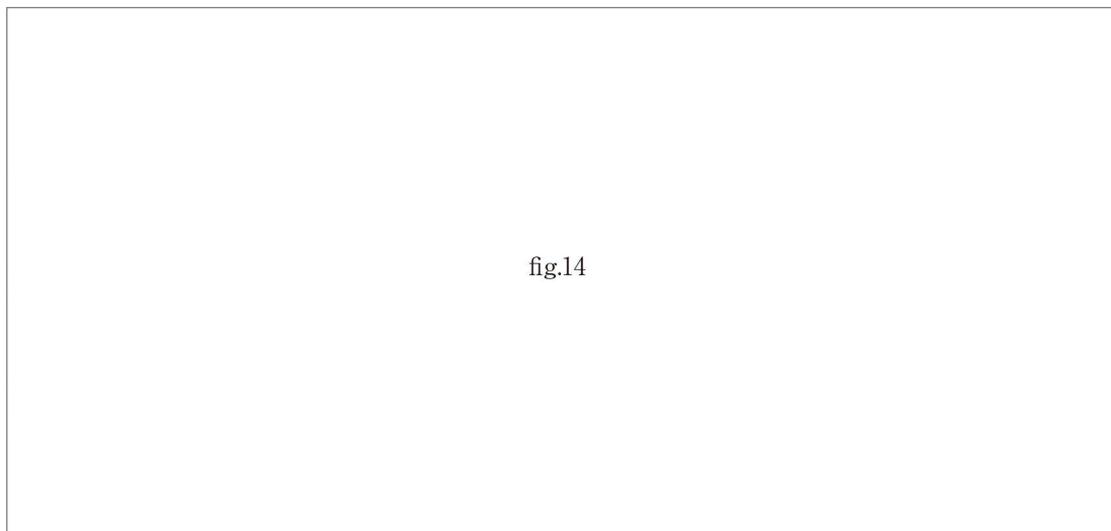


fig.14

fig.14 イサム・ノグチ《こどもの国 A地区児童遊園スベリ台石膏模型》1965-66年、写真、撮影：村井修、ノグチ・アーカイヴ(ニューヨーク)蔵、©村井修
Isamu Noguchi 〈Model for Kodomo No Kuni (Slide)〉 1965, photograph, photographer : Osamu Murai, The Isamu Noguchi Archive ©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York/ARS-JASPAR, Photo : ©Osamu Murai

39 「イサム・ノグチ・大谷幸夫『こどもの国』(横浜)石膏模型レプリカ作成及び本学芸術資料館収蔵について」2005年7月3日付広島市立大学文書。同大学芸術資料館提供のコピー。

40 これら4点の遊具模型の現在の所在は不明。写真はノグチ・アーカイヴ蔵、資料番号02010、02011、02008、02009(本文掲載順)で、いずれも村井修撮影。他に『建築』No.66、p88にこれら4点のアングルの異なる写真が掲載されている。



fig.15

fig.15 イサム・ノグチ《こどもの国 A地区児童遊園ジャングルジムB 石膏模型》1965-66年、写真、撮影：村井修、ノグチ・アーカイヴ(ニューヨーク)蔵、©村井修
Isamu Noguchi 〈Model for Kodomo No Kuni (Jungle Gym B)〉 1965, photograph, photographer: Osamu Murai, The Isamu Noguchi Archive ©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York/ARS-JASPAR, Photo : ©Osamu Murai

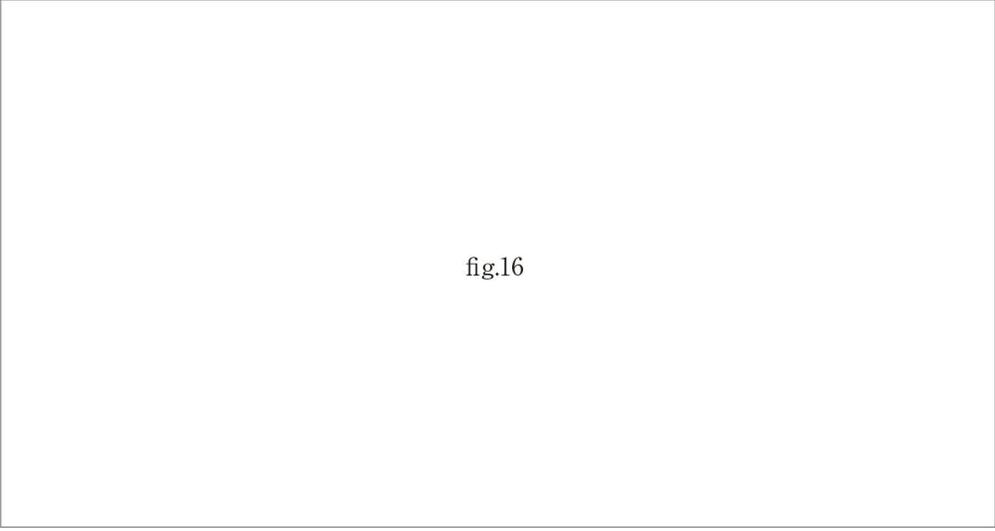


fig.16

fig.16 イサム・ノグチ《こどもの国 A地区児童遊園ピラミッド石膏模型》1965-66年、写真、撮影：村井修、ノグチ・アーカイヴ(ニューヨーク)蔵、©村井修
Isamu Noguchi 〈Model for Kodomo No Kuni (Pyramid)〉 1965, photograph, photographer : Osamu Murai, The Isamu Noguchi Archive ©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York/ARS-JASPAR, Photo : ©Osamu Murai

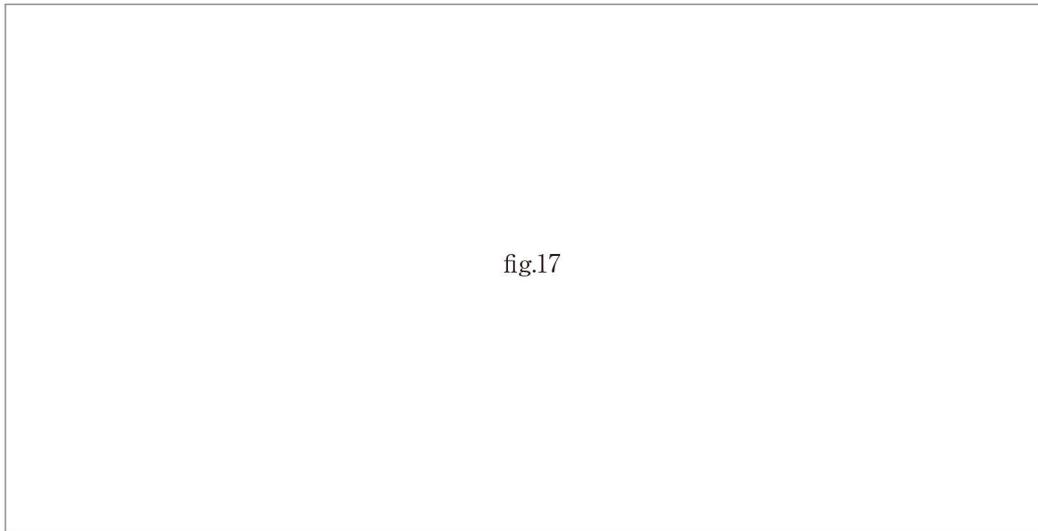


fig.17

fig.17 イサム・ノグチ《こどもの国 A地区児童遊園原始部落石膏模型》1965-66年、写真、撮影：村井修、ノグチ・アーカイヴ(ニューヨーク)蔵、©村井修
Isamu Noguchi 〈Model for Kodomo No Kuni (Primitive Village)〉 1965, photograph, photographer: Osamu Murai, The Isamu Noguchi Archive ©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York/ARS-JASPAR, Photo : ©Osamu Murai

a. ランドスケープ・デザイン：イサム・ノグチは敷地をどのようにデザインしたか

全体模型(fig.22に個別施設の位置を番号で示す)は75.0×143.0cmの矩形のスペースに、ほぼ南北を長手方向に設定して展開している。《旧002配置図》を見ると、南端から北端にかけて敷地全体を貫く「測量基線」が引かれている⁴¹。これに対して模型では、他区域との位置関係を示すため、一部に既存施設や通路が表現されている。南側(図右端)短辺には①中央広場の北端が見える。西側長辺には、弾薬庫時代のトンネルの西口⑥がある。同じ辺の北側にはこどもの国の周回路も見える。また東側長辺には丘を上がって隣接地区へとつながる小道2本がある。

児童館と児童遊園の敷地は三方を丘に囲まれ、北から南に下る緩やかな傾斜地で、北辺は丘と敷地部分が舌状(またはループ状)の輪郭を作りながら交錯し、敷地北部は4方向(⑪、⑬、⑱、⑲)に指をひろげたように展開している。敷地中央の児童館のあたりを掌に例えるなら、南側東に張り出した⑦野外劇場の敷地を親指、南の②スケートリンクを腕として、全体に右手を拡げたような輪郭を形成している。

しばしば「大地の彫刻家」とも評されるイサム・ノグチは、この児童遊園でどの程度の造成工事を考えたのだろうか。

浅田孝による「こどもの国」マスタープランの設計目標は、旧弾薬庫から引き継いだ豊かな「自然環境を最大限に利用し、かつ積極的に保存して、恵まれた自然のなかで子どもたちの健全なレクリエーションを啓発できるようにする。そして、特に首都圏の将来を考え、自然の保存に最大限の考慮を払う」ことであった⁴²。自然環境と子供の主体性を重視することで、機械遊具が主体の商業遊園地とは異なる目標を打ち出していた。

41 測量基線は後述するその他の児童館・A地区児童遊園の配置図にも記されている。

42 『こどもの国50年史』p.56

大谷研究室資料群には、1965年9月7日付の手描きの図面《こどもの国遊園地実測図》(縮尺1:300、fig.23)がある。日付から、ノグチがデザインに着手する直前の敷地の状況を記録したものとみてよいだろう。中央西側(画面下側)にトンネル出入口及び同中心線を描き、南はスケートリンクの位置あたりから、北側の放射状に広がる地区まで、丘と敷地の境界線をプロットした略図ではあるが、全体模型と比較して敷地輪郭はほぼ一致している。また大谷研究室資料群には詳細な敷地コンタ図3点(内2点をfig.24、fig.25に示す。共に年記なし)があり、児童遊園配置図の土台となったと思われるが、これらの敷地輪郭線も実測図とほぼ一致している。

これらの図面と全体模型の比較から、イサム・ノグチは与えられた敷地(傾斜地)の輪郭を尊重し、造成はごく限られた範囲にとどめたと思われる。具体的な造成対象は、fig.22中の番号で示すと以下の部分であったと考えられる。

②スケートリンク

③《亀ノ子砂場》：スケートリンク西の丘の樹木を伐採して設置。《亀ノ子砂場》北側の丘を放物線状に削る。

④アプローチ部分を掘り下げ、サンクンガーデン式の前庭と芝生の丘、及びトンネル出入口を経て児童館に至る擁壁で囲まれた通路と門を設置。

⑧児童館西南の角状の崖。実測図とコンタ図で見ると、元々の地形がある程度角状になっていたようである。

⑨児童館西側の丘の切り通し

⑩舌状に張り出した丘の表面を削り、《岩山》とする。

⑪西北端に突き出た傾斜地にマウンドを作り、《スベリ台》とする。

⑮《ジャングルジムB》の敷地として北側の丘の突出部を一部削る。

この他《旧002配置図》を見ると、敷地輪郭線に沿って小川またはブロックを並べた境界線を設け、森林で覆われた丘と敷地の境界を明確にする計画であった。

大谷幸夫は、ノグチのデザインを見た印象を「さまざまなイメージを誘発され大変魅力的だった」として次のように記している。

「そこでは谷あいに沿って、子どもたちや遊具がもつれ合い踊るようにして走り廻っているように見える。舌状大地をよぎる切り通しの道は、大地が見事な放物線で造形されていることを私たちに訴えており、谷あいや丘にちりばめられた遊具やオブジェは、それぞれの言葉でおしゃべりをしているようで楽しい。そしてなによりも、自然という場でのデザインの基本ともいべき幾つかの手法や手順が示されていた。その一つに、デザインとは自然が内包し潜在させている規律や調和的諸関係を抽出し、それらを純化し形象化して現わすこと。あるいは幾何学的・人為的造形を投入することで、自然が可能性として保持している小宇宙空間を呼び覚ますこと、といった考え方である。」⁴³

イサム・ノグチによるミニマムな造成プランは、自然をできうる限り保存するというマスタープランの設

43 大谷「イサム・ノグチさんのこと」p.138

計目標に合致すると共に、サダオ宛書簡に記された予算を意識した結果でもあろう。しかしそれだけでなく、1933年に最初のプレイグラウンド・モデル《プレイマウンテン》を制作し、遊具を持ち込むことなく土地の造形のみで児童遊園を構想した経験をもつノグチにとって、A地区児童遊園の舌状の丘と傾斜地が入り組んだ地形は魅力的なものに思われたに違いない。

b. 遊具及びその他の施設

大谷研究室資料群には、児童遊園及び児童館敷地内に設置・設営されるべくイサム・ノグチによってデザインされた遊具と施設の手描き図面が揃っている。これらは全体模型に表わされた原案に属するものと、その後の計画変更を受けて新たに作図されたものとに分けられる。また、遊具以外に池、橋、小川、切り通し、アプローチ部分の前庭と擁壁といったランドスケープ・デザインに関わる図面、それらに付属する門や公衆便所、さらに屋外劇場などの施設の図面もある。以下、全体模型(原案。fig.22)に示した番号に沿って当該場所の図面を紹介する。なお遊具、施設の名称は原則として図面上に記された名称を用いる。

②スケートリンク

主な掲載図面(以下同)：

《A地区児童遊園スケートリング平面図》(fig.26)

1965年、縮尺1:100、鉛筆、トレーシングペーパー、55.0×80.2cm

標題、右下、インク及び鉛筆：設計連合 A地区児童遊園 スケートリング

図面名称はスケートリンクであるが、夏季は水を張り、幼児の水遊びの場として「徒渉池」または「ジャブジャブ池」と呼ばれた。大谷研究室資料群には個別図面としては平面図のみが含まれる。寸法記載はないが面積1000㎡、周囲135mである⁴⁴。

平面図ではメッシュ上に基線が引かれ、測点Y-3からY-5を囲むように舌状形の輪郭線が引かれている。基線は《旧002配置図》のものと一致する。舌状の輪郭は、全体模型でみると④サンクンガーデン「前庭」北のなだらかに隆起する芝生帯の輪郭にも現れ、児童遊園全体の丘と傾斜地の輪郭をも特徴づけている。ノグチは舌状形をランドスケープ・デザインのライトモチーフに位置づけていたといえよう。スケートリンクは児童館・児童遊園に先駆け1965年に着工し、1966年1月からオープンした。

建設協力会の計画上では、スケートリンクは児童館・A地区児童遊園とは別の施設であったが、早い段階からイサム・ノグチがデザインすることに内定していたようである⁴⁵。

④亀ノ子砂場

《304 こどもの国A地区児童遊園 亀ノ子砂場詳細図》(fig.26: PL.4)

44 『こどもの国30年史』p.379

45 建設協力会第13回理事会(1965年8月30日)で矢島八洲副会長が、スケートリンクを建設し、夏は徒渉池とすることを提案。同会理事の浅田孝は賛意を示し、A地区を担当するイサム・ノグチ、大谷幸夫と相談して場所を決めたいと返答している。財団法人こどもの国建設協力会第13回理事会議事録(昭和40年8月30日開催)、文化庁国立近現代建築資料館蔵

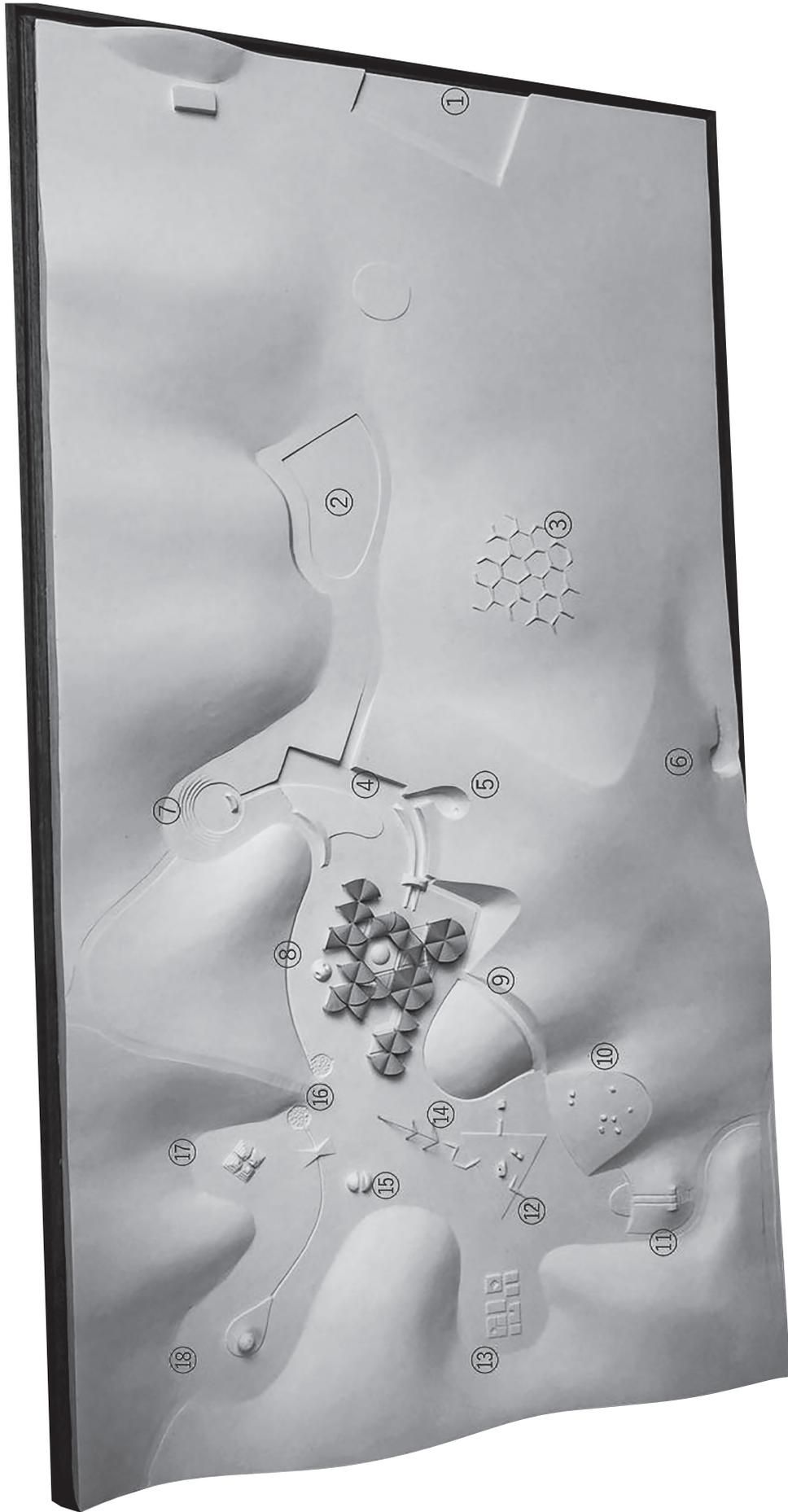


fig.22 イサム・ノグチ、大谷幸夫《こどもの国児童館・A地区児童遊園石膏模型》(fig.13に番号表示加工。旧002配置図fig.21に方向を合わせ、図左手が北側。)
 Numbered Illustration of 〈Plaster Model of Playground and Children's House in Zone A of the Kodomo No Kuni〉 photo and number by the author (cf. fig.13)

1965-66年、縮尺1:300、1:100、1:20、鉛筆、トレーシングペーパー、55.1×80.0cm、署名、インク、左下：
Isamu Noguchi
工事仕様書、右下。標題、図番、縮尺、右下。

スケートリンク北西部のなだらかな丘(現在は「110mローラー滑り台」がある)の頂上付近に、斜面に沿って一辺約5mの正六角形をユニットとする、コンクリート製上面モルタル塗りのパーティション群をハチの巣状に配置する。1ないし2か所の切れ目をもつ六角形ユニット8区画(304中の平面図A~H)が集合する中心部と、それらの周囲を囲む、六角形の辺をいくつか欠いた(開かれた)ユニット12区画からなる。各区画の内側は砂場または芝生に指定されている。《旧002配置図》では、亀ノ子砂場の周囲とスケートリンクにかけての斜面は「牧草播種3500㎡」の指示があり、子供がこの斜面を登って砂場に至る設計であったことがわかる。ノグチは《リヴァーサイド・パーク・プレイグラウンド》の第1案(1961年)でも、半円形の輪郭をもつ平面上に六角形を含むやや不規則なパーティションを備えた砂場「砂の迷宮」(fig.27)をデザインしている。これに比べ、こどもの国《亀ノ子砂場》にみる大地の曲面に沿って三次元的に配された正六角形は幾何学的に洗練されており、フラワーのジオデシック・ドームのフレームを彷彿させる。

この《304詳細図》は平面図1:100及び1:300、断面図1:300、詳細図1:20と仕様表から成り、イサム・ノグチのサイン、表題欄に設計連合のスタンプをもつ。全体模型以外の個別模型の存在は知られていない。本図面は大谷研究室資料群中のノグチのデザインした遊具・施設設計図をまとめた《300こどもの国A地区児童遊園 図面リスト》の一覧表に掲載されているが、横線が引かれ、「欠番」と表記されており、ある時点で施工対象から外されたことを意味する⁴⁶。《亀ノ子砂場》は1966年上半期の施工対象(児童館などを含む)とはならず、1967年度の施工対象として残されたようである。しかしその後計画変更により実現せずに終わった⁴⁷。



fig.27 イサム・ノグチ《リヴァーサイド・パーク・プレイグラウンド模型(砂の迷宮)》
1961-1962年、プラスティシン、合板、鉛筆、2.9×68.6×36.5cm、ノグチ・ミュージアム蔵 inv.no. 516H
Isamu Noguchi (Riverside Playground (Sand Maze Study)), 1961-1962, plasticine, plywood, pencil, 2.9×68.6×36.5cm, The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York, inv.no. 516H ©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York/ARS-JASPAR

46 同リストでは、この他に301「スベリ台」、305「ジャングルジムB」、306「ピラミッド」、307「原始部落」、309「ブランコ」が同様に欠番と記されている。

47 財団法人こどもの国建設協力会から財団法人日本船舶振興会に宛てた計画変更申請書。昭和42年11月。こどもの国建設協力会「児童遊園 第二遊園」綴、文化庁国立近現代建築資料館蔵、資料番号17-4-7

④児童館・児童遊園へのアプローチ

《R-15 A地区児童遊園門配筋図》(fig.28)

1965-66年、縮尺1:30、鉛筆、色鉛筆(赤)、トレーシングペーパー、55.2×80.5cm

図番、標題、鉛筆、右下。

《R-8 *児童館入り口通路擁壁立面図》(1966年2月16日/22日: fig.29)

1966年、縮尺1:100、鉛筆、トレーシングペーパー、54.4×79.5cm、図番、日付、鉛筆、右下

《007 こどもの国児童館 公衆便所詳細図》(fig.30)

1965-66年、縮尺1:50、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、57.8×82.2cm

設計者名、スタンプ、左下:大谷幸夫

標題、図番、縮尺、スタンプ、右下。

《旧002配置図》によれば、スケートリンクから北に緩やかに上る丘に切り通しが設けられ、擁壁に囲まれた通路(幅5.1m、長さ31.2m)となる。先端はサンクンガーデン式の「前庭」(幅39.9m、奥行き10.8m)に至る。その正面は舌状の芝生帯の丘と三日月状の「築山」(碎石コンクリートはつり仕上げ)、東側は⑦野外劇場に至る階段、西側は⑤トンネル出入口と擁壁で囲まれた通路を経てアーチ型の門に至り、階段を上って⑧児童館に通じる。門の手前西側擁壁には公衆便所の入り口2箇所が設けられ、男女各2基ずつ、地中に埋まったボトル型の空間がある(全体模型には表現されていない)。これらの内⑤⑥のトンネル出入口は設計途上で閉鎖されることになり、それ以外の施設は1966年8月に竣工している。(写真fig.31)



fig.31 《こどもの国児童館・A地区児童遊園竣工写真:擁壁、通路、公衆便所、門》撮影:大谷研究室(旧設計連合)、1966年、大谷研究室蔵
〈Masonry Retaining Walls, Passageway, Public Toilet and Gate, Playground and Children's House in Zone A of the Kodomo No Kuni〉 photographed by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1966, Collection of the Otani Associates

⑦野外劇場

《303 こどもの国A地区児童遊園 野外劇場詳細図》(fig.32)

1965-66年、縮尺1:100、1:20、1:50、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、55.1×80.2cm、署名、インク、

左下: Isamu Noguchi

工事仕様書、右下。標題、図番、スタンプ、右下。

《R-17 子供の国 出入口廻り》(1966年5月10日、1966年6月13日、fig.33)

1966年、縮尺1:100、鉛筆、トレーシングペーパー、53.8×75.5cm、図番、標題、縮尺、日付、右下。

前庭東側の丘に囲まれた舌状の敷地に「野外劇場」が設けられる。児童遊園に野外劇場を設ける案は、《国連本部のためのプレイグラウンド》(fig.34)や《リヴァーサイド・パーク・プレイグラウンド》の「円形劇場(Amphitheater)」(fig.35)にも見られ⁴⁸、古代ギリシアのそれを想起させるモチーフとしてノグチのプレイグラウンドの特徴のひとつと言える。「こどもの国」野外劇場は、直径19.2mの円形舞台に芝生を植え(施工時には敷石に変更)、舞台上西側に衝立(曲面で構成された台形、高さ2.35m、幅6m、RC打ち放し)を設ける。衝立の軸上背後に前庭から上がる階段、同軸上正面には円弧状の観客席(幅1m)が4列設けられている。野外劇場は1966年上半年に施行された(写真fig.36)。

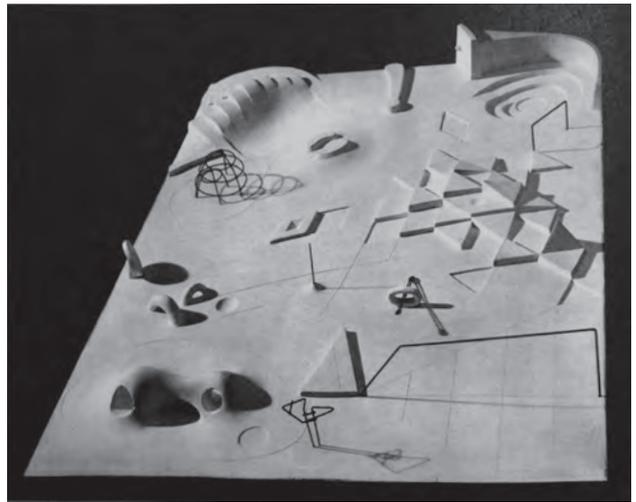


fig.34 イサム・ノグチ《国連本部のためのプレイグラウンド模型》1952年、ノグチ・ミュージアム蔵 inv. no. 405A
Isamu Noguchi 〈United Nations Playground (model)〉 1952, Plaster, The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York, inv.no.405A ©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York/ARS-JASPAR



fig.35 イサム・ノグチ《リヴァーサイド・パーク・プレイグラウンドの円形劇場模型》1961-1962年、プラスチック、合板、14.3×71.1×69.2cm、ノグチ・ミュージアム蔵 inv.no. 516A
Isamu Noguchi 〈Riverside Playground, Amphitheater Study〉 1961-1962, plasticine, plywood, 14.1×71.1×69.2cm, The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York, inv.no. 516A ©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York/ARS-JASPAR



fig.36 《野外劇場 竣工写真》1966年、ノグチ・アーカイヴ(ニューヨーク)蔵
〈Construction for Playground for Kodomo No Kuni, Open-air Theater〉 1966, The Isamu Noguchi Archive, New York, id.no. 12035 ©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York/ARS-JASPAR

48 リヴァーサイド・パーク・プレイグラウンドでは、第1案図面の他、個別模型として《Amphitheater Study》(1961-62年、プラスチック、合板)がノグチ美術館(NY)に所蔵されている。inv.no.516A

⑧「児童館」敷地内の遊具施設

《R-19 児童館丸山詳細図》(1966年6月7日：fig.37)

1966年、縮尺1:50、鉛筆、トレーシングペーパー、55.4×79.9cm、図番、標題、縮尺、日付、鉛筆、右下。

《R- 丸山詳細図(参考図)》(1966年5月21日：fig.38)

1966年、縮尺1:50、鉛筆、トレーシングペーパー、55.0×84.2cm、図番、標題、縮尺、日付、鉛筆、右下。

《R-5 *六角池詳細図》(fig.39)

1965-1966年、縮尺1:50、1:10、鉛筆、トレーシングペーパー、54.8×79.7cm、図番、鉛筆、右下。

《六角池(池3)参考図》(1966年5月21日：fig.40)

1966年、縮尺1:50、鉛筆、トレーシングペーパー、55.7×83.6cm、標題、縮尺、日付、鉛筆、右下。

竣工写真(fig.41、fig.42)

「児童館」の建築については後述する。全体模型では児童館の灰色の屋根に囲まれた中心に六角形台座をもつ円形マウンド「丸山」、その東側に穴のあいた小さなマウンド、北側には六角形の「池3」がある。穴あきマウンドは《国連本部のためのプレイグラウンド》や《リヴァーサイド・パーク・プレイグラウンド》にも見られるノグチの基本的遊具のひとつだが、大谷研究室資料群にはこの小さなマウンドの詳細図は存在しない。唯一、《005児童館平面詳細図》の当該位置に「プレイスカルプチャー 別途原寸決定」と添え書きされた穴あきマウンドが描かれている。同じ図面の「丸山」は全体模型と同じく六角形台座上の穴のない円形マウンドで、トンネルを持たない。しかしその後のイサム・ノグチからの希望でデザイン変更され、《R-19丸山詳細図》に見るように上下に交差するトンネル2本が設けられ、台座も円

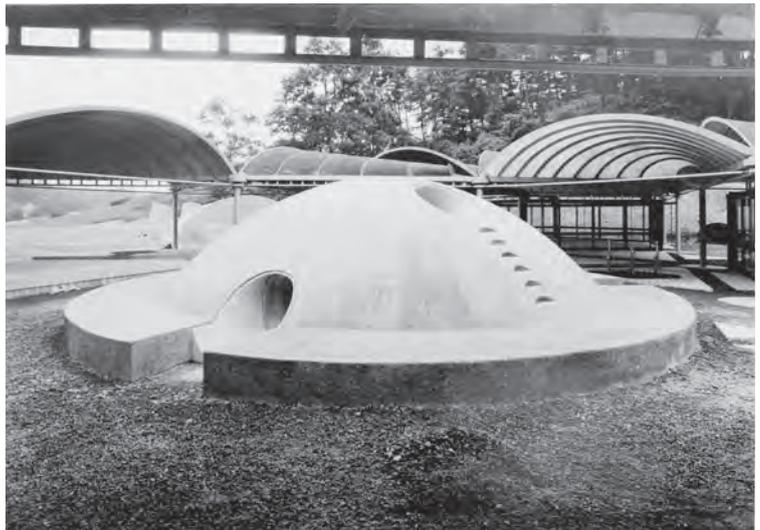


fig.41 《丸山 竣工写真》撮影：大谷研究室(旧設計連合)、1966年、大谷研究室蔵
〈“Maruyama,” Children’s House in Zone A of the Kodomo No Kuni〉 photographed by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1966, Collection of Otani Associates



fig.42 《児童館池(池3)竣工写真》撮影：大谷研究室(旧設計連合)、1966年、大谷研究室蔵。左手奥に勾玉形の池。
〈Pond 3, Children’s House in Zone A of the Kodomo No Kuni〉 photographed by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1966, Collection of Otani Associates

形となった⁴⁹。これをもって小マウンドは不要になり、その後の児童館平面図や配置図に登場しなくなったと解釈できる。

《旧002配置図》中の「池3」は、児童館の柱位置に合わせて正六角形の輪郭であったが、その後イサム・ノグチの希望により《六角池(参考図)》のように「勾玉形」に設計変更され、先端部が屋根の下に入る形になり、1966年度上半期に施工された。

児童館床プラットフォームの正三角形のデザインは、後述するように大谷幸夫の児童館屋根デザインに起因するが、児童館スペース内の「池3」やプラットフォームのデザイン変更には「丸山」と同様にイサム・ノグチの意向が反映されている⁵⁰。「丸山」については藤田皓一氏がノグチのデザインであると証言している⁵¹。児童館敷地内にはこの他《R-6 足洗場詳細図・水飲場詳細図》があるが、これについては次稿で述べる。

⑨児童館西側擁壁及び切り通し

《003 こどもの国A地区児童遊園・児童館標準断面図：標準詳細図》(fig.18)

1965-66年、縮尺1:300、1:100、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、78.4×108.1cm、
設計者名、スタンプ：左下「大谷幸夫」

標題、図番、縮尺、スタンプ、右下。

《*児童館西側擁壁平面図・地形立面図・断面図》(fig.43)

1965-66年、縮尺表記なし、鉛筆、トレーシングペーパー、54.7×109.3cm

《R-21 小橋詳細図》(1966年6月7日、fig.44)

1966年、縮尺1:20、鉛筆、トレーシングペーパー、57.5×77.7cm、図番、標題、縮尺、日付、鉛筆、右下。

《*児童館西側切り通し平面図・地形断面図》(fig.45)

1965年、縮尺表記なし、鉛筆、トレーシングペーパー、78.8×108.3cm

児童館敷地の西南の丘はやや角状にえぐれていたが、敷地との境界に側溝を設けて輪郭を明確にし、背後の崖を《003標準断面図・標準詳細図》下端の詳細図に見るように石積として放物線状の輪郭を与える予定であった。児童館竣工後の写真(fig.46)を見ると、崖の面が切り落とされ、何らかの土留め処置を施されているようにも見えるが、石積みは行われていない。側溝は施行されているが、PCブロック等による縁取りは写真から確認できない。

この切り落とし崖の北隣には側溝を跨いで丘を西へ貫く切り通しの入り口となる「小橋」が設けられた(R-21)。幅1.5m、長さ3.04mのコンクリート打ち放しの橋で、路面は児童館側から切り通しに向かう昇り勾配で、左右の勾欄(側板)もそれに合わせて手前から奥にかけて高くなっている。小橋は西隣のコンクリート

49 イサム・ノグチから浅田孝及び田中正雄宛書簡。1966年4月29日。ノグチ・アーカイヴ蔵 資料番号MS_PROJ_041_014及び_015。このノグチ提案は児童館スペース内のその他の細部変更案と共に同年6月1日の浅田、大谷、田中及び建設協力会事務局との話し合いで検討の上了承され、6月7日付浅田発ノグチ宛書簡で「あなたの指示通り」6月末までに竣工させる旨が伝えられた。ノグチ・アーカイヴ蔵 資料番号MS_PROJ_041_017／富永、大谷、田中、浅田、氏家：1966年6月1日付児童遊園決定事項(打合せメモ)、財団法人こどもの国協会の好意により2006年に複写

50 ibid.

51 藤田氏との論者の面談(註36参照)

擁壁と共に1966年度上半期に施工され、現存しているが通行はできない(2023年11月現在。コンクリート擁壁は一部が残っている)。

「切り通し」は児童館敷地西縁に沿う舌状の丘を東西に貫き⑩「岩山」に通じている。路面は出入り口部分が低く中央が高い弓形で、左右の丘の切断面が大地の輪郭を表している。この崖にも石積が予定されていた。竣工写真は児童館側(入口)と通路頂上付近、及び岩山側(出口)から撮られており、児童館側には小橋の先に板を貼った階段が7段ほど確認できる(fig.47)⁵²。切り通しの石積は施工されていない。切り通し自体は現存する可能性があるが、今日の現場は樹木に覆われて確認できない。

⑩岩山

《*岩山(芝山)平面図・立面図・断面図》
(fig.48)

1965-66年、縮尺表記なし、鉛筆、トレーシングペーパー、78.6×108.2cm

《旧002配置図》他の書き込みを参照すると、切り通しの北側に張り出していた舌状丘を削り、放物線状の輪郭をもつ緩やかな斜面とし、てん圧して適宜岩を配する。放物線輪郭に沿って擁壁(碎石コンクリートはつり仕上げ)を設け、下端は小川(幅50cm、玉砂利洗い出し)で仕切られる。「岩山」はその後幾度かの変更を受け「芝山」と改称されたが、施工されずに終わった。後述するように予定地の造成も行われた形跡がない。

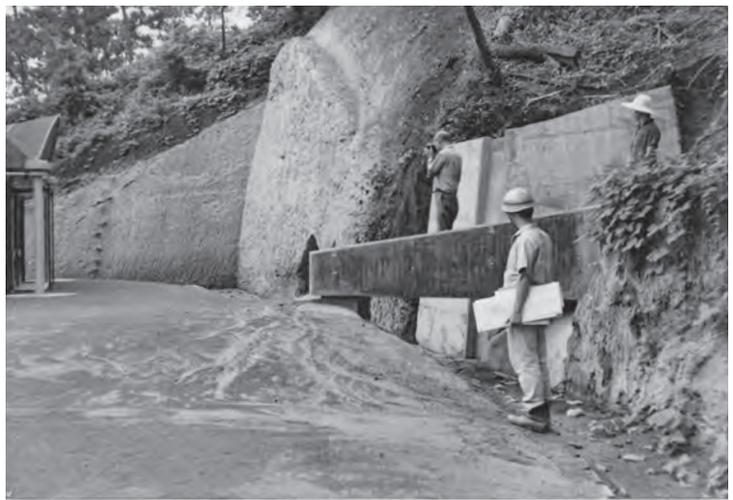


fig.46 《児童館西の小橋からカメラを構えるイサム・ノグチ》1966年、ノグチ・アーカイヴ(ニューヨーク)蔵 inv.no.12060
〈Isamu Noguchi on the ponticulus by the Children's House〉1966, The Isamu Noguchi Archive, inv.no. 12060
©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York/ARS-JASPAR

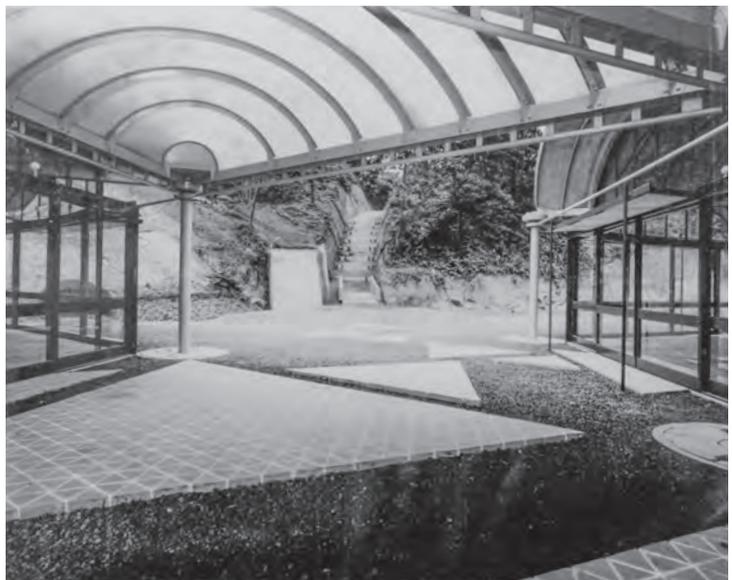


fig.47 《児童館と切り通し入口 竣工写真》撮影：大谷研究室(旧設計連合)、1966年、大谷研究室蔵
〈Children's House and Entrance of the Pathway〉photographed by Otani Associates (former Sekkei Rengo), Collection of the Otani Associates

52 切り通しの出口側の写真は公開されていなかったが、文化庁国立近現代建築資料館所蔵の「昭和40年度A地区児童遊園完成写真 昭和41年7月撮影」(財団法人こどもの国建設協力会)で確認できた。

⑪スベリ台

《301 スベリ台詳細図》(fig.49)

1965-66年、縮尺1:50、1:300、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、54.9×80.1cm、

署名、インク、左下：Isamu Noguchi

標題、図番、縮尺、スタンプ、右下。

工事仕様表、鉛筆、スタンプ、右下。

全体模型では、西側長辺の北にこどもの国周回路が見え、そこから分岐して児童遊園の敷地に入る通路が表現されている。その通路途中に、丘の上のスベリ台に上がる階段が設けられている。《301詳細図》中の配置図では、このアプローチがより複雑で、「岩山」の西を通る通路から分岐した階段を登ると一旦小さな広場に出、正面の石積擁壁(幅11m)の右手の小径を登って左手にスベリ台の背面階段、右手はスベリ台下の児童遊園敷地に至る⁵³。スベリ台はいわば児童遊園の北西側の入り口に計画された。

スベリ台敷地は比較的急な丘に囲まれた舌状傾斜地を土盛りして芝生のマウンドを作り、頂上に幅約7mの台形状の台座(RC打ち放し)を設け、背面に階段、正面にスライド二基(スライド面ステンレス板)を備える。スライドの高低差は約4.6m、水平方向長さ10.6mである。スライド降り口は舌状の輪郭をもつ砂場(奥行き7m)となる。マウンドと砂場はRCで縁取りされる。

複線式スベリ台をもつマウンドは、ノグチの《リヴァーサイド・パーク・プレイグラウンド》でも計画された。その第一案には《スライド・マウンテン》の個別模型があり、ここではマウンドは乳房のように二つ並べられ、それぞれに階段とスライドが設けられている⁵⁴。

こどもの国の複線式スベリ台は施工されず、敷地造成も行われなかった。代わりに単線式スベリ台が旧岩山の敷地に1966年に計画されるが実施されなかった。

⑫三角砂場

《308 三角砂場詳細図》(fig.50)

1965-66年、縮尺1:100、1:50、1:20、1:10、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、54.7×80.0cm

署名、インク、左下：Isamu Noguchi

標題、図番、縮尺、スタンプ、右下。

工事仕様表、鉛筆、スタンプ、右下。

一辺の長さ30mの巨大な正三角形プランの砂場(面積約390m²)である。西側頂点を⑩「岩山」に向け、三角形中線と岩山中心線を揃えて配置される。三角形の各辺には高さ50~70cmの幾何学的な形の「擁壁」(M1~M3)が交差し、M3の先にはモノリス状の彫刻M4、砂場の中にトンネルをもつ台形彫刻M5、同じく台形の頂部をU字形に掻き取った彫刻M6を配する。

53 大谷研究室資料群にはこのスベリ台配置図の元になったコンタ図(手描き)もある。

54 《Slide Mountain Study》(1961-1962年)、プラステイシン、合板、ノグチ・ミュージアム蔵 Inv.no.5

《旧002配置図》を見ると、「三角砂場」の北側頂点の中線は⑬「原始部落」の台座敷地中心線と一致している。また、南辺から突出する擁壁M1の先端部中線は⑭「ブランコ」の中心線と一致し、その先には⑯二つの池に挟まれた丘に登る階段（「峯の散歩道」に繋がる）も同軸上にある。擁壁M2の先端部は⑰「スベリ台」の方角を指している。このように「三角砂場」は児童遊園レイアウトの要になっている。

正三角形は児童館の屋根や床にも現れ、舌状形と共にこの児童遊園を特徴付けるもうひとつのライトモチーフとなっている。また、正三角形はフラワーのジオデシック構造やオクテット・トラスの基本エレメントでもある。

「三角砂場」は原案のみで、その後「*半円砂場」（《002配置図》fig.20参照）を経て「*花形砂場」へと変更され、1966年度下半期に施工された（fig.51）。



fig.51 《花形砂場と児童館：竣工写真》ノグチ・アーカイヴ（ニューヨーク）蔵
〈Sandpit and Children's House〉 photographer unknown. 1966, The Isamu Noguchi Archive, New York ©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York/ARS-JASPAR

⑬原始部落

《307 原始部落詳細図》（fig.52）

1965-66年、縮尺1:50、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、55.0×80.0cm

署名、インク：左下「Isamu Noguchi」

標題、図番、縮尺、スタンプ、右下。

工事仕様表、鉛筆、スタンプ、右下。

《*原始部落台座平面図・立面図》

1965-66年、縮尺表記なし、鉛筆、トレーシングペーパー、55.2×80.3cm

「原始部落」は全体模型では台座のみが表現されているが、《307詳細図》と個別模型の写真（fig.17）によれば、屋根型の彫刻が載せられる予定であった。丘に囲まれた舌状傾斜地に19.5×10mの区画を設け、RCによる矩形の台座（床）13基を置く。区画の中心線は三角砂場の北側頂点の中線と一致する。床の隙間を掛け渡すように3つの屋根型「竹製彫刻」No.1～3が載る。妻部が内側に傾斜した穹窿で、側面にも低い出入口があり、内部で通路が交差する。屋根の形状はそれぞれプロポーションや棟部の輪郭が異なる。《307詳細図》中の仕様には「竹製彫刻／主構造：真竹 竹を網代状にあんでシュロナワでとめる。アンカー シンチュウ」とある。タイトルに相応しい野趣が感じられるが、シンプルな屋根の形状は家形埴輪に触発されたものかもしれない⁵⁵。「原

55 ノグチは広島平和記念公園慰霊施設のデザインで「家形埴輪」をヒントとしたと語っている。

始部落」は施工されなかった。

⑭ブランコ

《309 ブランコ詳細図》(fig.53)

1965-66年、縮尺表記なし、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、54.8×80.0cm

署名、インク、左下：Isamu Noguchi

標題、図番、スタンプ、右下。

工事仕様表、鉛筆、スタンプ、右下。

《310 ブランコ》(fig.54)

1965-66年、縮尺1:50、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、55.0×80.2cm

署名、インク、左下：Isamu Noguchi

標題、図番、縮尺、スタンプ、右下。

三角錐(四面体)状のフレームの長大な斜辺を利用して、吊り位置の高さが異なるブランコ6人分を備える。フレームの高さ約9m、横幅約17m、奥行き約8mである。矩形フレームによる一般的なブランコとは異なり、ここではひとつひとつの振幅が違い、子供は年齢・体格に応じて選ぶことができる。

イサム・ノグチは三角錐フレームによる三連ブランコを1940年にハワイのアラ・モアナ・パークのために初めてデザインした(fig.55)⁵⁶。「こどもの国」用はより大きく六連となり、フレームの形状も一部変化している。また、ノグチのプレイグラウンド中、実施されたもう一つの作例であるアトランタのピードモント・パークの《プレイスケイプス》(1975-76年)には二次元的な三角形フレームを二つ並べた五連ブランコがある。

「こどもの国」の六連ブランコは計画変更の過程で一時2基を設置する案もあったが、施工されずに終わった。

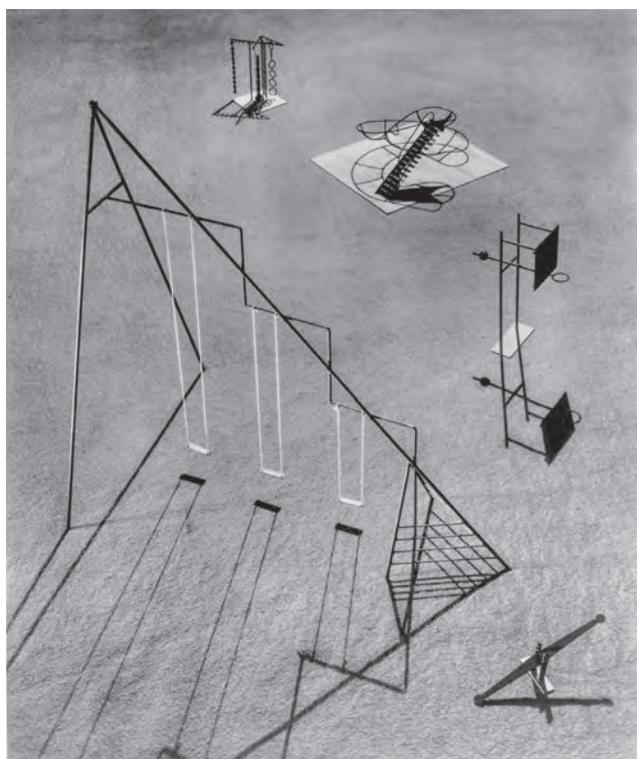


fig.55 イサム・ノグチ《アラ・モアナ・パークのための遊具模型》1940年、撮影：Fay Sturtevant Lincoln、ノグチ・アーカイヴ(ニューヨーク)蔵

Isamu Noguchi 〈Playground equipment for Ala Moana Park, Hawaii〉 1940, photographer : Fay Sturtevant Lincoln, "Sculpture by Isamu Noguchi, 1932(J110P111)", Fays Lincoln photograph collection(O1628). Eberly Family Special Collections Library, Penn State University Libraries/ The Isamu Noguchi Archive (New York), Used with permission from the Eberly Family Special Collections Library, Penn State University Libraries. ©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York/ ARS-JASPAR

56 アラ・モアナ・パークのための児童遊園は、ノグチにとって初めて独立した固定遊具をデザインする機会となった。

⑮ ジャングルジムB

《305 ジャングルジムB詳細図》(fig.56)

1965-66年、縮尺1:50、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、55.0×80.2cm

署名、インク、左下：Isamu Noguchi

標題、図番、縮尺、スタンプ、右下。

工事仕様表、鉛筆、スタンプ、右下。

個別模型写真(fig.15)

長円形の砂場の上に、擬似半球体を縦に二分した形体同士を少し離して、切断面を向き合わせて置き、間にステンレス棒を水平方向に多数渡してジャングルジムとしたもの。高さ3m、幅6m、奥行き4.68m。形体の芯は土盛りで、鉄筋コンクリートを被せ、表面は人造石研出し仕上げである。東西の側面には鉄筋タラップが設けられ、子供はこれを登って上からジャングルジムに入ることもできる。

向かい合う垂直面(板)の間に水平の棒を複数わたすジャングルジムは、後年のノグチの作例(アトランタの《プレイスケイプス》、札幌のモエレ沼公園)にある。「ジャングルジムB」はその嚆矢と言えよう。「ジャングルジムB」は1966年下半期まで施工対象に含まれていたが、計画変更により施工されなかった。(経緯は次稿)

⑯ 池、跳び越え橋、小川

⑱ ジャングルジムA 敷地

《302 池・橋・砂場・その他詳細図》(fig.57)

1965-66年、縮尺1:100、1:50、1:20、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、54.8×80.0cm

署名、インク、左下：Isamu Noguchi

標題、図番、縮尺、スタンプ、右下。

工事仕様表、鉛筆、スタンプ、右下。

《R-18 ジャングルジム廻り詳細(追加)》(1966年5月10日、5月17日：fig.58)

1966年、縮尺1:100、1:20

標題、図番、日付、鉛筆、右下。

児童遊園敷地の東側には「小川」(幅0.6~1m、深さ約0.2m)が設計された。北東端の⑱ジャングルジムAの敷地南端を起点とし、傾斜に沿って⑯「池1」(直径6.4m)に注ぎ、「峯の散歩道」に至る階段の地下に設置されたパイプを介して東側の「池2」(同)と繋がる。小川は「池2」からさらに南へ丘の縁に沿って④アプローチの「築山」南端の「雨水舂」に至る。「池1」の北には小川を両岸から挟み込むように配置された二つの台形からなる「跳越橋」がかかり、⑰「ピラミッド」への通路となる。コンクリート製の橋の中央には幅30cmの間隔があり、子供は両岸から傾斜(水平長5m、高さ1.1m)を駆け上がって小川を飛び越える。橋の幅は両端部5.8m、先端部1.6mである。⑱「ジャングルジムA」敷地は水滴型プランの砂場とし、コンクリートで縁取る。中心にはオクテット・

トラスに用いられたアルミロッドによるジャングルジムを設置するためのアンカーが置かれる。ここから池1に向かう小川には角を落とした長さ360mmのPCブロックの列で縁取られる。

その後の設計変更により、「池1」と「池2」は統合されてひとつの池となり、「跳越橋」は「丸橋」に変更、「小川」のルートも少し変更された。それらの内、1966年度上半期に「小川」、「池」、「ジャングルジムA」敷地は施工され、竣工写真が残っている (fig.59, fig.60)。ノグチがいかに強く「ジャングルジムA」の設置を望んでいたかが伺えるが、遊具自体は実現しなかった。2023年現在、その敷地の輪郭が確認できる他、小川のPCブロックもある程度現存している。

⑰ピラミッド

《306 ピラミッド詳細図》(fig.61)

1965-66年、縮尺1:50、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、54.7×79.8cm
署名、インク、左下：Isamu Noguchi
標題、図番、縮尺、スタンプ、右下。
工事仕様表、鉛筆、スタンプ、右下。

個別模型写真 (fig.14)

幅0.6mの十字形通路を、4体の彫刻A~Dが取り囲んでいる。4体は高さ(2.85m)こそ等しいが、平面サイズは微妙に異なり、表面の階段形状のピッチと長さや、アルコーブの大きさと配置も個体ごとに一定範囲で変化する。この「ピラミッド」はどの面から見てもシンメトリーにはならない。遊具としての面白さもさることながら、彫刻作品としても意欲的な造形である。

ノグチにとってピラミッドは1933年の《鋤のモニュメント》と《プレイマウンテン》以来、記念作品やプレイグラウンドの重要なモチーフで、《リヴァーサイド・パーク・プレイグラウンド》の模型やイエール大学バイネツケ稀観本図書館のサンクンガーデンにも現れるが、「こどもの国」の4分割ピラミッドはユニークな存在と言える。残念ながらこの「ピラミッド」は施工されなかった。



fig.59 《池：竣工写真》1966年、ノグチ・アーカイヴ(ニューヨーク)蔵 inv.no.12038
〈Pond〉 photographer unknown, 1966, The Isamu Noguchi Archive (New York), inv.no. 12038 ©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York/ARS-JASPAR



fig.60 《ジャングルジムA 敷地：竣工写真》1966年、ノグチ・アーカイヴ(ニューヨーク)蔵 inv.no.12045
〈Place for Jungle Gym A〉 photographer unknown, 1966, The Isamu Noguchi Museum (New York) inv.no. 12045 ©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York/ARS-JASPAR

6) ノグチ滞在第1期の配置図及び児童館建築の展開

a. 原案に先行する二つの配地図と断面図(B群e)

上に見た全体模型及び原案配置図《旧002配置図》は、1965年11月末のノグチ離日までの間に完成したプランを表している。大谷研究室資料群には児童遊園の配置図が複数含まれるが、内容的に原案配置図に先行すると思われるものが2点特定できる。それらをここでは制作順に「N1配置図」、「N2配置図」と呼ぶ。また原案を改訂した配置図は次稿で扱う。以下にN1、N2両配置図をみていく。この他N2配置図の罫線による断面図「N2断面図」がある。

《*N1配置図》(1965年：fig.62)

1965年、縮尺表記なし、鉛筆、色鉛筆、インク、トレーシングペーパー、78.6×109.3cm

12本の縦罫(A~L)、9本の横罫(0~8)からなるメッシュ上に、スケートリンクを含む児童遊園全体が納められている。デザインが鉛筆、コンタ(等高線)が朱の色鉛筆で描き込まれている。

大谷研究室資料群の児童遊園配置図には(測量)基線が引かれているが、本図では横罫4と6の間を斜めに走っており、他の配置図に比して敷地は紙面に対してやや斜めに配置されている。

内容的特徴は以下の通り(項目番号は全体模型の表示による)。

- ②スケートリンクは舌状形ではなく台形の変形で、④前庭北の舌状形を踏襲していない。
- ③「亀ノ子砂場」がない。
- ④児童館前の門は丸アーチではなく、矩形面で構成される。
- ⑧児童館建築が描かれていない。
- ⑪スベリ台と⑬原始部落の形状が原案とは異なり、両者を結ぶL字状の通路が設けられている。
- ⑫三角砂場の輪郭を2度描き込んだ跡があるが消しゴムで消されている。
- ⑭ブランコがない。
- ⑮ジャングルジムBの位置が⑰ピラミッドに隣接する。
- ⑯池1、池2がない。
- ⑱ジャングルジムAにはトラス構造が描かれている。

以上の点と、N2配置図以降はスケートリンクが舌状形となることから、N1配置図は大谷研究室資料群中最も早い時期に作図されたノグチのデザインによる児童遊園の配置図であると判断される。

《*N2配置図》(1965年：fig.63)

1965年、縮尺表記なし、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、78.7×107.7cm

15本の縦罫(Y-9~Y0~Y5)、10本の横罫(X-6~X0~X3)からなるメッシュにスケートリンクと児童遊園全体を納める。基線はX0に一致し、図の角度が修正された。N1同様に児童館の建物は描かれていないが、②スケートリンクの形と位置は原案と等しく、③亀ノ子砂場が原案とほぼ等しい位置に描かれ、⑫三角砂場も岩山との関係で原案と同じ位置に置かれている。しかし⑬原始部落との関係は未整理で、砂場上の彫刻や擁壁

も原案とは異なる。⑪スベリ台の砂場から小川が伸び、三角砂場の東側の辺に沿って⑨切り通しの山の外周側溝に繋がっている。⑭ブランコの位置も原案とは異なる。⑮ジャングルジムBの位置は原案と等しい。

これらの結果から、N2配置図はN1配置図の後、原案配置図の前の時期に作図されたと考えられる。

b. 児童館デザインの新たな方針

元々「林間学校」の隣に予定されていた児童館をA地区児童遊園敷地内に設置し、デザインをイサム・ノグチと大谷幸夫が担当するという案は、契約書締結に関わらずノグチが実質的に設計参加する前に決まっていた。1965年8月30日に開かれた建設協力会第13回理事会の席上、新たな建設対象であるA地区児童遊園のデザインを依頼しているイサム・ノグチが来園したこと、大谷幸夫に依頼していた児童館の設計案が近日中にまとまること等の事務局説明を補足して、浅田孝は次のように述べている。

「相当広大な部分が未着手となっている。全体として運動場が足りないので、金子九郎氏の了解を得て、児童館をA地区に予定し、児童遊園と結びつけ、水、砂場、広場の要素を加味して、児童館は雨天シェルターを兼ねるものとし幼児、低学年用の施設としたい。建築としては簡素なものとなる。」⁵⁷

ノグチが当初より児童館を含むデザインを提案しようとし、大谷もノグチの全体構想を優先したことの背景には、建設協力会側のこうした意向があったと考えられる。大谷は1965年末頃に次のように述べている。

「児童館と名づけられてはいるが、実際にはこの建物の趣旨はあくまでイサム・ノグチの造園の延長上にあるシェルターのある屋外のスペースというほどのもので、いわば日陰となり、雨宿りなどのための〈あづまや〉と考えれば良い。」⁵⁸

c. イサム・ノグチによるジオデシック・ドーム案と大谷幸夫の反応

先述のように、イサム・ノグチは当初バックミンスター・フラーが発明したジオデシック・ドームを複数並べてシェルター(児童館)として用いる案をもっていた。大谷幸夫はこの提案について1996年に次のように回想している。

「イサムさんは建物のイメージとして初めて(ママ)フラーのドームを提案された。しかし建物のスケールなどを考えると、ドームではせっかくの谷あいの視界が閉ざされてしまい、また遊園地の空間の流動的なリズムと呼応する建物として、球ではあまりにも自己完結的であるように思った。」⁵⁹

57 財団法人こどもの国建設協力会第13回理事会議事録 1965年8月30日開催。「児童館 日本自転車振興会」綴、文化庁国立近現代建築資料館蔵、資料番号17-2-5。浅田発言中の金子九郎は日本児童遊園協会理事で、こどもの国の設計集団「造園部門」に唯一人参加した。マスタープランでの「児童遊園A」の立案に関わったと思われる。事務局説明中の大谷の児童館設計案とは小論で見た「児童館第2案」を指すものと推測される。金子の肩書きについて：『こどもの国50年史』P.254

58 大谷幸夫『SD』No.13(1966年1月)、p.63

59 大谷幸夫「イサム・ノグチさんのこと」p.136

これは「遊園地の…流動的なリズム」という言葉から、既にプレイグラウンドのデザインが明確になった段階での所見と思われる。しかし大谷は直ちに反対したのではなかった。ノグチの原案設計が一旦完成し、施工を控えた1966年1月号のSD誌上での大谷は次のように記している。

「はじめは、イサム・ノグチの案にある三角形のモチーフを平面にして、それに立体トラスを結びつける案を検討したが成功しなかった。」⁶⁰

大谷の言う「イサム・ノグチの案」とはジオデシック・ドームを指し、「三角形のモチーフを平面にして」とは、ドームの外殻構造の単位である正三角形を引用して床面の「モチーフ」にしたということであろう。この時大谷が試みた立体トラスの模型写真が、『建築』1966年2月号に「大谷幸夫 児童館第一案」として掲載されている。(fig.64)⁶¹ ロッドの両端を接合して四面体をつくり、それを組み合わせたように見えるが、オクテット・トラスとは異なる構造のようである。ジオデシック・ドームは見送られたが、大谷はノグチの意を汲んで、まず三角形の床とトラス式の屋根からなる児童館を試みたのである。

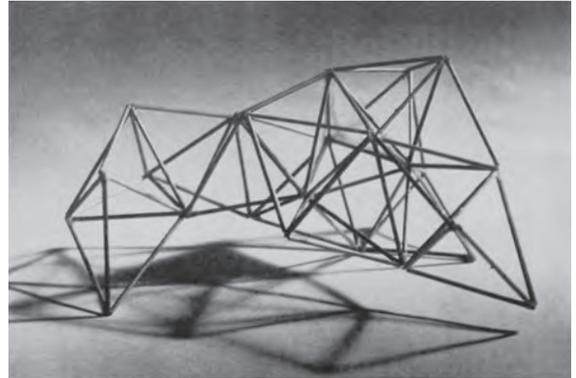


fig.64 大谷幸夫による児童館屋根フレーム案模型写真。写真：T.Oyama、『建築』1966年2月号より
Sachio Otani, Model for Truss Structure for the Roof of Children's House. Photographed by T. Oyama. From the February issue of "Kenchiku," 1966.

d. 大谷幸夫による児童館デザイン(児童館第3案)の生成過程

d-1)《*大谷幸夫による児童館屋根配置図スケッチ》(fig.65)

1965年、縮尺表記なし、鉛筆、色鉛筆、トレーシングペーパー(大判トレーシングペーパーに貼り付け)、73.7×121.8cm

書き込み、色鉛筆、台紙左上：建築8月号(以下略)

立体トラスを断念した大谷幸夫は、「そこで、イサム・ノグチのデザインにある三角形の平面を残し、その上に円錐シェルを覆うことになった」⁶²。新たなシェルの着想源となった体験を大谷は次のように回想している。

「たしか風の冷たい日だったと思うが、家の近くの夜道で、数枚の枯葉がたわむれ合って舞っているように路面を流れていくのが見えた。それは谷あいの子供たちがもつれ合って走り廻る姿と重なって、ようやく今提示されている建物のイメージを結ぶことができた。不思議なことにそこでの屋根ユニットは、

60 イサム・ノグチ、大谷幸夫「作品2—こどもの国・児童館と遊園地」『SD』No.13(1966年1月)p.63

61 イサム・ノグチ、大谷幸夫「こどもの国 遊園・児童館」『建築』No.66(1966年2月)p.88

62 大谷『SD』13. P.63

フラワー・ドームのユニットと大変類似している。イサムさんも直ちにこの案にOKを出してくださった。』⁶³

大谷研究室資料群のこの配置図スケッチに見る児童館屋根の、銀杏の葉のような形が螺旋状に連なる動きのある配置は、大谷の言葉をよく裏付けている。興味深いことにスケッチ中のスケートリンクは「N1配置図」のそれであり、一方「三角砂場」は「N2配置図」に近く、制作時期は両配置図の中間に位置付けられるだろう。この案が出たのは、枯葉の回想から、ノグチ離日も迫った1965年10月～11月頃と推測される。本スケッチは『建築』1966年8月号に写真掲載されている。

d-2) 児童館屋根デザインの具体化

《101 こどもの国児童館屋根伏図》(fig.66)

1965-1966年、縮尺1：100、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、55.2×81.0cm

設計者名、スタンプ、左下：大谷幸夫

標題、図番、縮尺、スタンプ、右下。

《R-13 ＊児童館屋根伏図スケッチ》(1966年4月11日：fig.67)

1966年、縮尺表記なし、鉛筆、トレーシングペーパー、57.5×84.3cm

図番、日付、右下。

大谷の最初のスケッチに見る児童館屋根の動きのある配置はしかし、「これだけ単位数が多い場合には構造的に柱が多くなりすぎて複雑化するだけなので、やはり柱数の少ない規則性が必要になった」⁶⁴。こうした考えから《101屋根伏図》と《R-13屋根伏付図スケッチ》のように整理された。101は梁伏図で、一辺6.72mの正三角形ユニットそれぞれに屋根材料の記号がある。主体は鋼板で、所々にFRP(ポリドームパネル)を用い、屋根架構しない区画(オープン)もある。全体模型でも材料の違い(FRP部分は透明プラスチック)やオープン部分が再現されている。1966年4月11日付のR-13は屋根曲面の方向を示している。101から屋根の配置に若干の変更が行われており、竣工後の写真に近い。

d-3) 児童館床の正三角形群と《リヴァーサイド・パーク・プレイグラウンド》の模型

大谷幸夫の三角形をモチーフにした児童館床は、図面上では《旧002配置図》が最初であり、全体模型でも屋根部品を取り外すとプラットフォーム状に敷地から立ち上がった各ユニットの床を確認することができる。

大谷はフラワーのジオデシック・ドームを念頭に三角形モチーフを発想したと思われるが、その一方で、イサム・ノグチは三角形ユニットをレリーフ状に重層させた遊具「ステップ・ピラミッド」を《国連本部のためのプレイグラウンド》(fig.34)モデルや、《リヴァーサイド・パーク・プレイグラウンド》のいくつかの模型に残している。大谷幸夫の下でノグチによるこどもの国間連の図面を担当していた藤田皓一氏は、イサム・

63 大谷「イサム・ノグチさんのこと」p.138

64 大谷『SD』13. p.63

ノグチが『リヴァーサイド・パーク・プレイグラウンド』モデルの写真を設計連合のアトリエで見せてくれたと語っている⁶⁵。児童館床の正三角形のプラットフォームは、ノグチにとっても意にあってに違いない。

イサム・ノグチは1965年11月27日夜、こどもの国のためのデザインを完成させて帰米した。同日付朝日新聞にノグチは次のようなコメントを寄せている。

「30年来のわたしの設計の体験をすべて生かした。遊び場には自然を残し、自然を生かさなければならぬ。遊んでいて心のたかぶりをおぼえるようなそんな私の夢が、こどもの国のネライともぴったり合っ
てでき上がった。」

同記事は続けて、「芝生の丘の間に長く伸びるスベリ台、ドームをくぐり抜けるジャングルジム、馬のクラ型の置物の中や上を飛びまわれる“原始時代の町”などが点在している。約一千平方メートルの児童館は遊園の真中にあり、三角形の屋根を部屋の大きさに応じて組み合わせ、互いに対角に置いた“抽象画”のような場所」と上に見た原案に沿った設計内容を記述している⁶⁶。

イサム・ノグチの帰米後、東京では児童館建物の設計が急ピッチで進められた。A地区児童遊園の会計年度は昭和40年度で、一刻も早い着工が求められたのである。

イサム・ノグチが再び来日したのは児童遊園の工事が始まっていた1966年4月であった。「こどもの国ニュース」7号は、工事現場に立つノグチの次のような言葉を伝えている。

「こどもたちは、いちばん新しいもの、たとえば宇宙衛星やロケットなどが好きですが、このような新しい時代のものと、大昔の原始時代のような感じのものを組み合わせて、この児童遊園を月世界のよう
なめずらしい、ちがった世界にしたいのです。そのためには、建築に見えないような建物、遊び道具
に見えないような遊び道具でないといけません。」⁶⁷

児童遊園原案に見た埴輪を彷彿させる「原始部落」や古代ギリシア風「野外劇場」などの「大昔」の表象と、フラーのジオデシック・システムとの共存は、ノグチのこうした考えを反映している。《ジャングルジムA》だけでなく、児童館を構成する正三角形、同じく正三角形の砂場、なだらかな丘陵面を覆うように配されたハニカム状の正六角形の縁取りをもつ《亀ノ子砂場》、半球面ドームを二分した《ジャングルジムB》などは、いずれも「新しい時代」を表象し、フラーのシナジェティクスにインスピレーションを受けたものと言えるだろう。これらの遊具は「大地のフォルムとジオデシックス(測地学)の統合」(ノグチ)を具体化するものだった。

例えば《ジャングルジムB》における二分された半球体間の幅2mの空間にステンレス棒18本を渡す作りは、

65 藤田氏との面談。また、『SD』No.13, p.61にも「リヴァーサイド・ドライブの遊園地の計画の模型写真」が掲載されている。

66 「児童館など設計できる こどもの国」朝日新聞(東京版)1965年11月27日(16)

67 児童遊園 こどもの夢を、大きく、広く、そだてたい—イサム・ノグチさんの設計—『こどもの国ニュース』No.7(1966年5月)
p.2

フラーのテンセグリティの概念、元素間や惑星間に働く張力と圧縮力の関係を図解しているようにも見える。球体の表面のトラップを上って狭間に入り、ランダムな間隔で張られたステンレス棒の間を潜り抜けて遊ぶ子供たち。狭間はまさしく動的な空間であり、シナジェティックな空間が体験されるのである。

再来日したノグチは原案実現の夢を語った。しかしその後は児童遊園の設計変更が繰り返され、原案の意欲的な内容は大幅に抑制されていく。(以下、次稿／下)

(横浜美術館主任学芸員)

【謝辞】

小論執筆に当たり、次の方々並びに機関に多大なご協力とお力添えをいただきました。心よりお礼申し上げます。

故大谷幸夫氏、山本敬則氏、藤田皓一氏、植野彰規氏、松崎晃氏、室田恵実氏、大谷研究室、社会福祉法人こどもの国協会、文化庁国立近現代建築資料館、植野石膏模型製作所、広島市立大学芸術資料館

図版データの表記について

大谷研究室資料群の「こどもの国児童館・A地区児童遊園」の図面類は「設計連合」時代の作図であるが、著作権者との話し合いに基づき「作図：大谷研究室(旧設計連合)」とした。



fig.3 環境開発センター《こどもの国計画マスタープラン》1964年5月25日(部分)、ノグチ・アーカイヴ(ニューヨーク)蔵
 Research Center for Environmental Development and Design (Master Plan of the Kodomo No Kuni) (Detail), May 25, 1964, The Isamu Noguchi
 Archive ©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York/ARS-JASPAR



fig.4 《こどもの国計画マスタープラン》(1964年5月25日)におけるイサム・ノグチ担当地区のマーキング。
ノグチ・アーカイヴ(ニューヨーク)蔵
Red marking of Noguchi's playground site on 《Master Plan of the Kodomo No Kuni》 of May 25,
1964, The Isamu Noguchi Archive ©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New
York/ARS-JASPAR



fig.5 大谷幸夫《*こどもの国児童館第1案鳥瞰スケッチ》1964年、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、58.5×42.1cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
Sachio Otani 〈Bird's-eye View Sketch. Children's House (First Design) for the Kodomo No Kuni〉 1964, pencil, ink on tracing paper, 58.5×42.1cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection



fig.6 大谷幸夫《*こどもの国児童館第2案配置図 a》作図：大谷研究室(旧設計連合)、1965年8月10日、鉛筆、色鉛筆、トレーシングペーパー、55.2×80.0cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
 Sachio Otani (Site Plan (a). Children's House (Second Design) for the Kodomo No Kuni), Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), Aug. 10, 1965. pencil, brown pencil on tracing paper, 55.2×80.0cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection.

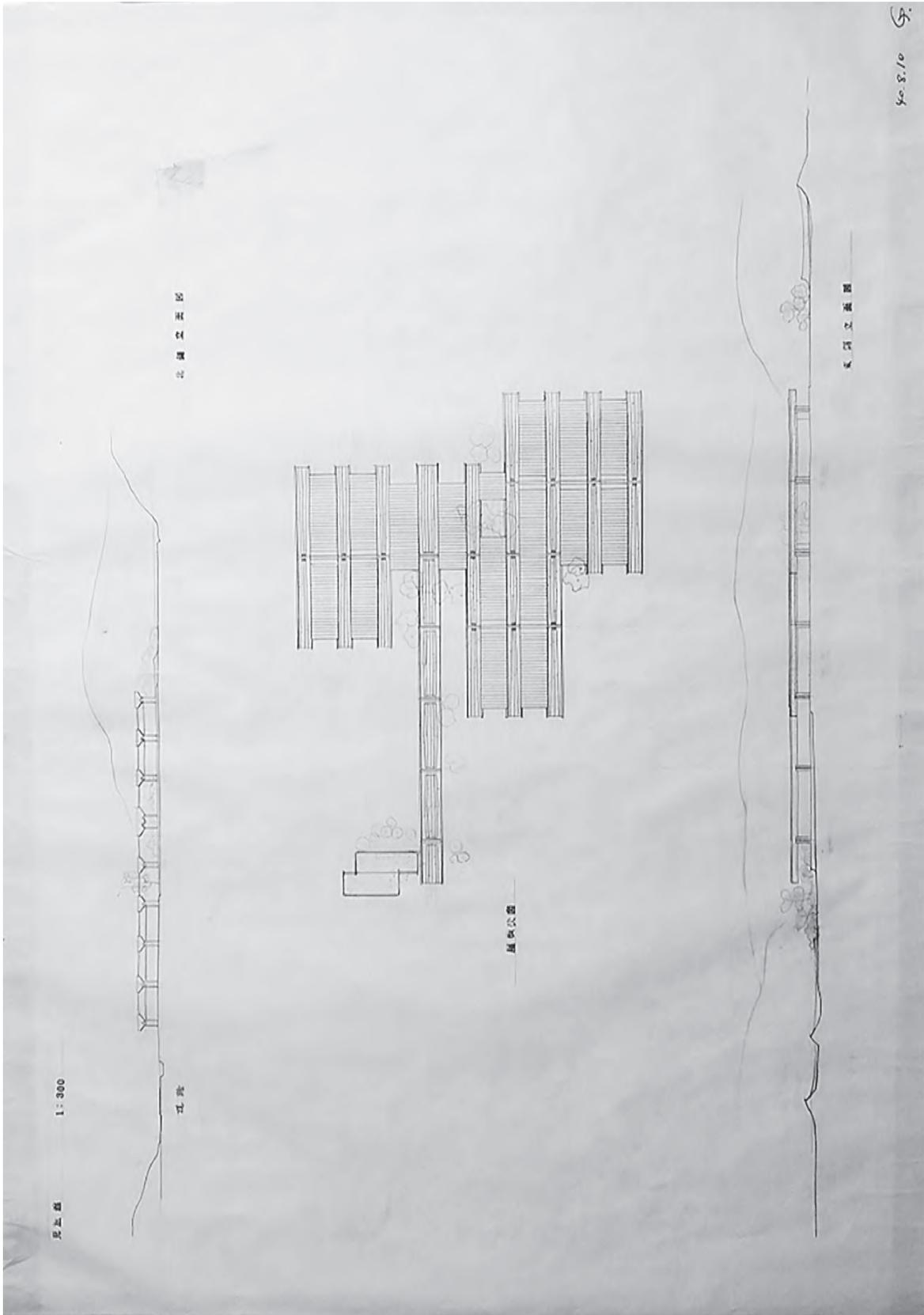


fig.7 大谷幸夫《*こどもの国児童館第2案立立面図・屋根伏図》作図：大谷研究室(旧設計連合)、1965年8月10日、鉛筆、トレーシングペーパー、55.5×79.6cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館A地区児童遊園」資料群
 Sachio Otani (Elevations, Roof Plan of Children's House (Second Design) for the Kodomo No Kuni) Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), Aug. 10, 1965, pencil on tracing paper, 55.5×79.6cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

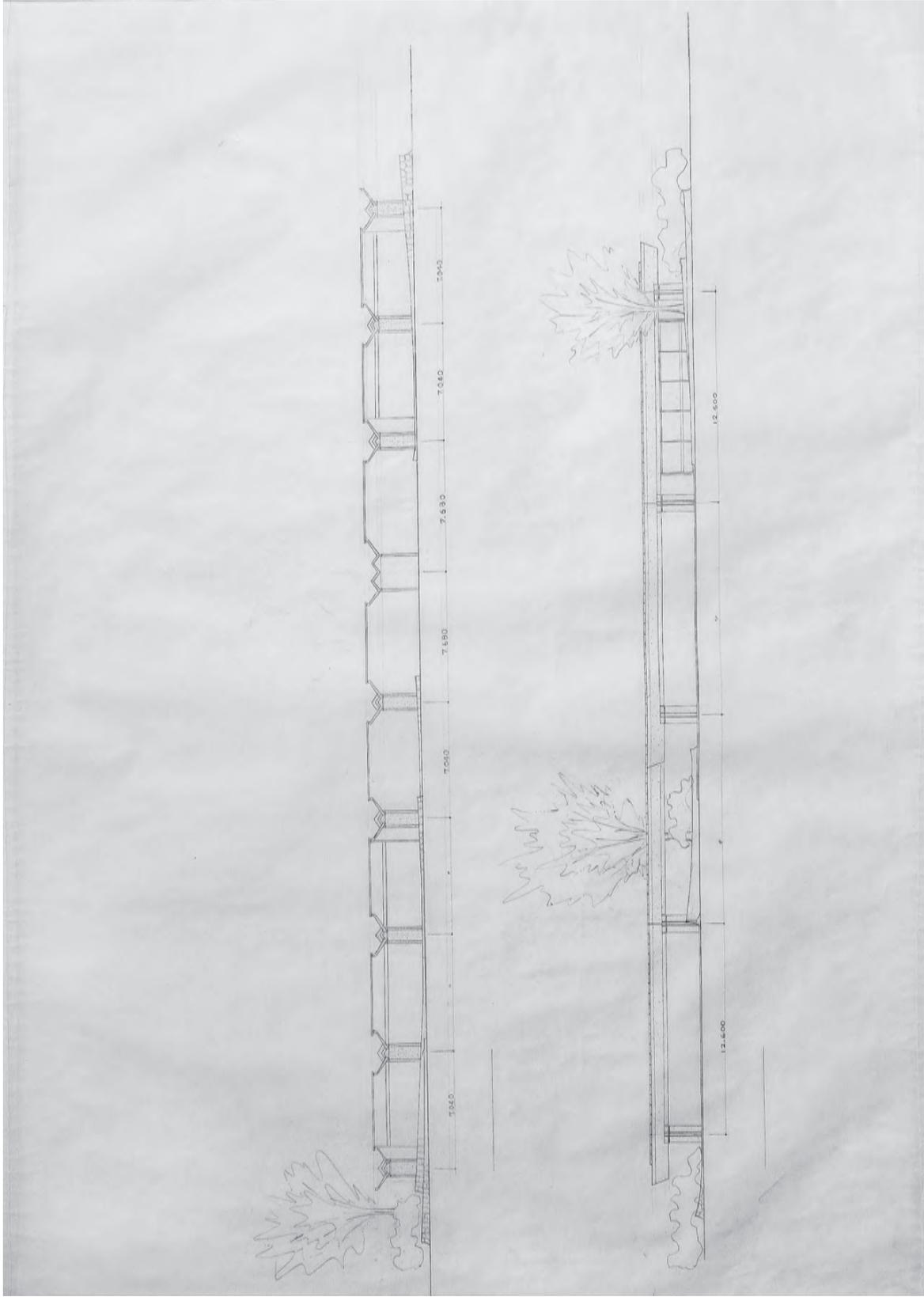


fig.8 大谷幸夫《*こどもの国児童館第2案断面図・立面図》作図：大谷研究室(旧設計連合)、1965年、鉛筆、トレーシングペーパー、54.8×80.1cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
 Sachio Otani (Elevation and Section of Children's House (Second Design) for the Kodomo No Kuni) Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1965, pencil on paper, 54.8×80.1cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

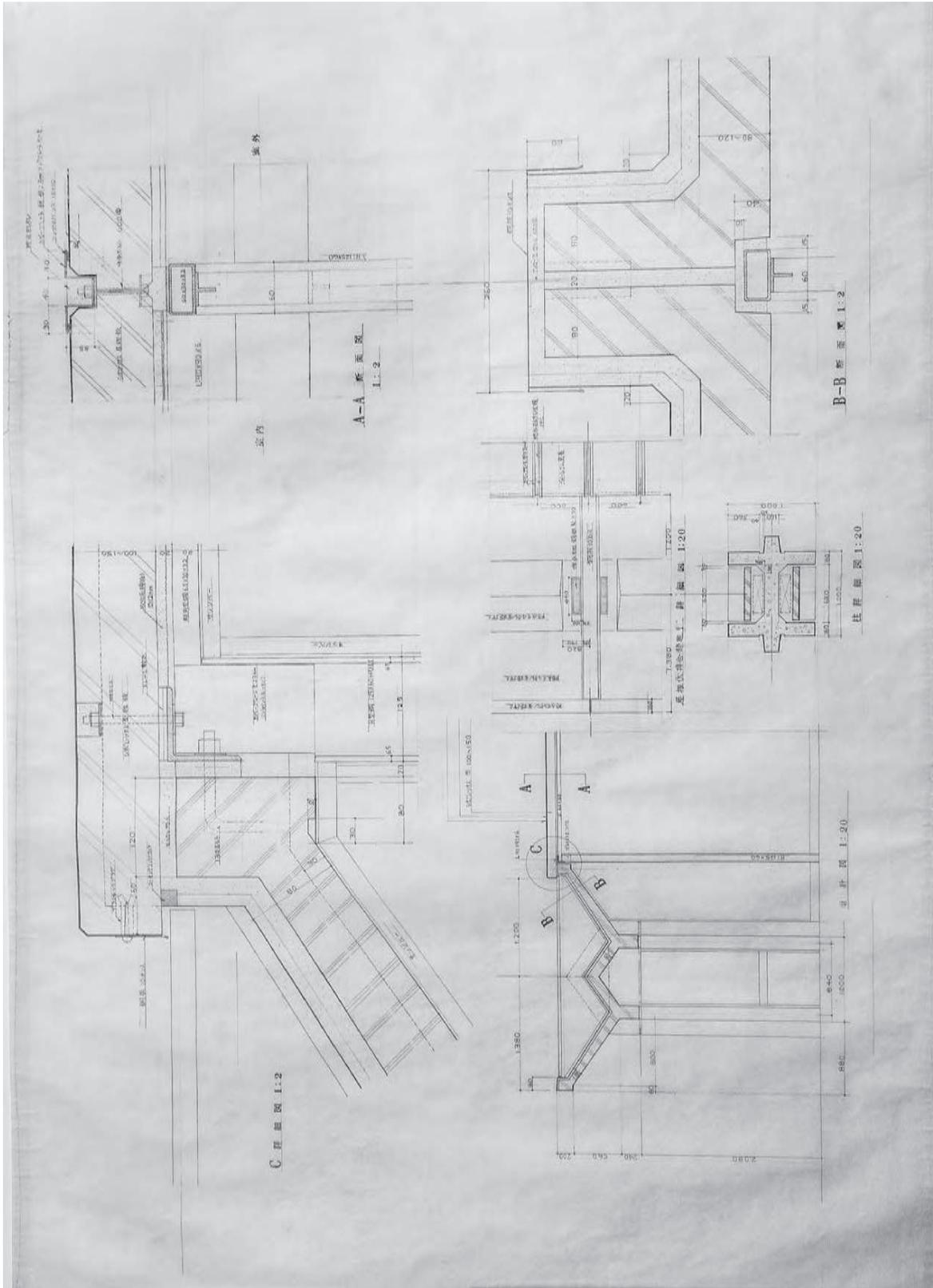


fig.9 大谷幸夫《*こどもの国児童館第2案屋根・柱詳細図》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1965年、鉛筆、トレーシングペーパー、54.8×80.2cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
 Sachio Otani (Detail Drawings of Roof and Pillar. Children's House (Second Design) for the Kodomo No Kuni) Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1965, pencil on tracing paper, 54.8×80.2cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection



fig.10 《*児童館第2案敷地コクタ》作図：大谷研究室(旧設計連合)、1965年頃、青焼、60.3×83.7cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
(Contoured Drawing of the Site for Children's House (Second Design)), Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), ca.1965, blueprint, 60.3×
83.7cm, Otani Associates Kodomo No Kumi Collection



fig.13 イサム・ノグチ、大谷幸夫《こどもの国児童館・A地区児童遊園石膏模型》原型：イサム・ノグチ、大谷幸夫、製作：植野石膏模型製作所、1965年、石膏、真鍮、プラスチック、木製台座とアクリルカヴァー付き。120×143.0×75.0cm(石膏部分)、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群、撮影：論者
 Isamu Noguchi, Sachio Otani (Plaster Model of the Playground and Children's House in Zone A of the Kodomo No Kuni), Master Model : Isamu Noguchi and Sachio Otani, Casting and Manufacturing: Ueno Sekko Mokei Seisakusho, 1965, plaster, brass and plastic, woodpedestal, acrylic cover. 120×143.0×75.0cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection, photographer : Naoaki Nakamura

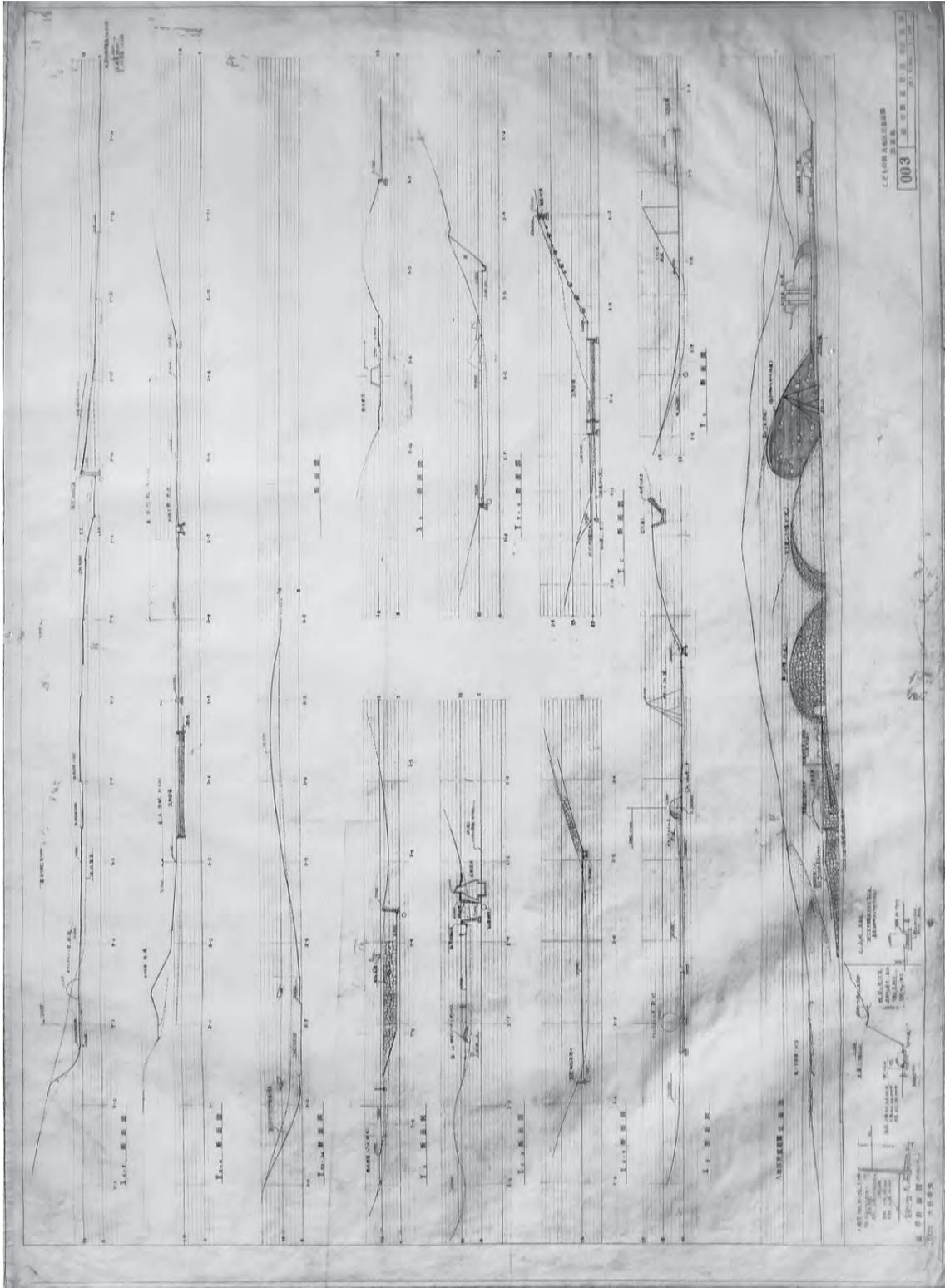


fig.18 イサム・ノグチ、大谷幸夫《こどもの国児童館・A地区児童遊園 003 標準断面図・標準詳細図》作図・大谷研究室(旧設計連合)、1965-66年、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、78.4×108.1cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
 Isamu Noguchi, Sachio Otani (003 Typical Cross Sections and Standard Detail Drawings of Playground and Children's House in Zone A of the Kodomo No Kuni) Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1965-66, pencil, ink on tracing paper, 78.4×108.1cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

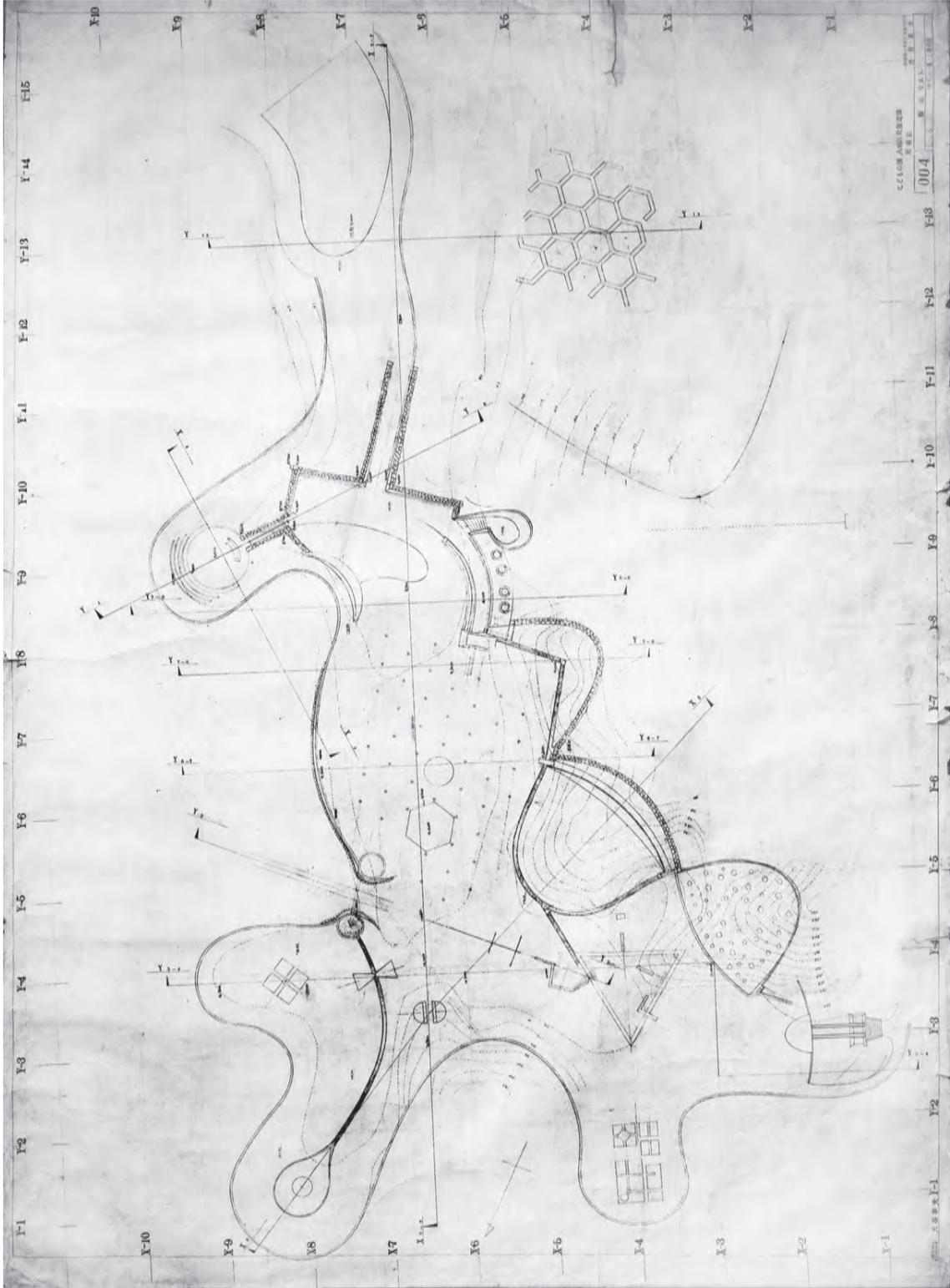


fig.19 イサム・ノグチ、大谷幸夫《こどもの国児童館・A地区児童遊園 004 断面リスト》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1965-66年、鉛筆、インク、青焼、78.5×108.0cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
 Isamu Noguchi, Sachio Otani (004 List Plan of Elevations, Playground and Children's House in Zone A of the Kodomo No Kuni)
 Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1965-66, pencil, ink on blueprint. 78.5×108.0cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

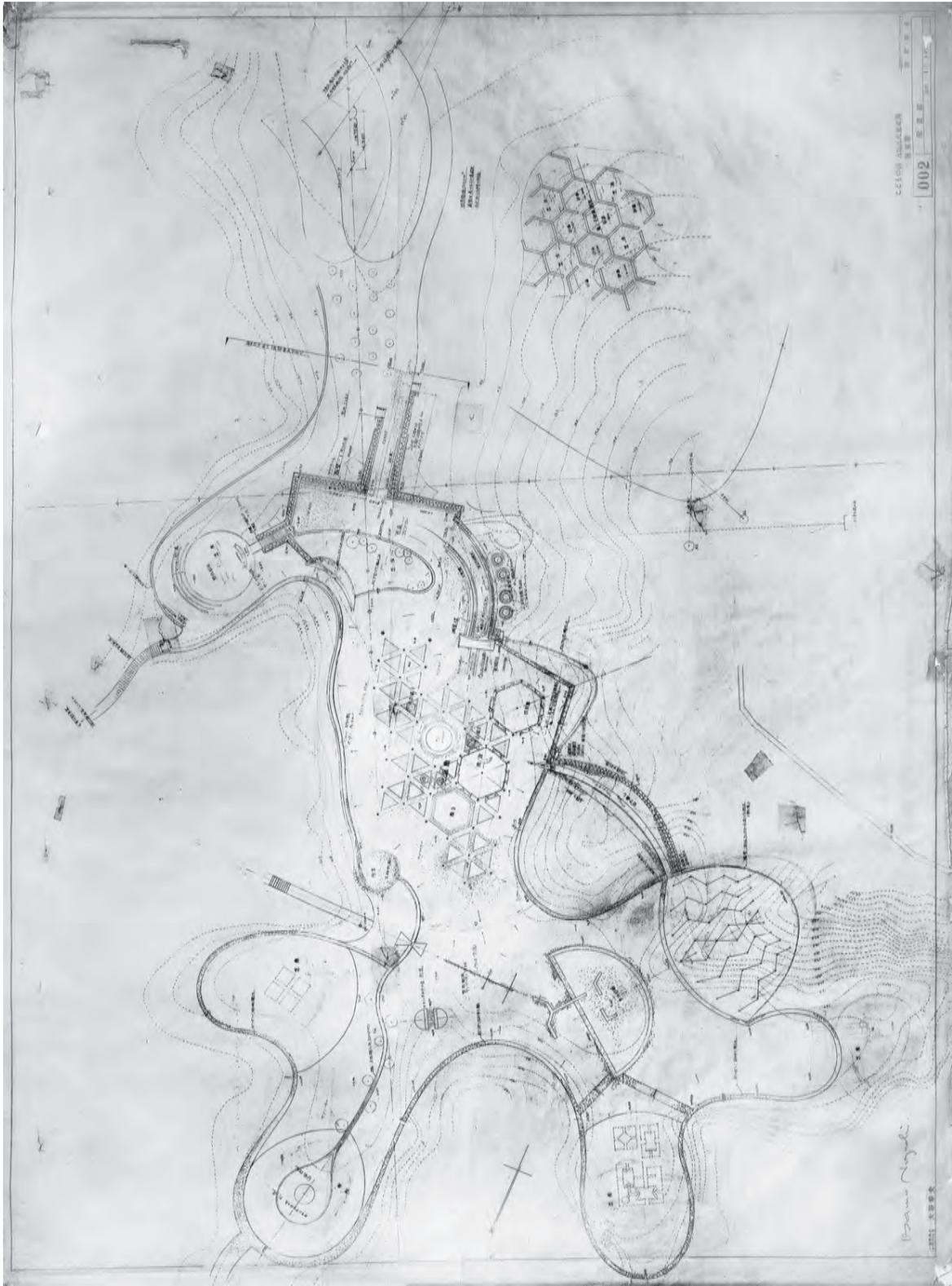


fig.20 イサム・ノグチ、大谷幸夫《こどもの国児童館・A地区児童遊園 002 配置図》作図：大谷研究室(旧設計連合)、1966年、鉛筆、インク、ト
 レーシングペーパー、78.5×108.0cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
 Isamu Noguchi, Sachio Otani (002 Site Plan of Playground and Children's House in Zone A of the Kodomo No Kuni) Drawn by Otani
 Associates (former Sekkei Rengo), 1966, pencil, ink on tracing paper, 78.5×108.0cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

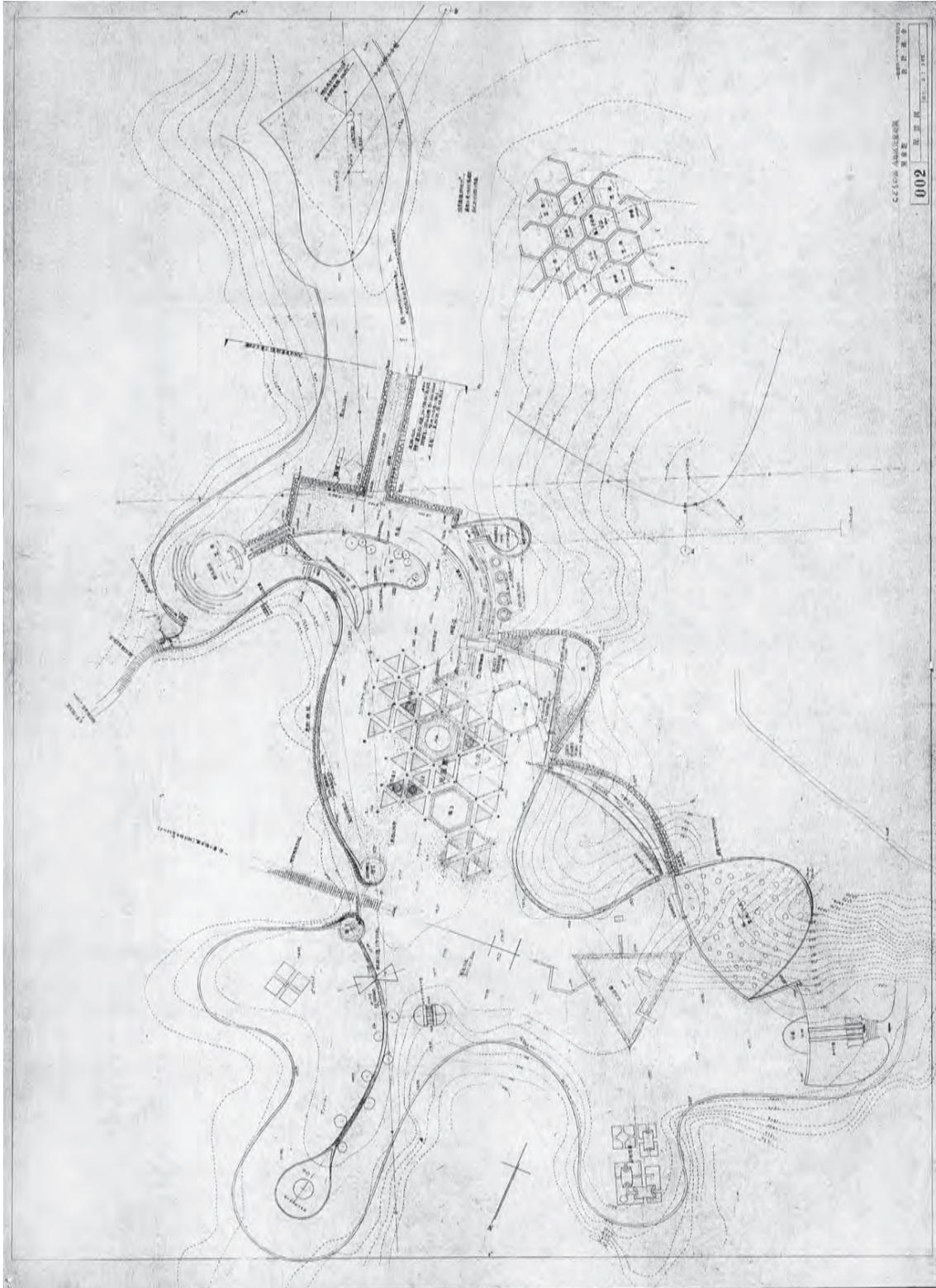


fig.21 イサム・ノグチ、大谷幸夫《こどもの国児童館・A地区児童遊園 旧002 配置図》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1965年、青焼、ノグチ・アーカイヴ蔵 inv.no. CR585.21a
 Isamu Noguchi, Sachio Otani (Original Version) of Playground and Children's House in Zone A of the Kodomo No Kuni), Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1965, blueprint, The Isamu Noguchi Archive, inv.no. CR585.21a ©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York/ARS-JASPAR

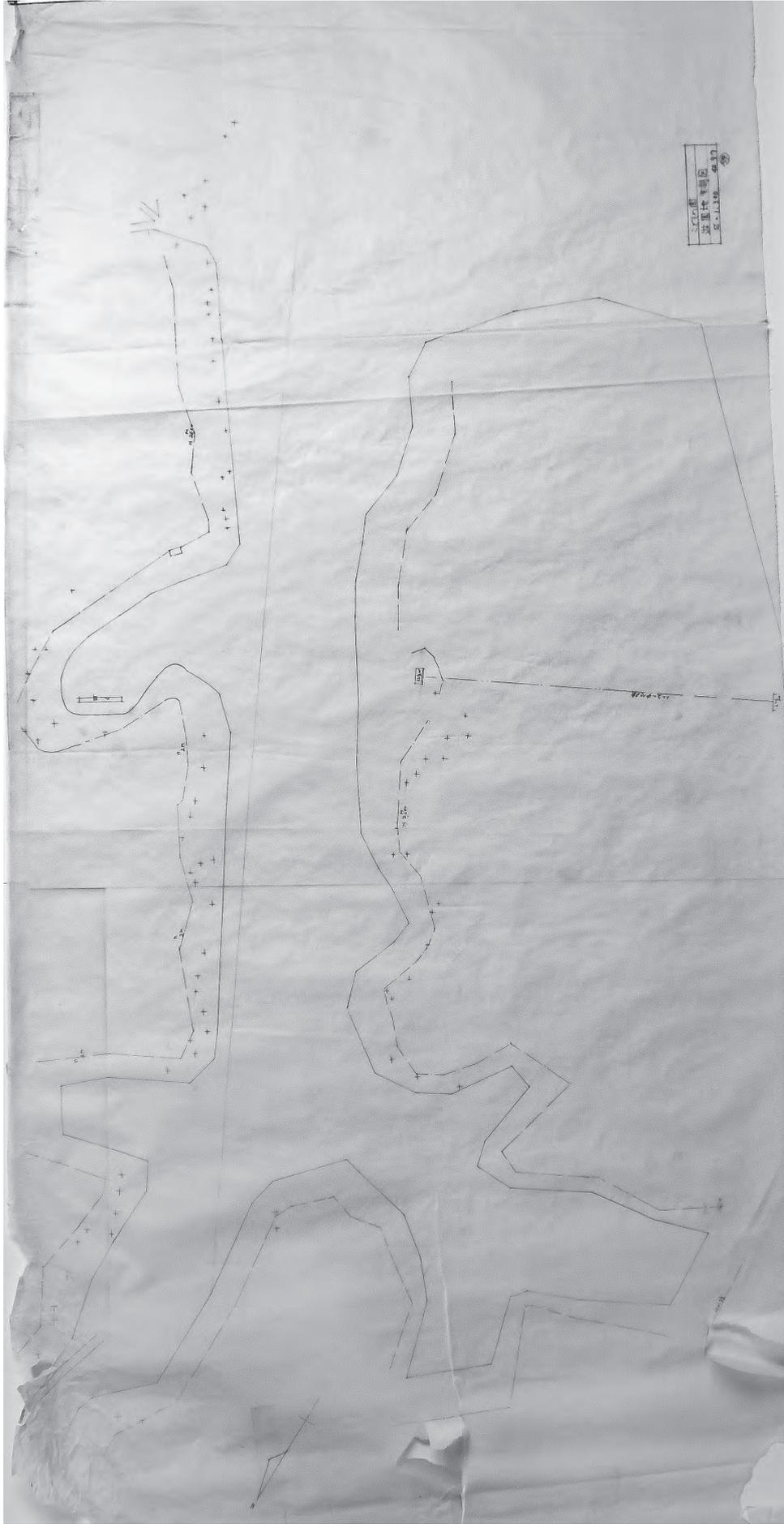


fig.23 《こどもの国遊園地実測図》1965年9月7日、作図：大谷研究室(旧設計連合)、鉛筆、トレーシングペーパー、59.6×133.0cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
(Surveyed Drawing of the Site for Playground in Zone A of the Kodomo No Kuni), Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), Sep.7, 1965, pencil, tracing paper, 59.6×133.0cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

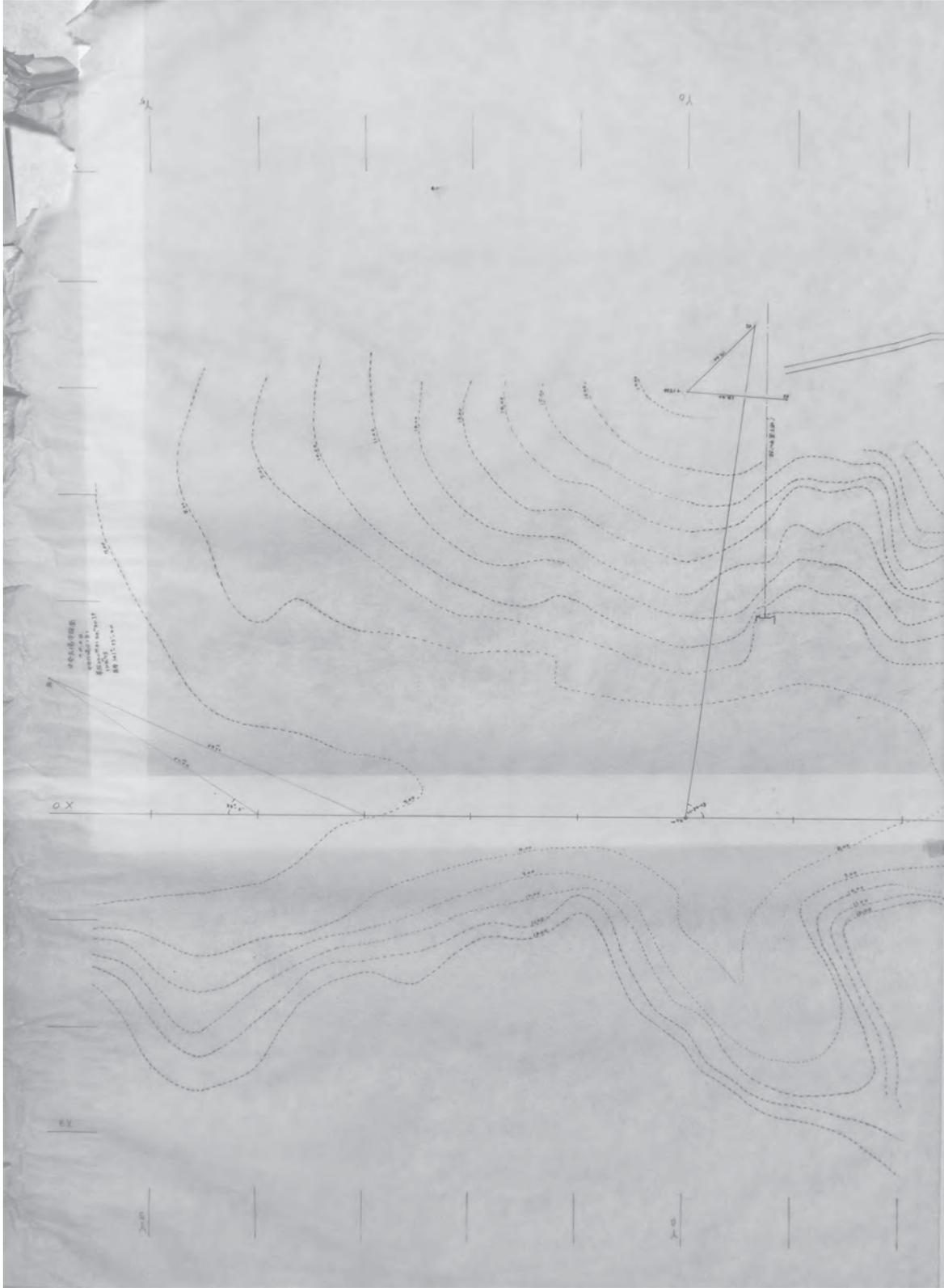


fig.24 《*こどもの国 A地区児童遊園敷地南部コンタ図》作図：大谷研究室(旧設計連合)、1965年、鉛筆、トレーシングペーパー、54.6×88.7cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群(上辺が南。スケートリンク敷地からアプローチ部分を示す)
 (Contoured Plan of South Part of the Site of Playground in Zone A of the Kodomo No Kuni) Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), pencil, tracing paper, 54.6×88.7cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

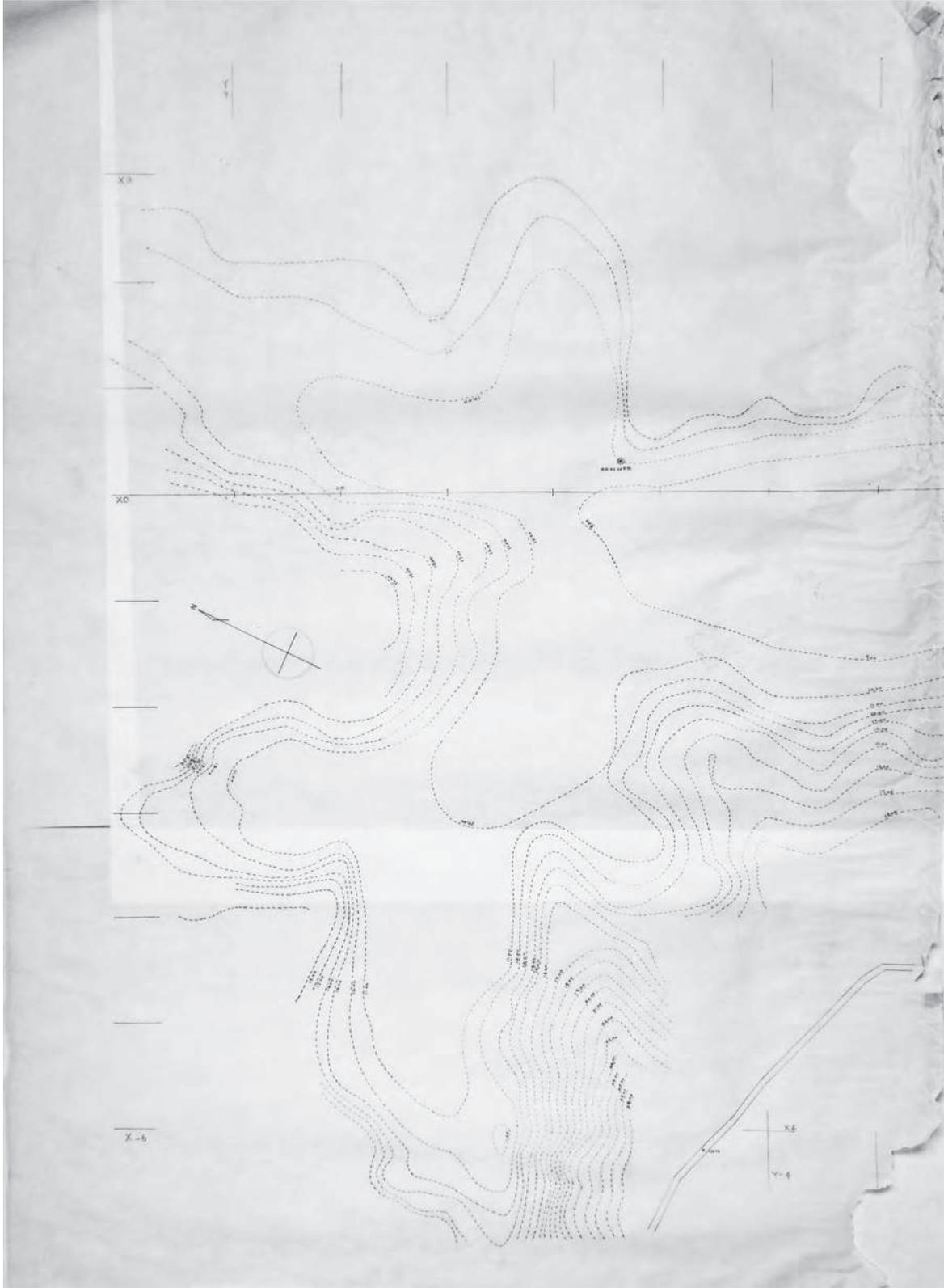


fig.25 《*こどもの国 A地区児童遊園敷地北部コンタクト図》作図：大谷研究室(旧設計連合)、1965年、鉛筆、トレーシングペーパー、84.5×58.4cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群(上辺が北側。児童館敷地から児童遊園敷地を表わす。) (Contoured Plan of North Part of the Site of Playground in Zone A of the Kodomo No Kuni) Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), pencil, tracing paper, 84.5×58.4cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

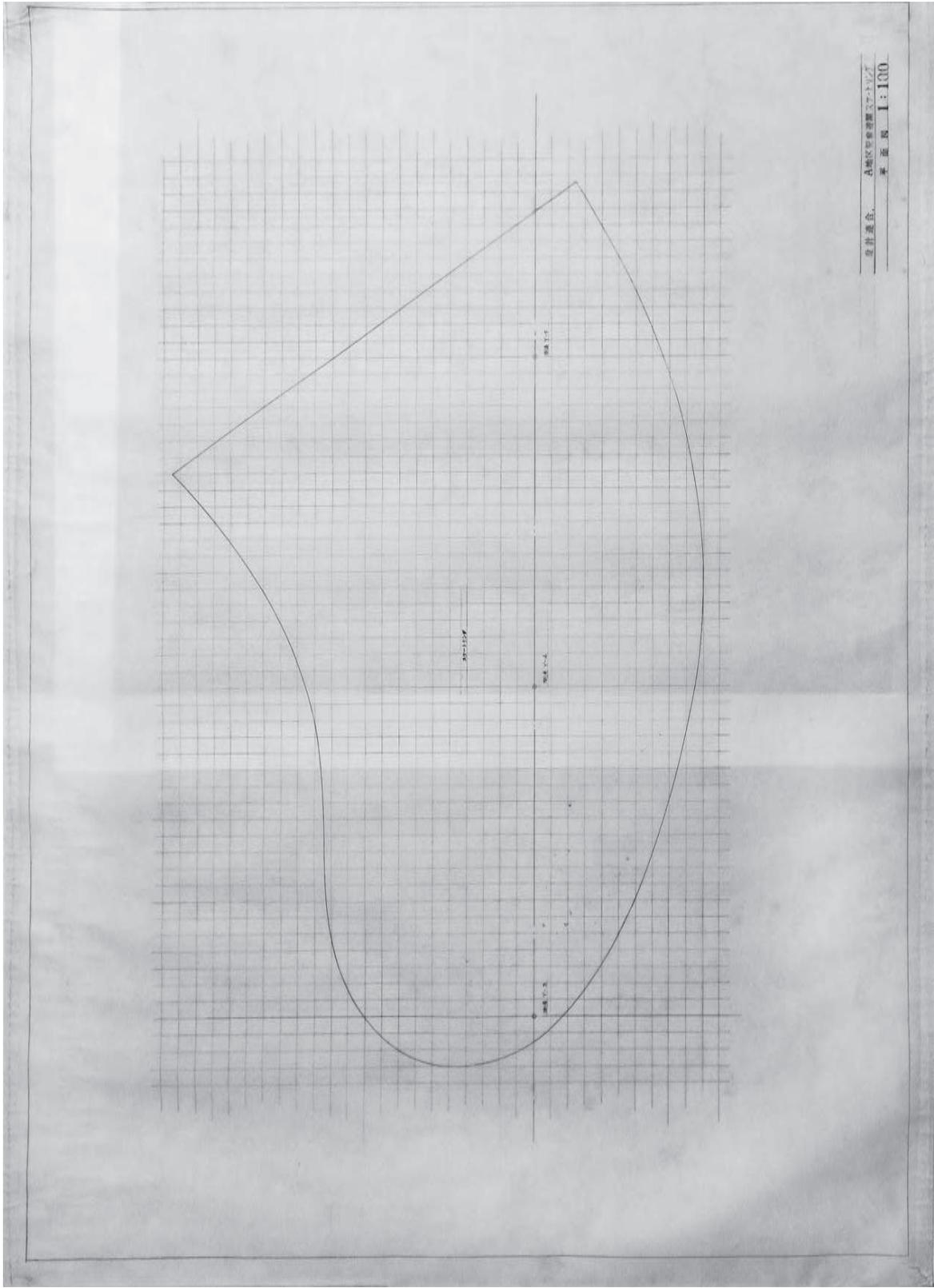


fig.26 イサム・ノグチ《こどもの国 A地区児童遊園スケートリンク平面図》作図：大谷研究室(旧設計連合)、1965年、鉛筆、トレーシングペーパー、55.0×80.2cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
 Isamu Noguchi (Plan of Skate Rink, Playground in Zone A of the Kodomo No Kuni) Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1965, pencil, tracing paper, 55.0×80.2cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

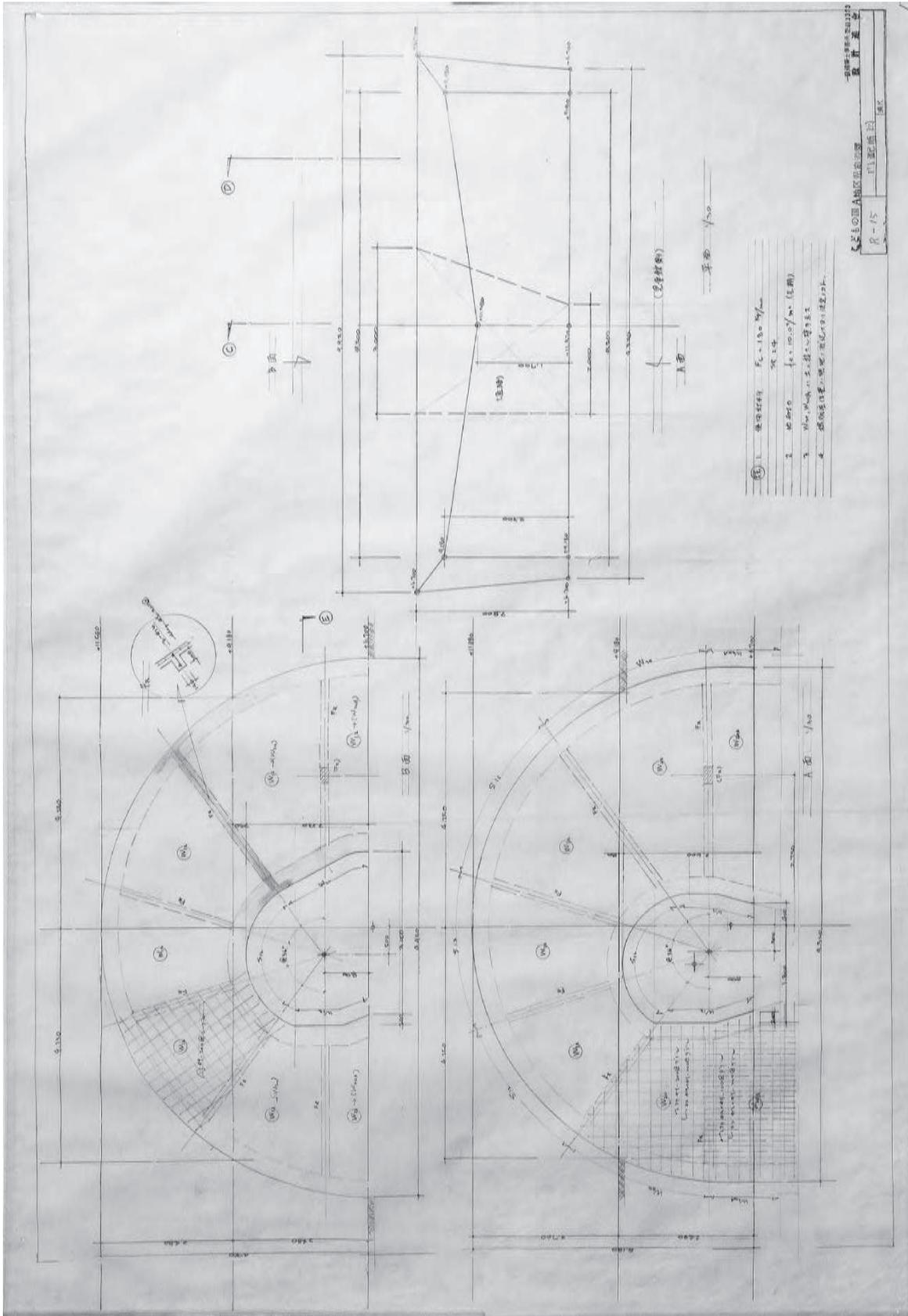


fig.28 イサム・ノグチ《こどもの国 A地区児童遊園 R-15 門配筋図》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1965-66年、鉛筆、色鉛筆、トレーシングペーパー、55.2×80.5cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
 Isamu Noguchi (R-15 Detail Drawing for Bar Arrangement of "Gate." Playground in Zone A of the Kodomo No Kuni) Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1965-66, pencil, red-pencil, tracing paper, 55.2×80.5cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

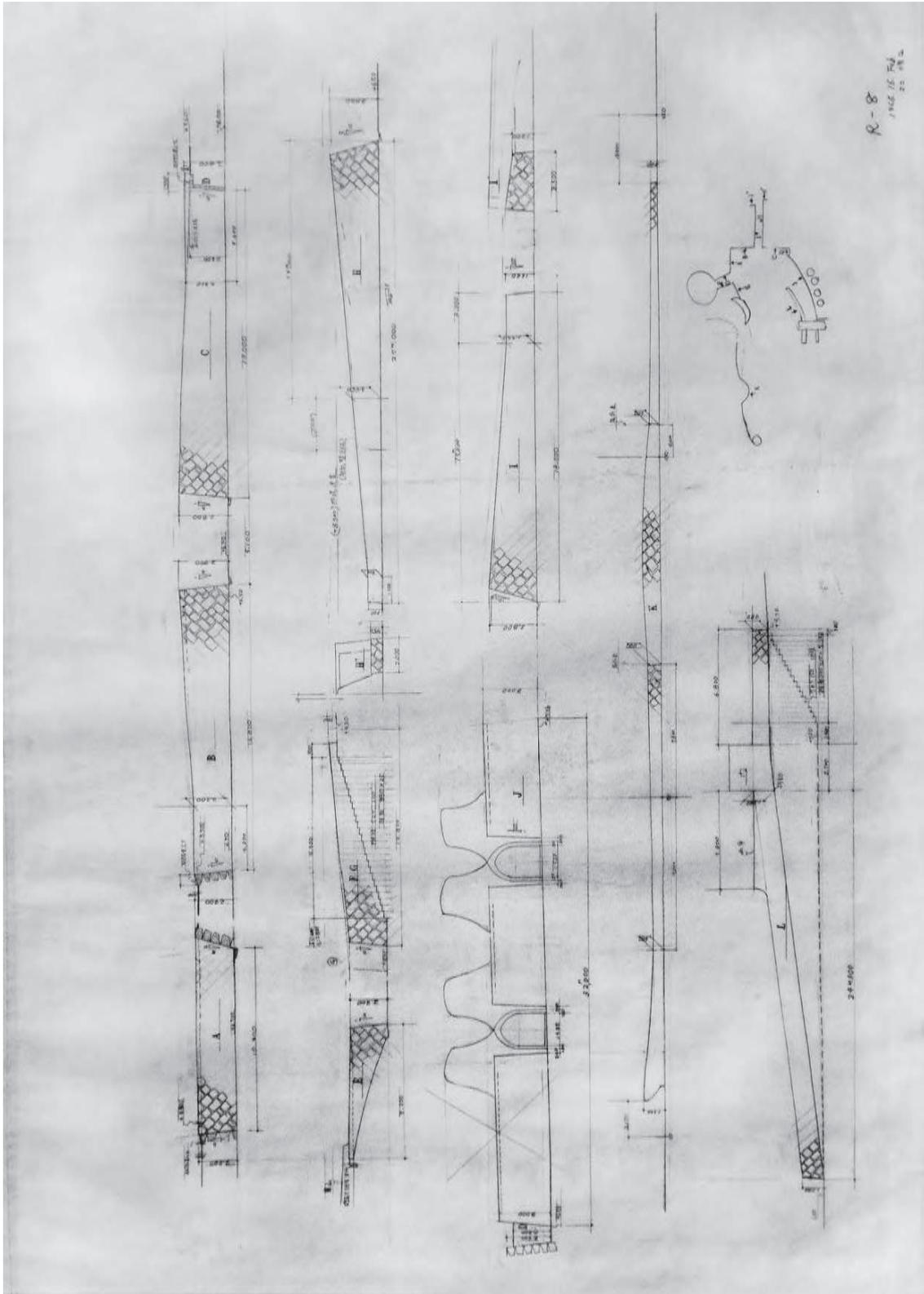


fig.29 イサム・ノグチ《こどもの国 A地区児童遊園 R-8 児童遊園入り口通路擁壁立面図》作図：大谷研究室(旧設計連合)、1966年2月16日/22日、鉛筆、トレーシングペーパー、54.5×79.5cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
 Isamu Noguchi (R-8 Elevations of Masonry Retaining Walls, Forecourt and Passageway of Playground in Zone A of the Kodomo No Kuni) Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), Feb.16/22, 1966, pencil, tracing paper, 54.5×79.5cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

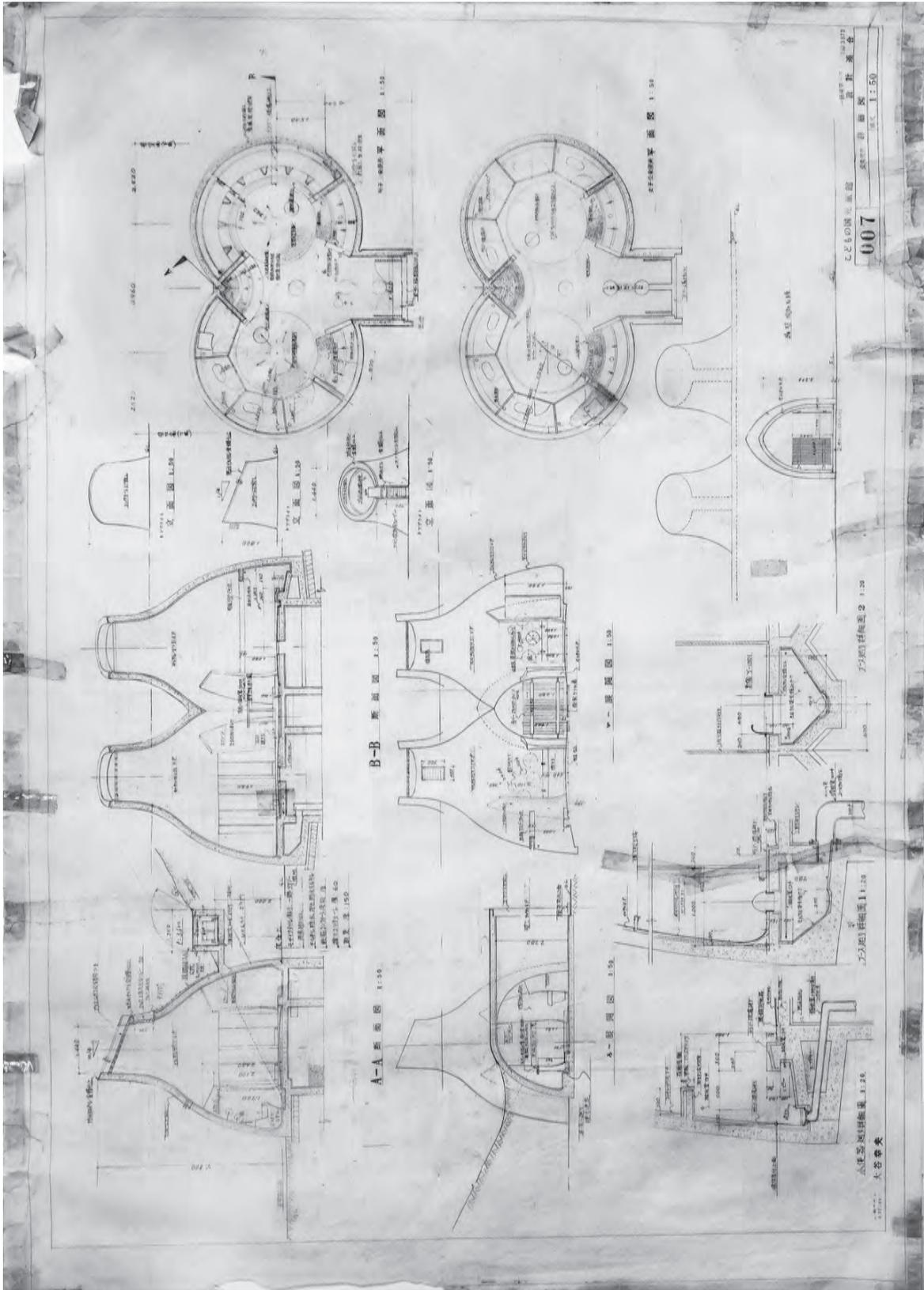


fig.30 イサム・ノグチ、大谷幸夫《こどもの国児童館 007 公衆便所詳細図》作図：大谷研究室(旧設計連合)、1966年、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、57.8×82.2cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
 Isamu Noguchi, Otani Sachio (007 Detail Drawings of Public Toilet, Childrens House of the Kodomo No Kuni) Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1966, pencil, ink, tracing paper, 57.8×82.2cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

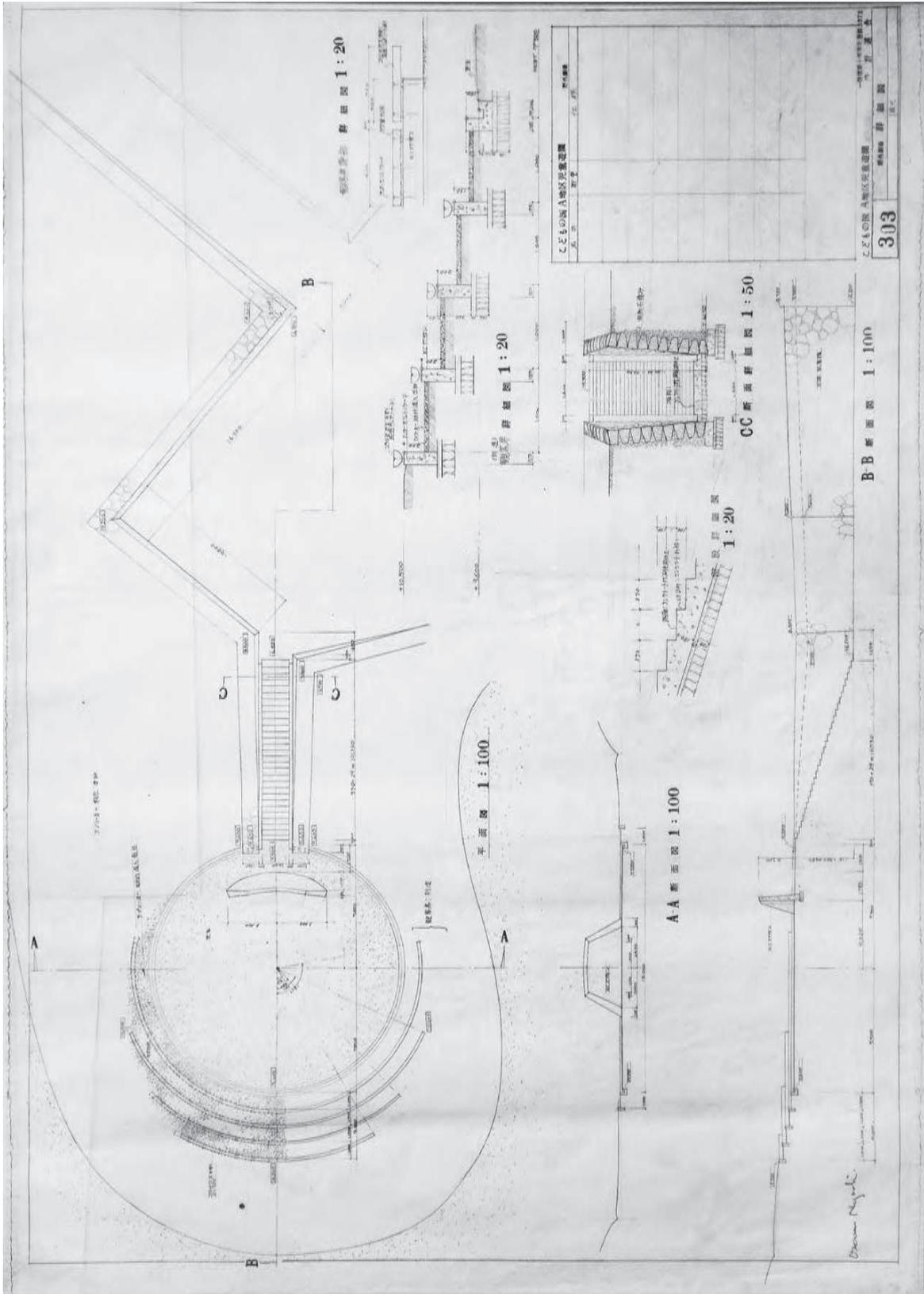


fig.32 イサム・ノグチ《こどもの国 A地区児童遊園 303 野外劇場詳細図》作図：大谷研究室(旧設計連合)、1965-66年、鉛筆、トレーシングペーパー、55.1×80.2cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
 Isamu Noguchi (303 Detail Drawings of "Open-air Theater." Playground in Zone A of the Kodomo No Kuni) Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1965-66, pencil, tracing paper, 55.1×80.2cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

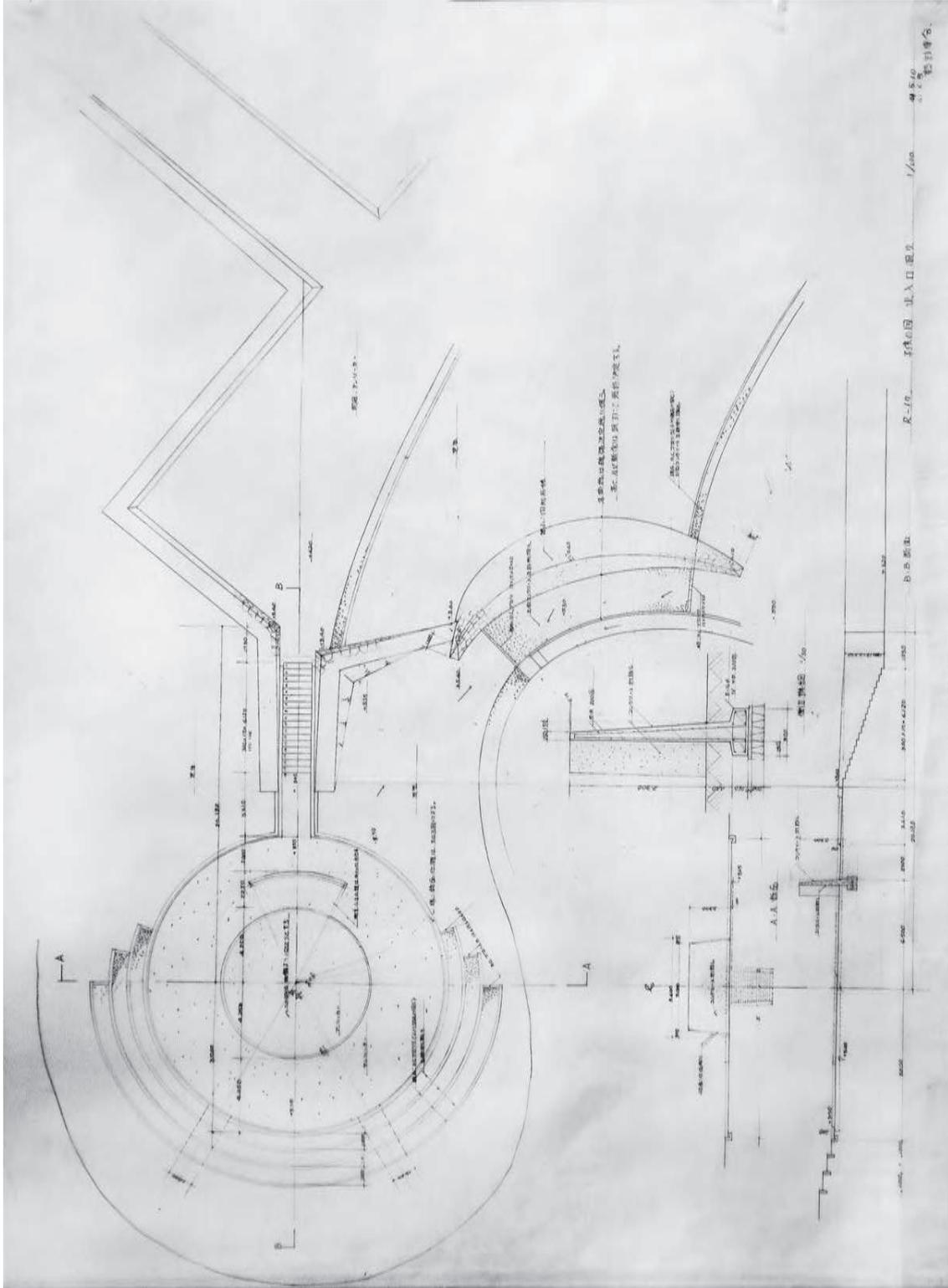


fig.33 イサム・ノグチ《R-17 子供の国出入り口周り》作図：大谷研究室(旧設計連合)、1966年5月10日、6月8日、鉛筆、トレーシングペーパー、53.8×75.5cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
 Isamu Noguchi (R-17 Detail Drawings of Forecourt and Open-air Theater. Playground and Children's House in Zone A of the Kodomo No Kuni) Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), May 10, June 8, 1966, pencil, tracing paper, 53.8×75.5cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

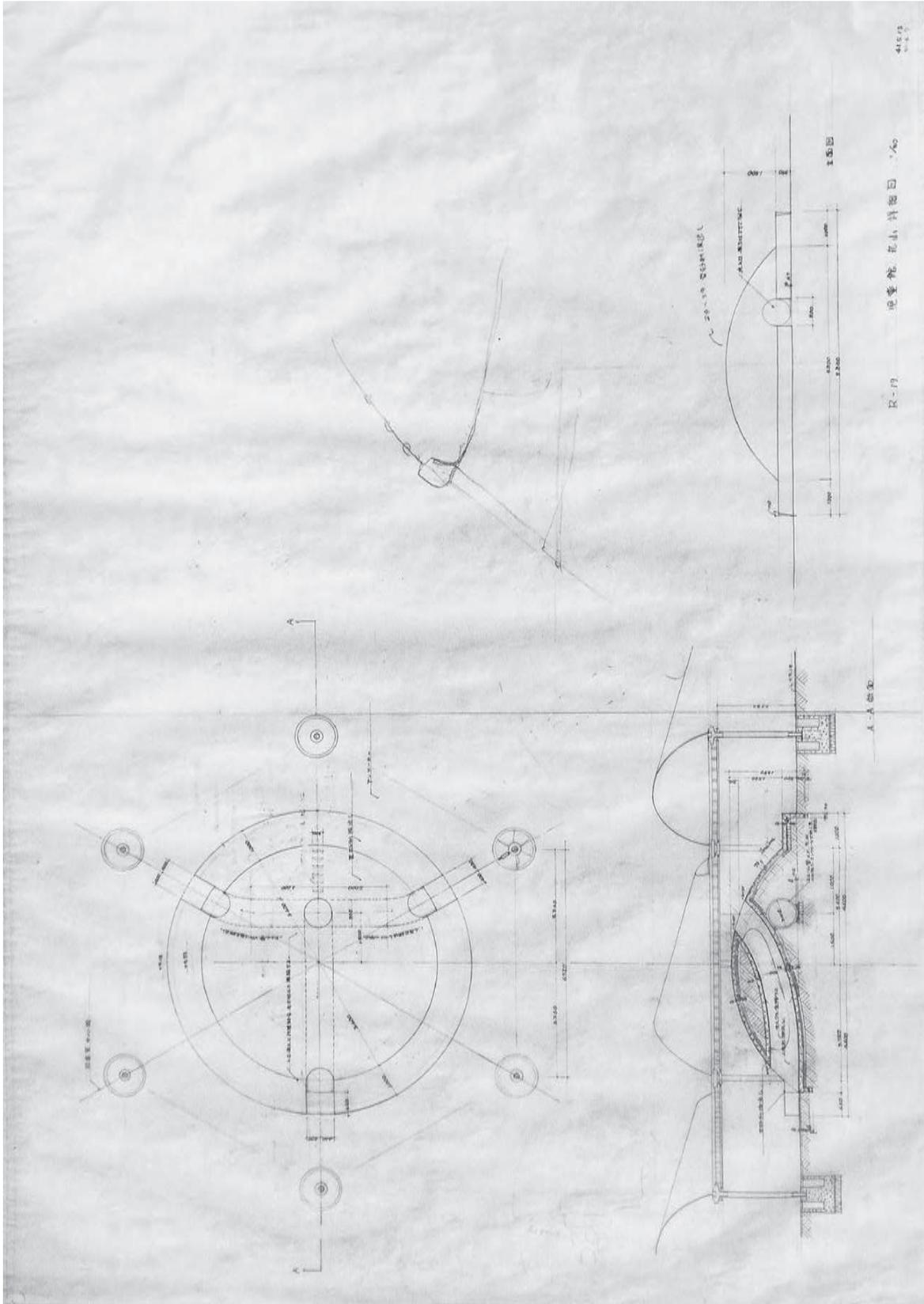


fig.37 イサム・ノグチ《R-19 児童館丸山詳細図》作図：大谷研究室(旧設計連合)、1966年5月13日/6月7日、鉛筆、トレーシングペーパー、55.4×79.9cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
 Isamu Noguchi (Detail Drawings of "Maruyama." Children's House in Zone A of the Kodomo No Kuni) Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), May 13/June 7, 1966, pencil, tracing paper, 55.4×79.9cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

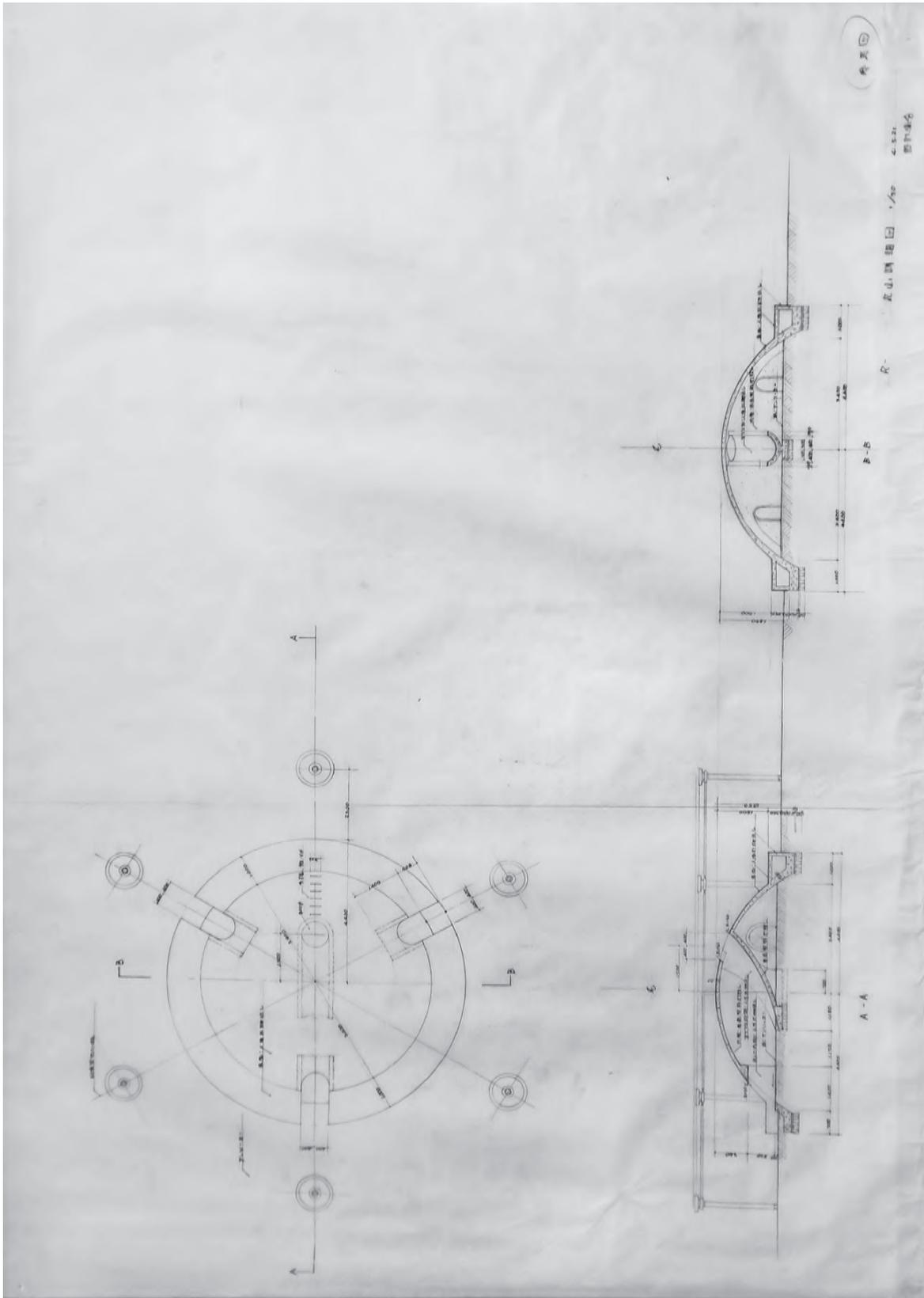


fig.38 イサム・ノグチ(R-丸山詳細図(参考図))作図：大谷研究室(旧設計連合)、1966年5月21日、鉛筆、トレーシングペーパー、55.0×84.2cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
 Isamu Noguchi (R- Detail Drawings of "Maruyama." Children's House in Zone A of the Kodomo No Kuni) Drawn by Otani Associates (former Sekke Rengo), May 21, 1966, 55.0×84.2cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

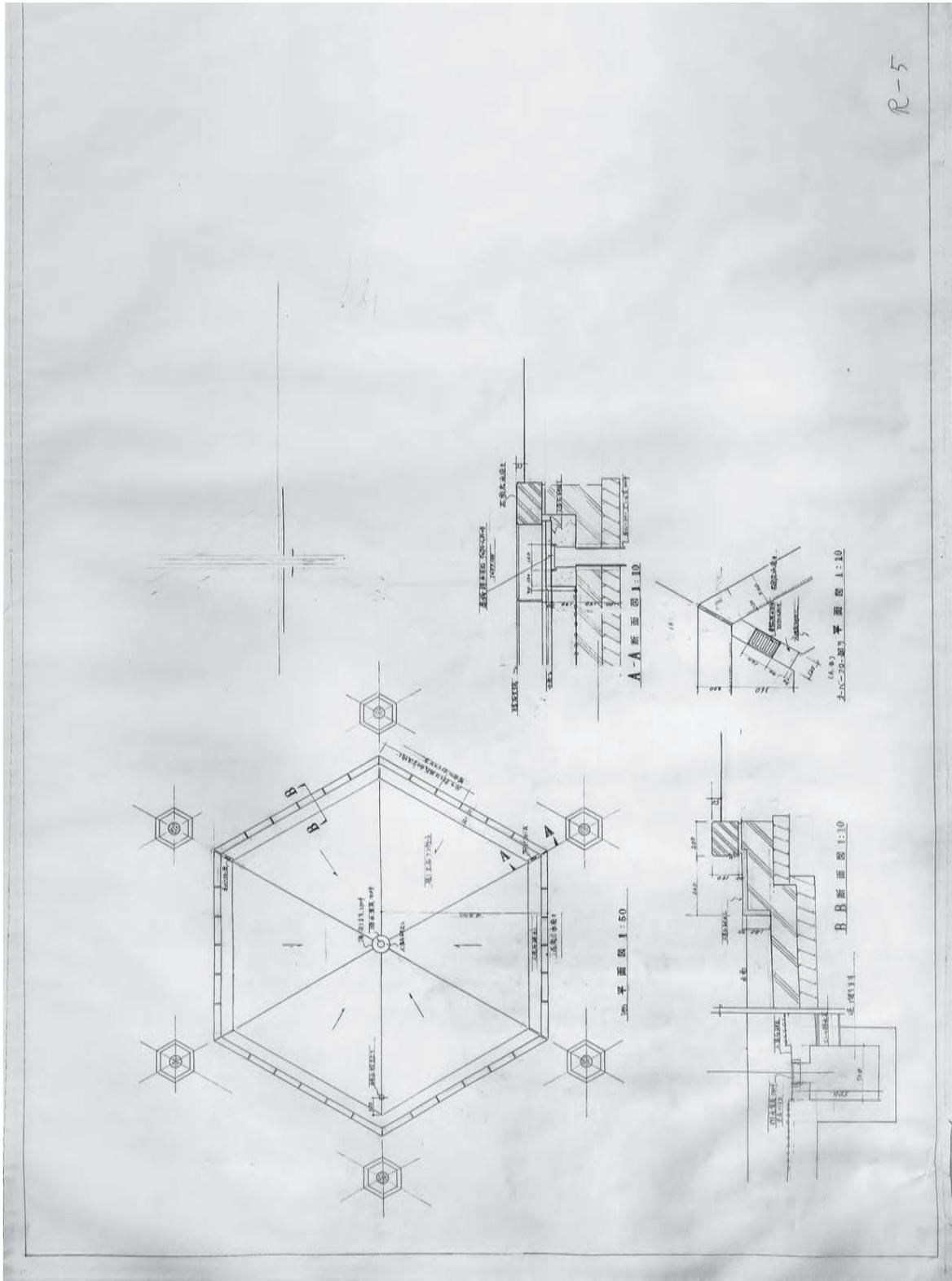


fig.39 大谷幸夫《*こどもの国児童館 R-5 六角池詳細図(池3)》作図：大谷研究室(旧設計連合)、1966年、鉛筆、トレーシングペーパー、54.8×79.7cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
 Sachio Otani (R-5 Plan and Sections of Hexagon Pond (Pond 3), Children's House in Zone A of the Kodomo No Kuni) Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1966, pencil, tracing paper, 54.8×79.9cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

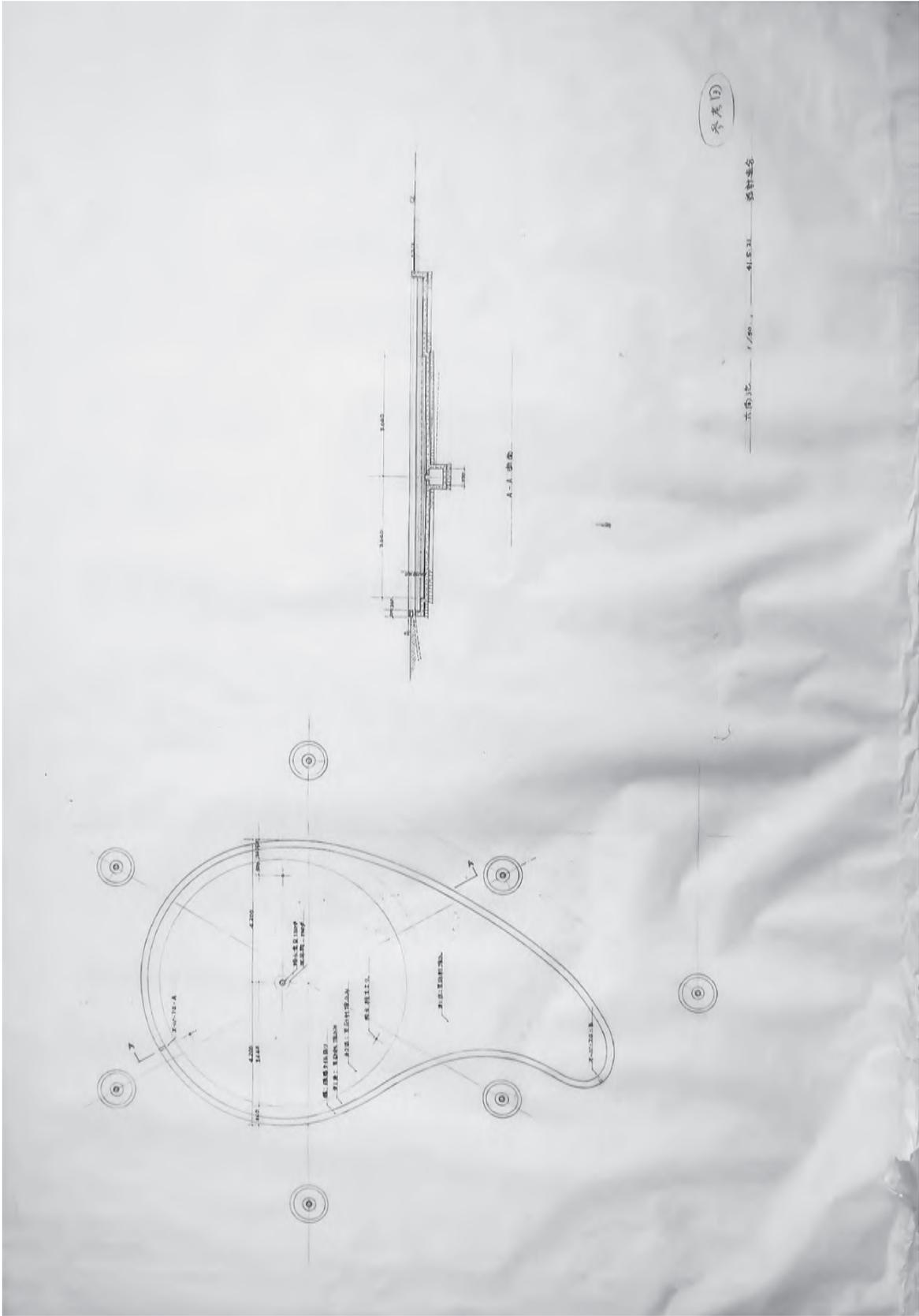


fig.40 イサム・ノグチ、大谷幸夫《R-5 六角池(池3) 参考図》作図：大谷研究室(旧設計連合)、1966年5月21日、鉛筆、トレーシングペーパー、55.7×83.6cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
 Isamu Noguchi, Sachio Otani (Detail Drawings of "Hexagon Pond" (Pond 3)) Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), May 21, 1966, pencil, tracing paper, 55.7×83.6cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

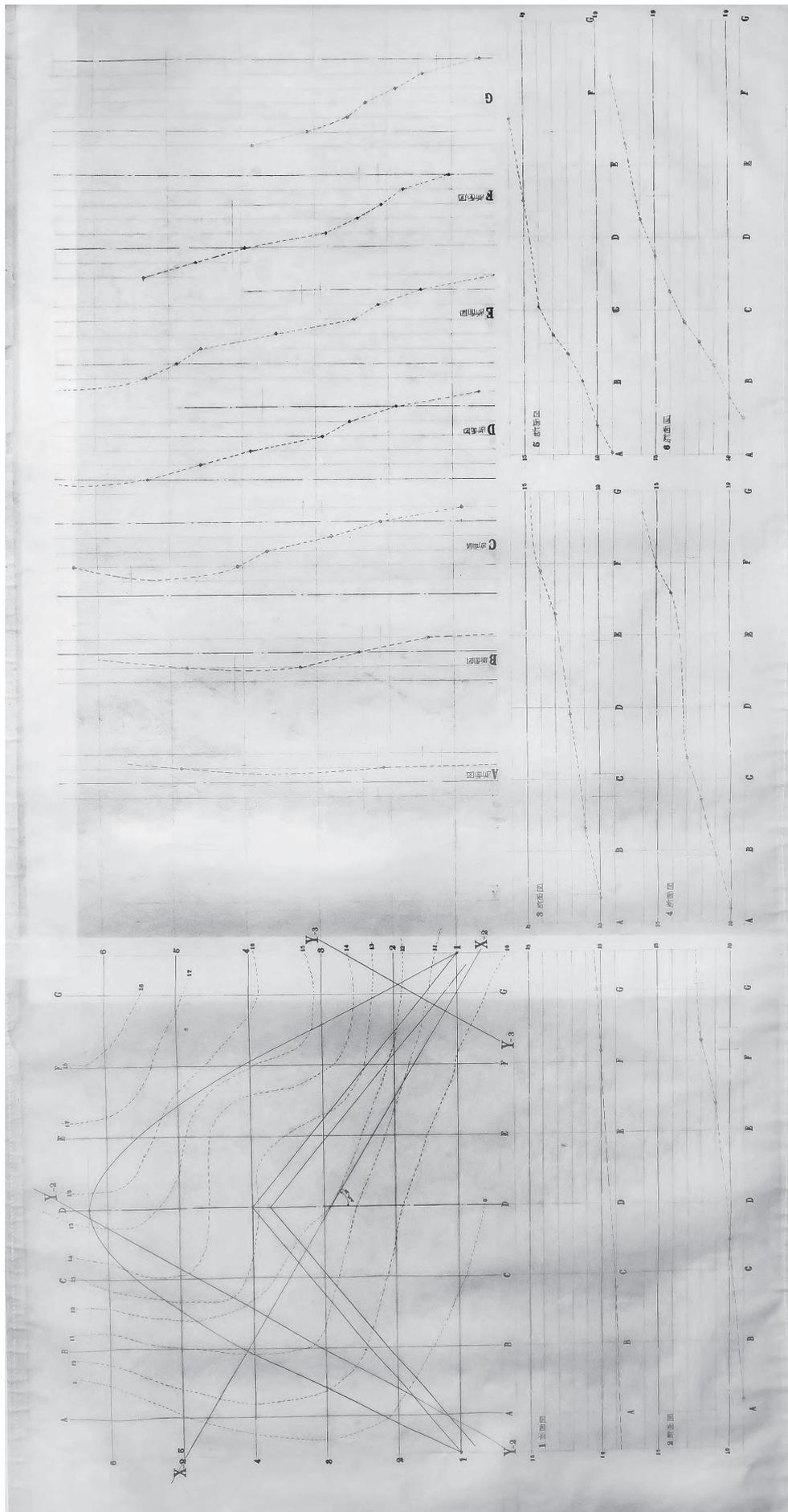


fig.43 イサム・ノグチ、大谷幸夫《*こどもの国児童館西側擁壁平面図・地形立面図・断面図》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1965-1966年、鉛筆、トレーシングペーパー、54.7×109.3cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
 Isamu Noguchi, Sachio Otani <Contoured Plan, Elevations and Sections of the Site for Retaining Wall by Children's House in Zone A of the Kodomo No Kuni>
 Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1965-1966, pencil, tracing paper, 54.7×109.3cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

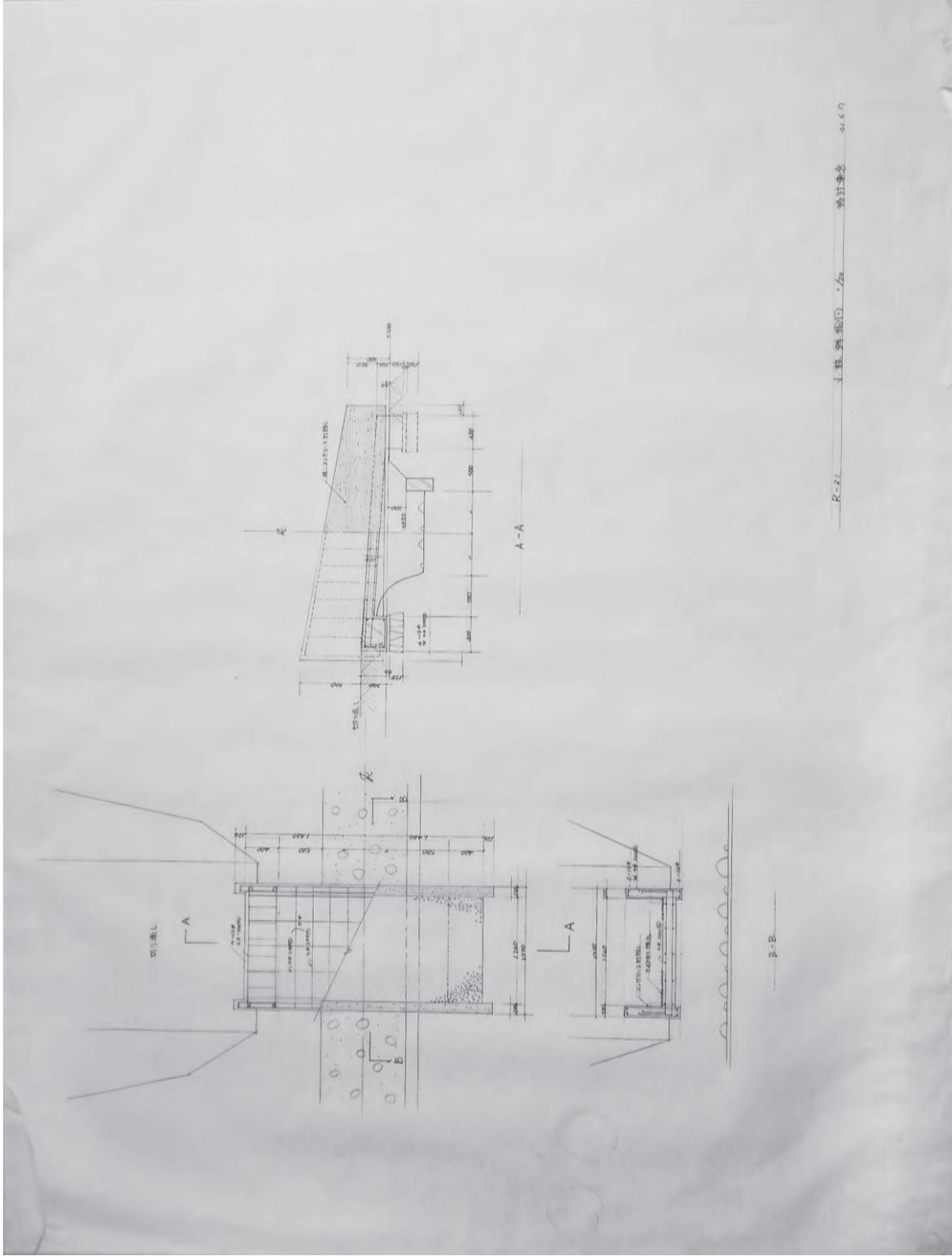


fig.44 イサム・ノグチ《R-21 小橋詳細図》作図：大谷研究室(旧設計連合)、1966年6月7日、鉛筆、トレーシングペーパー、57.5×77.7cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
 Isamu Noguchi (R-21 Detail Drawings of Ponticulus by Children's House in Zone A of the Kodomo No Kuni) Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), pencil, tracing paper, 57.5×77.7cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

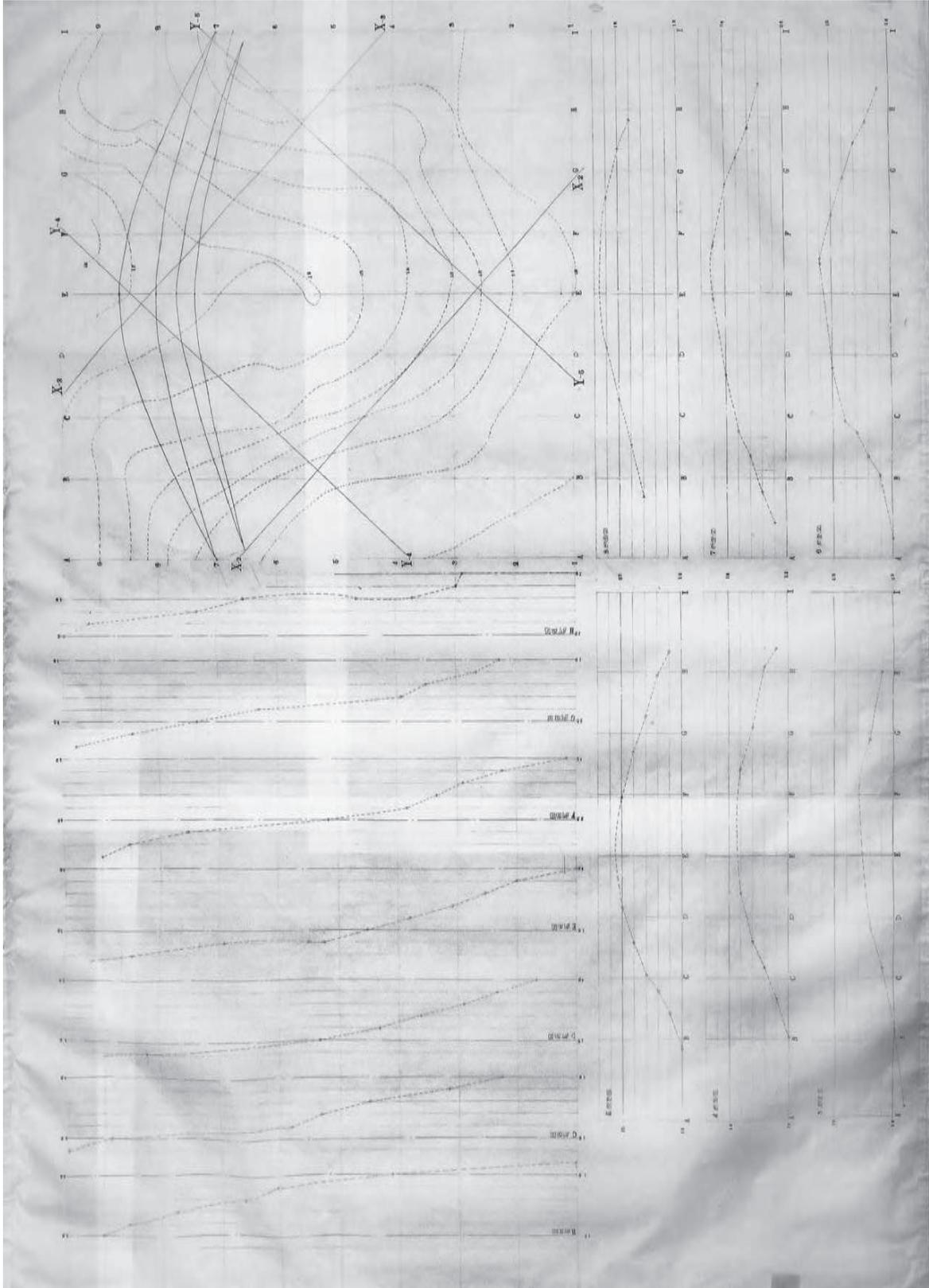


fig.45 イサム・ノグチ《*児童館西側切り通り平面図・地形断面図》作図：大谷研究室(旧設計連合)、1965-66年、鉛筆、トレーシングペーパー、78.8×108.3cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
 Isamu Noguchi (Plan and Sections of Pathway cutting the hill behind Children's House in Zone A of the Kodomo No Kuni) Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1965-66, pencil, tracing paper, 78.8×108.3cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

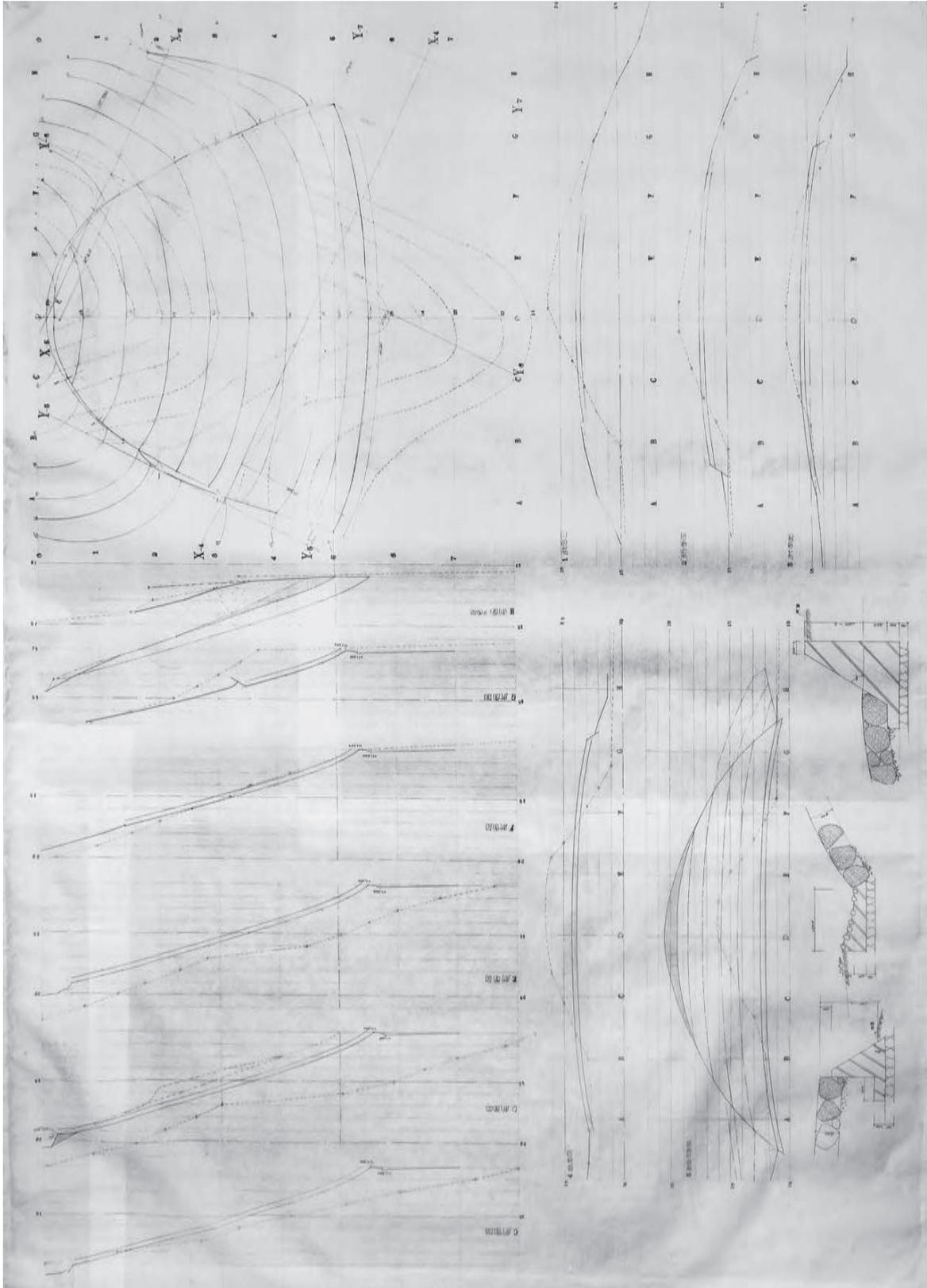


fig.48 イサム・ノグチ《*こどもの国 A地区児童遊園 岩山平面図・断面図》作図：大谷研究室(旧設計連合)、1965-66年、鉛筆、トレーシングペーパー、78.6×108.2cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
 Isamu Noguchi (Contoured Plan, Elevations and Sections of the Site for "Iwayama") Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1965-66, pencil, tracing paper, 78.6×108.2cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

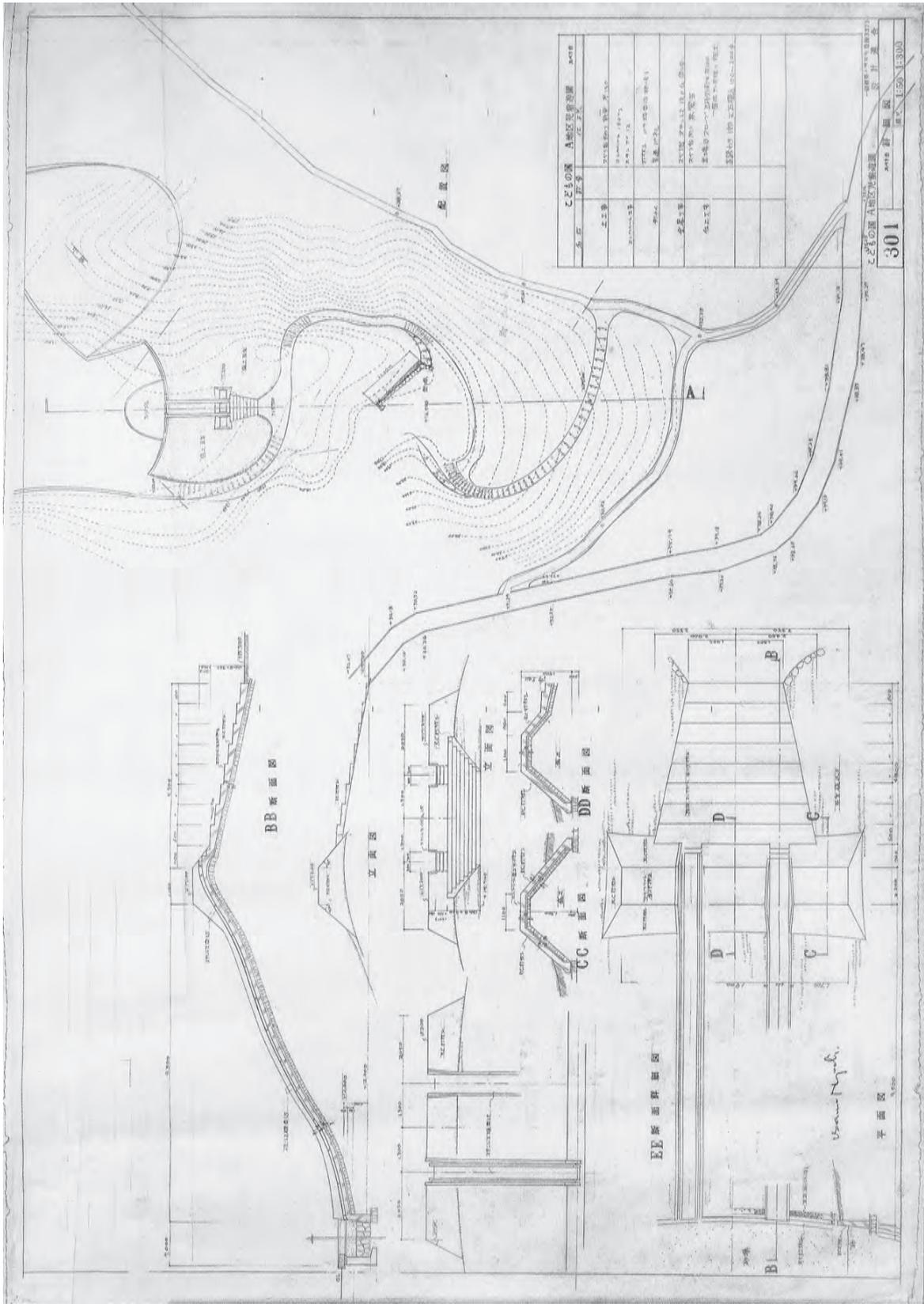


fig.49 イサム・ノグチ《こどもの国 A地区児童遊園 301 スペリ台詳細図》作図:大谷研究室(旧設計連合)、1965-66年、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、54.9×80.1cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
 Isamu Noguchi (301 Detail Drawings of the "Slides" in Zone A of the Kodomo No Kuni) Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1965-66, pencil, ink, tacing paper, 54.9×80.1cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

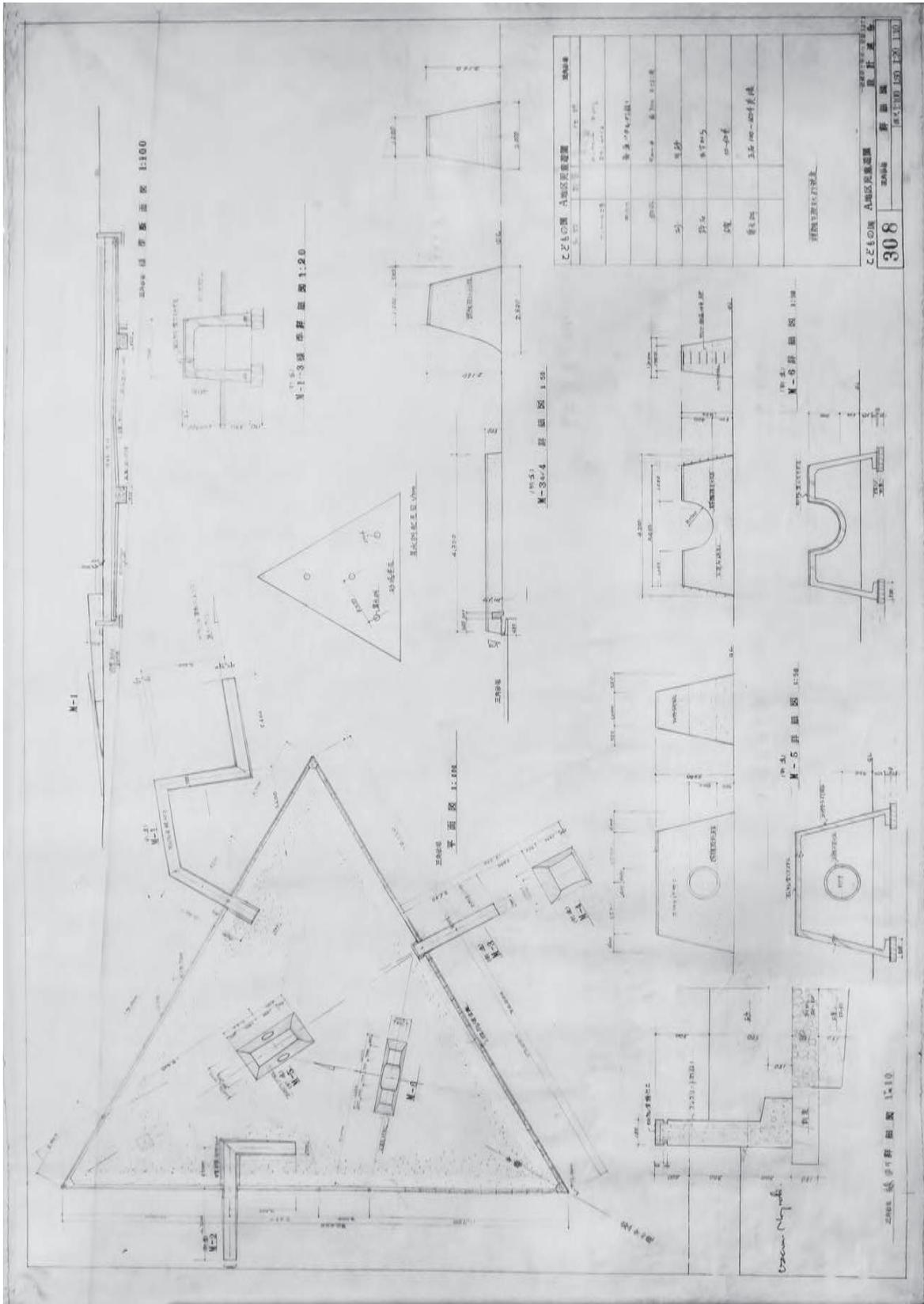


fig.50 イサム・ノグチ《こどもの国 A地区児童遊園 三角砂場詳細図》作図：大谷研究室(旧設計連合)、1965-66年、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、54.7×80.0cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
 Isamu Noguchi (Detail Drawings of "Triangle Sandpit." Playground in Zone A of the Kodomo No Kuni) Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1965-66, pencil, ink, tracing paper, 54.7×80.0cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

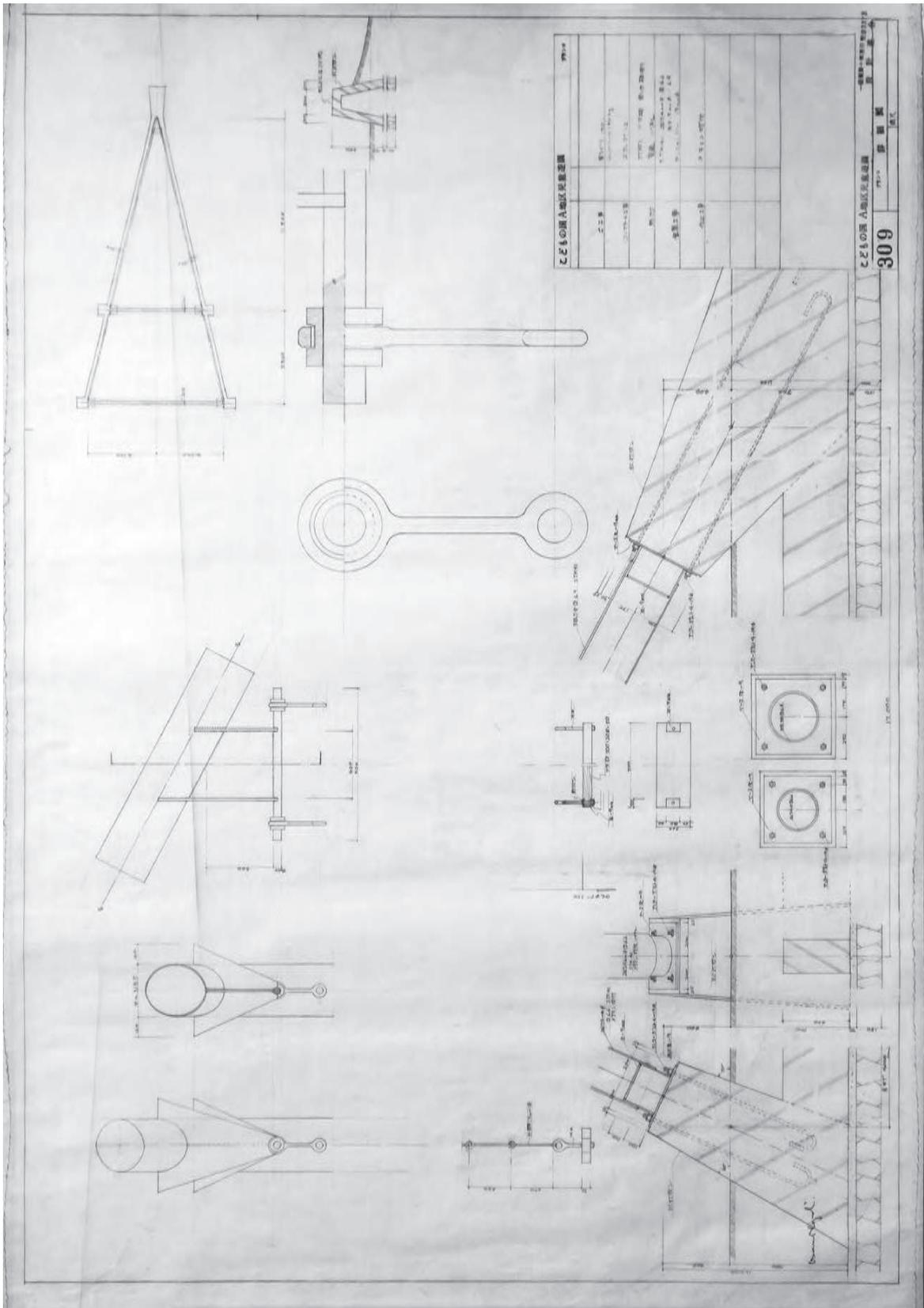


fig.53 イサム・ノグチ《子どもの国A地区児童遊園309 ブラコン詳細図》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1965-66年、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、54.8×80.0cm、大谷研究室旧蔵「子どもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
 Isamu Noguchi (309 Detail Drawings of "Swings." Playground of Zone A of the Kodomo No Kuni) Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo) 1965-66, pencil, ink, tracing paper, 54.8×80.0cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

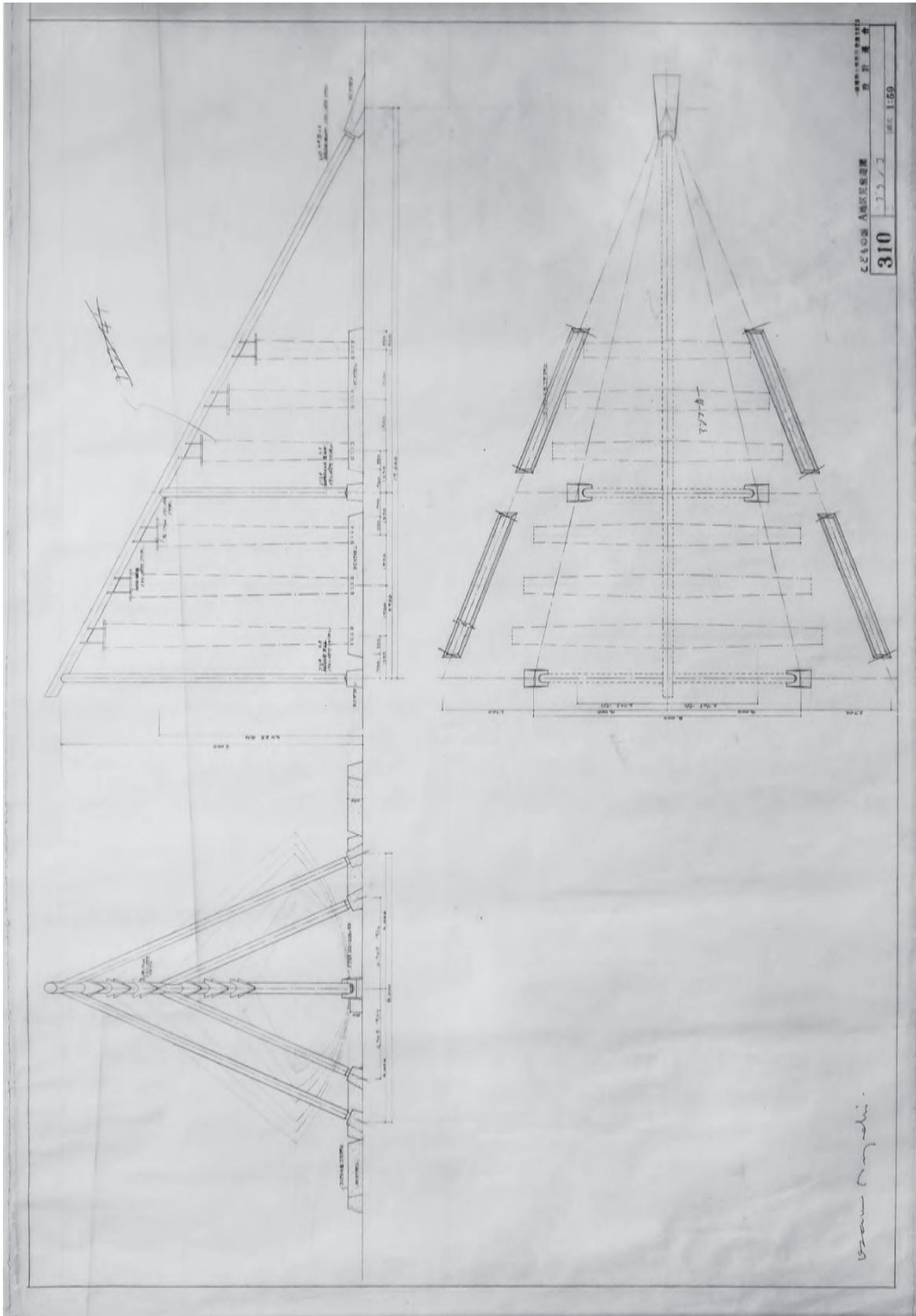


fig.54 イサム・ノグチ《こどもの国 A地区児童遊園 310 ブランコ(立面図・平面図)》作図：大谷研究室(旧設計連合)、1965-66年、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、55.0×80.2cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
 Isamu Noguchi : 〈310 Elevations and Plan of "Swings." Playground of Zone A of the Kodomo No Kuni〉 Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1965-66, pencil, ink, tracing paper, 55.0×80.2cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

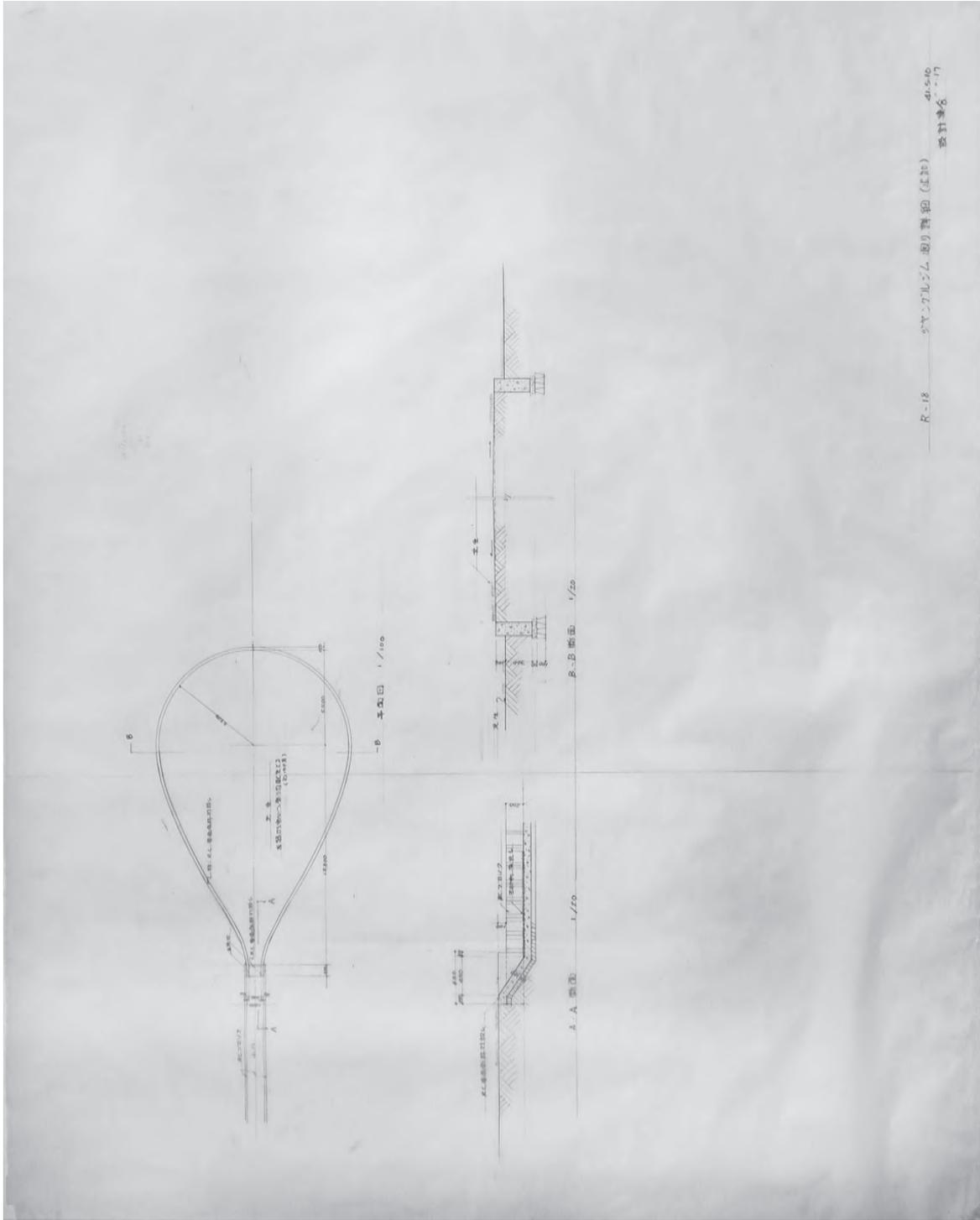


fig.58 イサム・ノグチ《R-18 ジャングルジム 廻り詳細(追加)》作図：大谷研究室(旧設計連合)、1966年5月10日/17日、鉛筆、トレーシングペーパー、56.2×74.0cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
 Isamu Noguchi (R-18 Detail Drawings of Jungle Gym Place (additional)) Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), May 10/17, 1966, pencil, tracing paper, 56.2×74.0cm, Otani Associates Kodomo No Kumi Collection

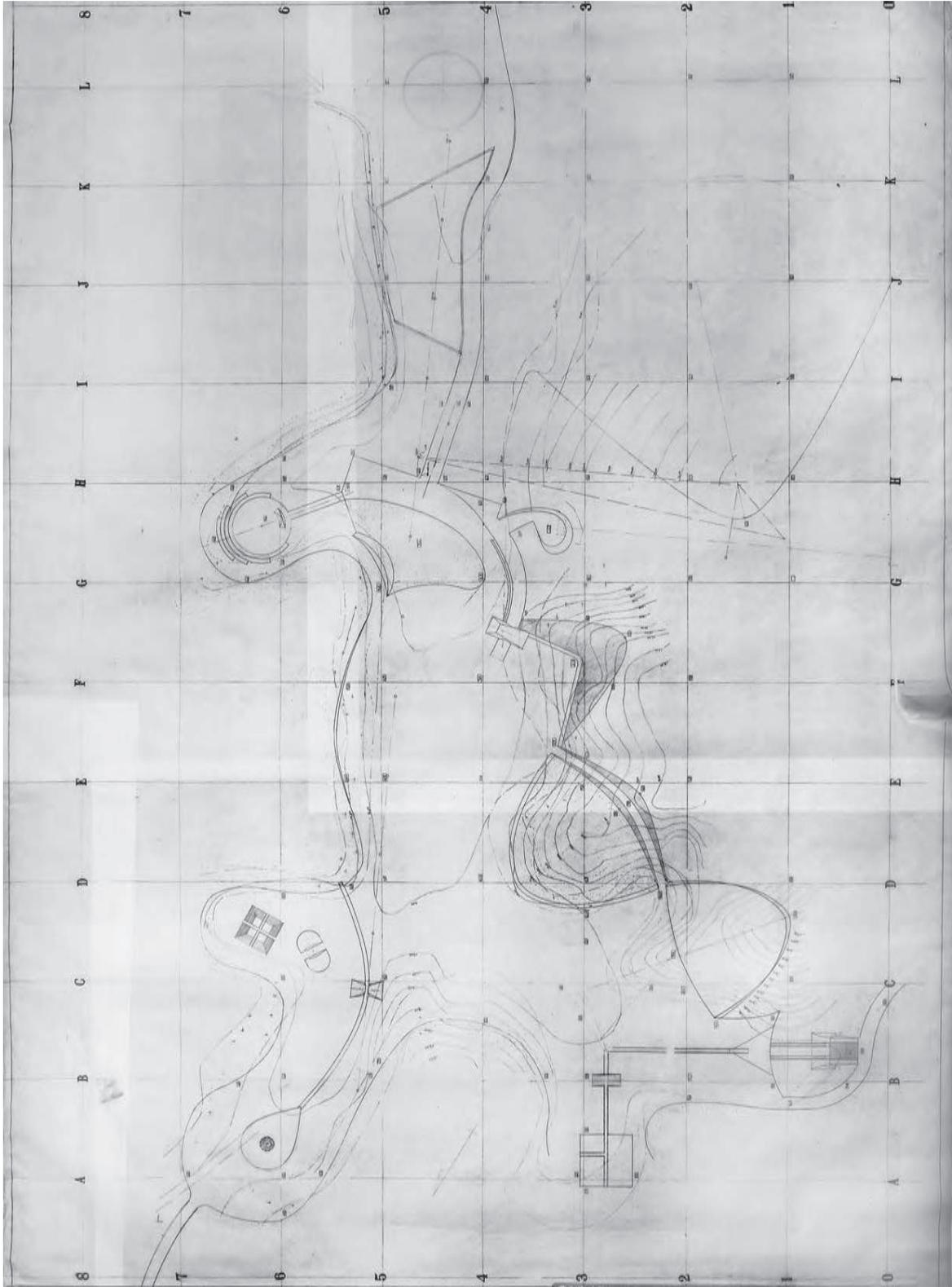


fig.02 イサム・ノグチ《*こどもの国A地区児童遊園(N1配置図(コンタ入り))》作図：大谷研究室(旧設計連合)、1965年、鉛筆、色鉛筆、インク、トレーシングペーパー、78.6×109.3cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
 Isamu Noguchi (*N1 Contoured Site Plan of Playground in Zone A of the Kodomo No Kuni) Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1965, pencil red-pencil, ink, tracing paper, 78.6×109.3cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection



fig.63 イサム・ノグチ《*こどもの国A地区児童遊園 N2 配置図》作図：大谷研究室(旧設計連合)、1965年、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、78.7×107.7cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
 Isamu Noguchi (*N2 Site Plan of Playground in Zone A of the Kodomo No Kuni), Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1965, pencil, ink, tracing paper, 78.7×107.7cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

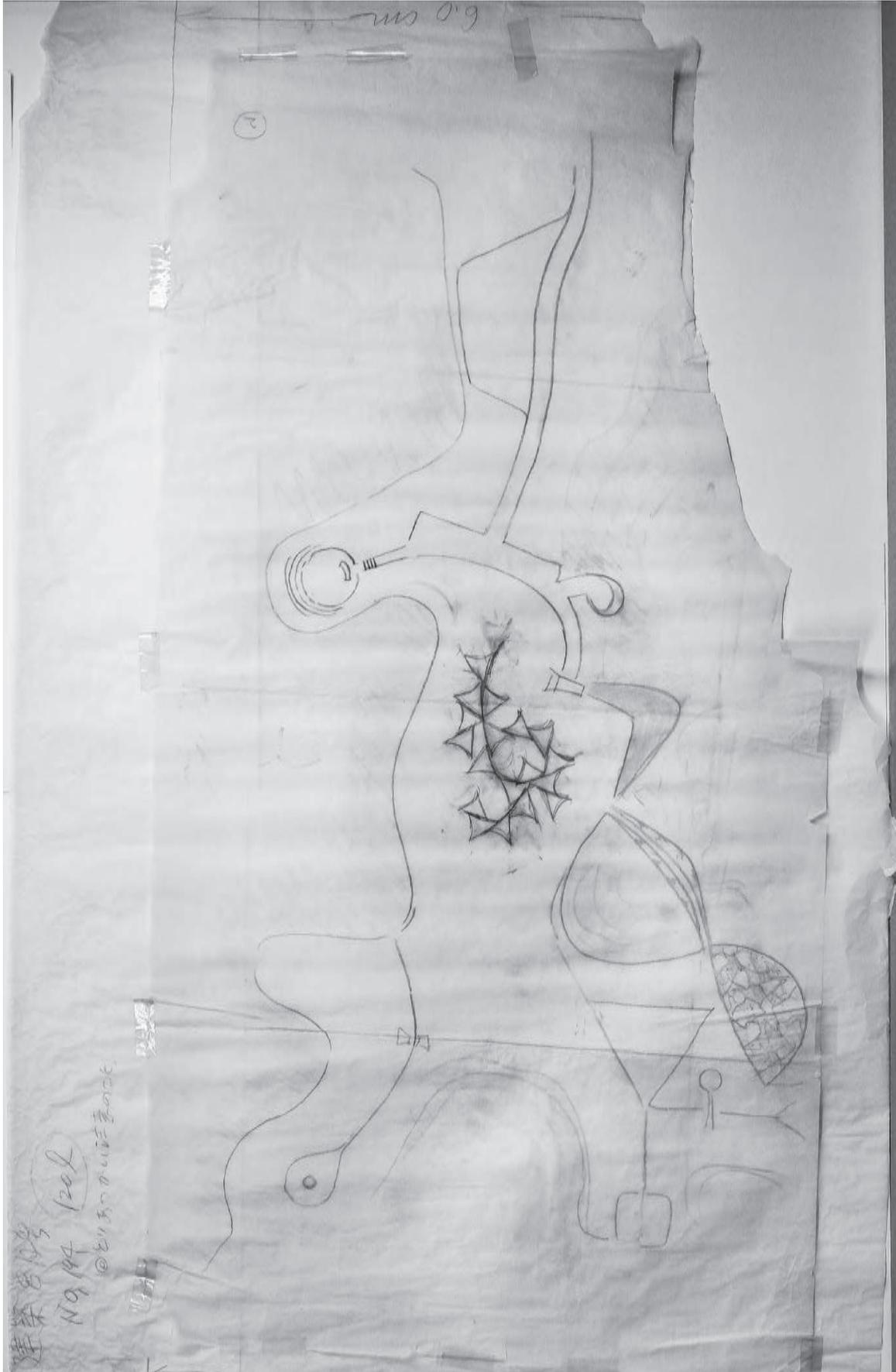


fig.65 大谷幸夫《こどもの国児童館 屋根エスキース》1965年、鉛筆、色鉛筆、トレーシングペーパー、73.7×121.8cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
 Sachio Oani (Sketch of Roofs. Children's House in Zone A of the Kodomo No Kuni) 1965, pencil, red-pencil, tracing paper, 73.7×121.8cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

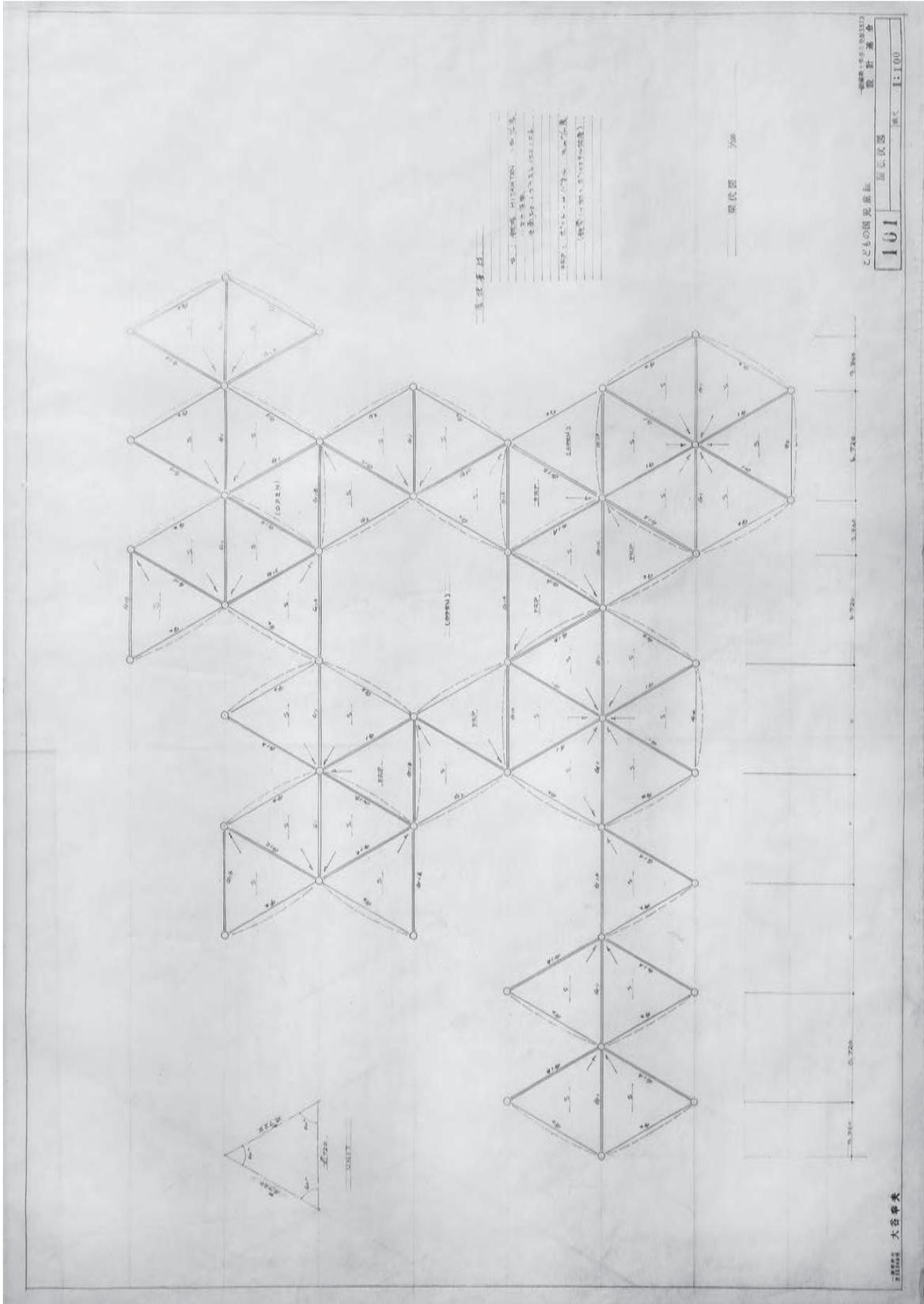


fig.66 大谷幸夫《子どもの国児童館 101 児童館屋根伏図》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1965-66年、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、55.2×81.0cm、大谷研究室旧蔵「子どもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
 Sachio Otani (101 Roof Plan of Children's House in Zone A of the Kodomo No Kuni) Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1965-66, pencil, ink, tracing paper, 55.2×81.0cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

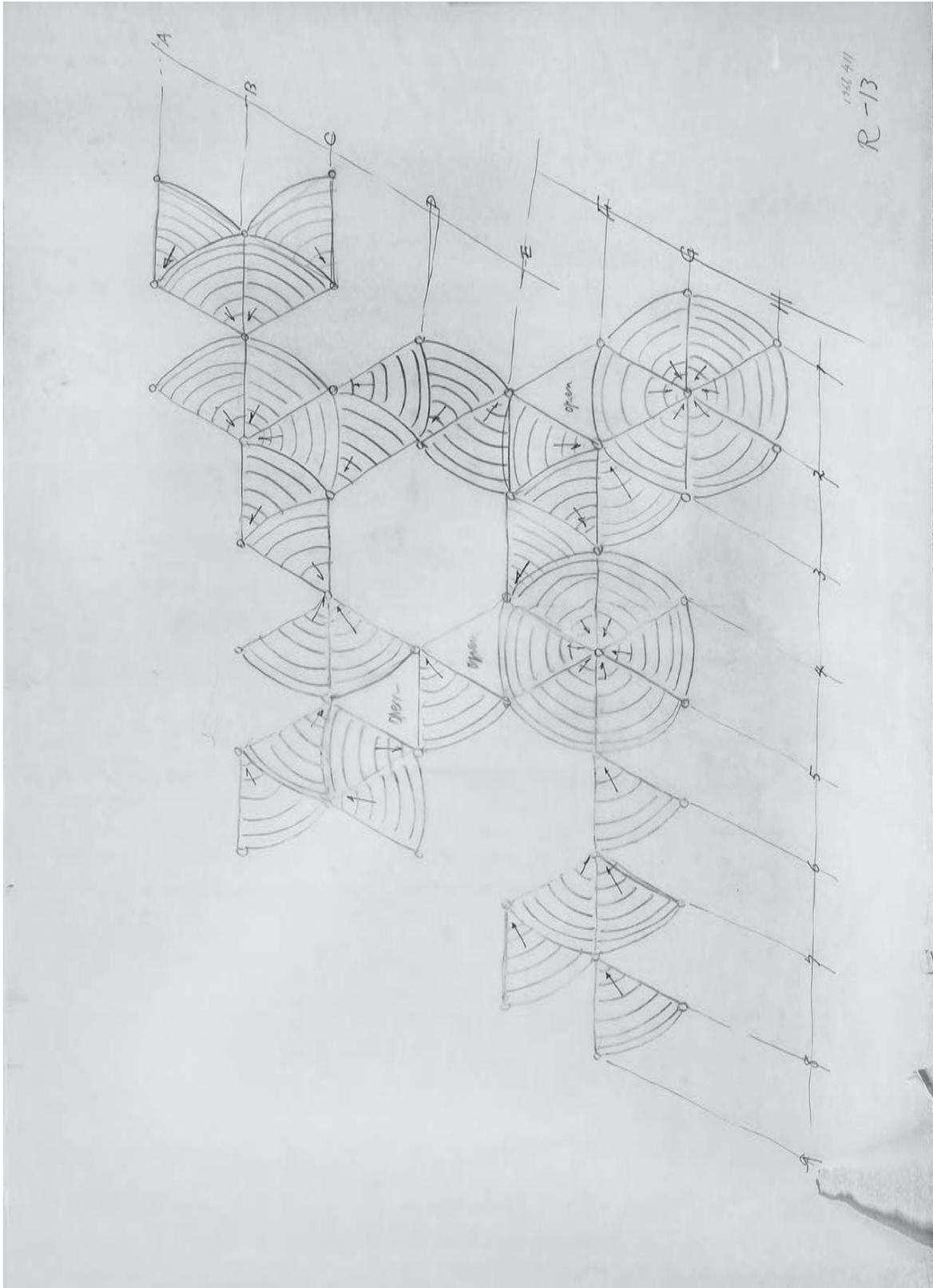


fig.67 大谷幸夫《*こどもの国児童館 R-13 児童館屋根平面図》作図：大谷研究室(旧設計連合)、1966年4月11日、鉛筆、トレーシングペーパー、57.5×84.3cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群
 Sachio Otani (R-13 Roof Plan Sketch. Children's House in Zone A of the Kodomo No Kuni) Drawn by Otani Associates, April 11, 1966, pencil, tracing paper, 57.5×84.3cm, Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

Isamu Noguchi and Sachio Otani's Playground and Children's House at Kodomo No Kuni: A Plaster Model and Drawings from the Otani Associates

Nakamura Naoaki

(Senior Curator, Yokohama Museum of Art)

Along with monuments, memorials, parks, and gardens, playgrounds occupied an important place in the work of the socially committed sculptor Isamu Noguchi (1904-1989). Beginning with a proposal for Play Mountain (model, 1933), Noguchi designed playgrounds and playground equipment for seven known projects, most of which were never realized. The first to be realized, though not fully completed, was the playground he designed for Zone A of Kodomo No Kuni (Children's Land), a national recreation center for children located in Yokohama and Machida (1965-1966). In this work, Noguchi collaborated with the architect Sachio Otani (1924-2013), who designed the Children's House, consisting of a number of shelters for the playground, and provided Noguchi with access to his studio and staff to work on the model and drawings.

The exact history of Noguchi's Kodomo No Kuni playground is unclear. There is an original plaster model of the entire playground, but photos of the completed site dating from 1966 show that only the shelters and some elements of the playground around them were actually built. Moreover, the majority of these structures were destroyed in 1985, with the exception of a few components designed by Noguchi. As a result, it is difficult to determine what stood on the site.

In 2023, Mr. Takanori Yamamoto, director of Otani Associates (the firm Otani established after separation from Sekkei Rengo in 1967), gifted the Yokohama Museum of Art the original plaster model of the Kodomo No Kuni playground as well as all of the 157 extant drawings (including sketches and documents) for Noguchi and Otani's Kodomo No Kuni projects. The Otani Associates Kodomo No Kuni Collection (or the Otani Collection) enables us to trace the evolution of Noguchi's design as far as the construction stage. It also provides us with insight into the collaborative process between the sculptor and the architect. Notably, the collection also includes two of Otani's plans for the Children's House predating Noguchi's participation in the project, shedding new light on the history of this project.

This paper includes descriptions of the plaster model and selected drawings from the collection, and also summarizes Noguchi and Otani's Kodomo No Kuni projects, spanning Otani's first plan for the Children's House in 1964 to the completion in late 1965 of Noguchi's original playground design (as represented by the model). Changes to the playground design, the initial construction, and an additional project, which was eventually abandoned will be discussed in a future paper, also scheduled to include an inventory of the Otani Collection.

The paper deals with the following subject matter:

1. Overview of the Otani Associates Kodomo No Kuni Collection
 - A. Original plaster model of the whole playground, created after a clay model in 1965, photos of which were first published in the January issue of *SD architecture* magazine the following year.
 - B. 157 Drawings, sketches, and related documents, which can be divided into 12 groups based on the design process.
2. The construction of the Kodomo No Kuni projects, beginning with the 1961 master plan by Takashi Asada, who assembled a design group made up of 14 specialists from the fields of architecture, landscaping, sculpture, and zoology. Otani, one of five architects, was tasked with designing the

Children's House. He submitted two plans for the work in 1964 and 1965, the first of which called for the structure to be built next to Kiyonori Kikutake's School in a Grove (in the southern part of the Kodomo No Kuni). This plan included educational functions such as several classrooms and a library. The second plan envisioned the work on the site that eventually housed Noguchi's playground. The complex consisted of a classroom, library, and a large free space for playing and resting. These plans were unrelated to Noguchi's playground design.

3. Initially, Noguchi was not an official member of Asada's design group; he was instead referred to as a "special participant." In a 2006 interview with the author, Otani recalled that Asada recommended Noguchi as the designer of the playground. In a signed but undated contract between Noguchi and the Kodomo No Kuni Construction Committee (another document suggest that the contract was signed on November 1, 1965), the artist agreed to provide the basic design for the playground and a children's house in Zone A. This would then be supplemented with a more detailed plan made by Otani.
4. Noguchi came to Tokyo in mid-August 1965 and stayed in Japan until late November to visit the playground site and work in Sekkei Rengo studio. He suggested that Otani use Buckminster Fuller's Geodesic Domes and Octet Truss (exhibited at the Museum of Modern Art, New York in 1959) as the basis for the Children's House and two jungle gyms. Although Fuller and Shoji Sadao were receptive to this idea, Otani instead began looking for a similar kind of construction.
5. According to Otani, he was waiting for Noguchi to complete his playground design before submitting a plan for the Children's House. The Otani Collection includes the architect's first draft, showing triangular roofs in the middle of Noguchi's playground design. The arabesque design of the roofs was, as Otani wrote, inspired by falling leaves blowing down a street in late autumn, which might suggest that Noguchi's design was nearing completion in November.
6. Mr. Koichi Fujita, a designer at Otani's studio during the period, executed a majority of the drawings of the playground and Children's House. In a 2023 interview with the author, he recalled that Noguchi only made clay models, which Fujita then used to make his drawings under Noguchi's supervision. This suggests that the original drawings, depicting the playground as whole and the individual pieces of equipment, were made after the models. In an *Asahi Shimbun* newspaper interview (published on November 27, 1965), Noguchi said that the proposal was based on his over 30 years of experience in the field.
7. In the final section of the paper, the author analyzes Noguchi's plaster model of the entire playground by comparing each element with drawings in the Otani Collection. By examining how the elements changed over the course of multiple drawings, and comparing them with 1966 photos of the completed site, the author was able to determine which parts were actually built. Some of the elements were also based on earlier Noguchi projects such as Ala Moana Park, United Nations Playground, and Riverside Park Playground.